

---

# ひまわりと狼

藤枝 なお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひまわりと狼

### 【Nコード】

N7866R

### 【作者名】

藤枝 なお

### 【あらすじ】

ある日名前も知らない先輩にバイクで送ってもらうことになった陽菜。今は恋愛よりも部活・・・とっていたのに、親しくなっていくうちにどんどん惹かれていっちゃう。手の届かない人だとはわかってるけど、どうしても諦められない！明るく元気な陽菜の、ほのぼの恋愛模様。

## 登場人物紹介（前書き）

お話が進むにつれて、徐々に増えていく予定です。

## 登場人物紹介

### 【三崎家】

三崎 陽菜 16歳

高1。小さい子と音楽が大好きな、明るく元気な女の子。部活では吹奏楽部に所属、トランペットを担当。

三崎 大翔 18歳

陽菜の兄で高3。陽菜とは別の進学校に通う。小学校から続けているバスケが特技。

三崎 陽翔 15歳

中3。陽菜の弟。危なっかしい姉の保護者気分。しっかり者。

三崎 結翔 5歳

保育園の年中。姉が大好きな泣き虫さん。

### 【周囲の人々】

日向 一樹 18歳

高3。陽菜と同じ高校に通う勉強もスポーツもできるが性格は粗暴。だけど生徒会長。バスケット部所属。

皐月 颯太 18歳

一樹のクラスメイト。生徒会副会長で、唯一一樹に物申すことができる人物。バスケット部。

山本 葵 16歳

陽菜のクラスメイト。陽菜と同じく吹奏楽部で、同じトランペットパート。

島田先生 50歳

結翔の通う保育園の先生。陽菜が通っていた頃からいるベテラン先生。

田浦さん夫妻（65・60）

三崎家の近所に住む。両親の生前から兄弟に良くしてくれる。書道教室を開いている。

岩淵 悠馬 28歳

スーパ―銭湯で出会ったお巡りさん。実は三崎家の近所に住んでいて、息子さんが結翔と同級生。何かと相談に乗ってくれるお兄さん。童顔。奥さんとは3年前に離婚。

岩淵 悠大 5歳

結翔の友達で、悠馬の息子。とても優しく、誰からも好かれる少年。母親がいないために陽菜によく懐く。

大谷 修也 16歳

葵の彼氏。バスケット部の準レギュラーになるほどの実力者。爽やかな好青年。

乾 和真 16歳

陽菜の元カレ。

## プロローグ

春爛漫。真新しい制服に袖を通すと、心なしか背筋がしゃきつと  
するような気がした。これから、待ちに待った高校生活が始まる。

高校までは駅まで自転車で10分、電車で10分、駅から学校ま  
で徒歩15分という長い道のりだけど、初めての電車通学でそれ  
すらも楽しみだった。

「なっちゃん・・・」

「あー・・・ゆうくん、今日は陽翔はるととね？」

私は急いで家を飛び出すと、自転車に跨り駅へと向かった。

「陽菜ひな！ギリギリ！」

「じゅめんっー！」

校門をくぐると、同じ中学出身の山本葵やまもと あおいが掲示板の前で待っ  
ていた。そう、クラス発表だ。

ドキドキしながら自分の名前を探す。9クラスもある中で、葵と  
同じクラスになれるとは思ってなかったけど・・・

「やった！陽菜！同じクラスだよ。ほら、3組！」

「えっ、ホントだ！やった！」

2人で飛び上がって喜んでいると、役員らしき先輩が私の肩をト

ントンと叩いてきた。もしかしてはしゃぎ過ぎちゃったかな・・・  
？なんて心配して振り返ると、その手には私の自転車の鍵。

「す、すみませんっ・・・」

「いや、気を付けて」

初日から恥ずかしい。私は高校からはしっかりするって決めたの。  
大人の女性を目指すんだから。

「ねえ、今の先輩かつこよかったね！」

「あ、あんまり顔見てなかった」

「もうっ！陽菜っていつもそうだよ。イケメンに興味ないってい  
うかさ。高校生っていったら恋愛でしょ！いい恋しようね！」

葵のこの言葉はもう何年も聞かされている言葉である。だから高  
校生に限ってないんじゃない・・・なんて突っ込もうかとも思ったけど、  
チャイムが聞こえたので急いで教室に入った。

## プロローグ（後書き）

新連載です。よろしければお付き合いよろしくお願ひします。



## 出会い(1)

「三崎<sup>みいづ</sup>さん、俺と付き合ってください」

「じめんなさい」

定番の体育館裏で、私は隣のクラスの男子に頭を下げていた。つていうか、私が頭を下げる必要もないと思うんだけど、一応ね。

ゴールデンウィークも終わり、次第に暑さが増してくる5月の半ば。私は中学の時と同じく、吹奏楽部に入って大会を目指していた。

つまり、恋愛よりも今は部活に集中していた。葵なんてちゃっかり4月の終わりにはもう彼氏をつくって、恋愛を楽しんでいるけどね。

恋愛も、出来ればしたいなって思うんだけど、何しろ好きな人も気になる人もまだいないから、当分は部活に集中することになりそう。

「えー、また断っちゃったの？」

「うん、だってよく知らない人だし」

練習中の葵に合流して、今の出来事を掻い摘んで説明した。葵曰く、今私が断った彼はかなりのモテ男で、中学時代はバスケット部のエースだったイケメン君らしい。でも知らないものは知らないんだから、しょうがない。

「まあ陽菜は家でイケメンたちを見慣れてるからね」

「そんなこともないけど・・・」

私が告白を断ると、葵はいつも決まってそう言う。別に顔で選んでるわけじゃないんだけど……。

「でも中学時代に付き合ってた乾君、すごくイケメンだったよね」  
「別に……」

乾和真<sup>いぬいかずま</sup>……。中学2年生の時から、高校に入る直前まで付き合いっていた彼。高校に受かったと同時に、一方的に別れを告げられた。どうやら塾で知り合った女の子に乗り換えたらしい。あー、思い出すと未だにムカつく。

「まあね、乾君よりもいい男はいっぱいいるよ。あ、サッカー部今日はもうお終いなんだ」

葵は1人でよく話す子だ。私が口をはさむ前にころころ話題が変わるんだもん。

「あんたたち、話してばっかりいないで練習しなさい」

「はあい」

「すみませーん……」

先輩にやんわりと注意されて、私たちは練習へと戻った。

高校の部活は長い。それがこの1か月の感想だった。練習内容も濃くて、すごく楽しいんだけど、時間が長いのがちょっと大変なところ。だって、平日の練習が終わるのが夜7時で、それから片づけたりなんだかんだしていたら、家まで早くても1時間はかかる。そ

の頃にはもう暗いのだ。

しかも今日は駅まで行ったのに、教室に明日までの課題を忘れてきたのを思い出し、戻るといふ最悪なパターン。こりゃあ家に着くのは9時かな・・・？

守衛さんに許可をもらって、足早に教室へと向かう。うう・・・夜の学校って怖い・・・。教室の電気をつけ、急いで机の中を探る。

「あ、あつた！」

目当てのものを見つけたので、後は逃げるように立ち去ろう。そう思って、最早小走りで玄関へ向かっていたら、後ろから足音が聞こえてくる。

足音の主は私と違って歩いているみたいなんだけど、それなのにどンドン近づいてくるような気がして、急に怖くなった。もう『廊下は走らない』なんて守ってられない。こっとなったらダッシュだ！

「おい」

「きゃー！...！」

いきなり話しかけられて、私は思わず叫び声をあげてしまった。と同時に、腰が抜けて床に座り込んでしまった。恐る恐る見上げると、黒くて大きな影が、私を覗き込むようにして見ている。

「や、やめてっ・・・連れて行かないでっ！」

「連れて行かないでっ・・・お前学校に泊まる気か？」

「へ・・・？」

呆れたような声にもう一度、よく目を凝らしてみると、私を覗き込んでいたのはこの学校の生徒だった。

「あ、すみません・・・びっくりして・・・」

「俺も鼓膜が破れるかと思った」

「すみません・・・」

男の人は、こんな時間に生徒がいるのを不思議に思って声をかけたらしい。そういうあなたは何でこんな時間にいるんでしょう？

「俺はいつもの事だ。守衛のおっさんも知ってる」

「は、そうなんですか・・・」

「ま、忘れ物取ったなら遅くならないうちに帰れよ」

そう言って立ち去ろうとする男性。でも・・・

「ま、待ってください!」

「・・・んだよ・・・」

「こ、腰が抜けてしまって・・・」

この時、男性の眉間に皺がよるのを、私は見逃さなかった。申し訳ないのはやまやまなんだけど、このまま置いていかれるのも困るのですよ・・・。

「お前んち、どこだよ」

「あ・・・K市なんです・・・」

「電車かよ・・・」

「あの、とりあえず校門のところまででいいですからっ!」

とにかく学校の中に置いていくのだけは勘弁してほしかった。男

性は私をおんぶすると、玄関まで連れて行って、靴まで履き替えさせてくれた。

守衛さんになんだかにやにやされたような気もしたけど、見なかったことにしよう。だって、そんなに甘いものじゃないんだもん。

校門まででいいって言ったのに、男性は校門には向かわず、自転車小屋に向かった。自転車通学ということは、この辺の人なのかしら……？

と思つたらバイク……！？バイクが許可されるのって、ものすごく遠方で、かつ電車の便が悪い地域だ。そんな地域から通っているの？

「言つとくけど、俺もK市だ」

「え、じゃあなんでバイク……」

「……」

要は無許可ってことね。この人の他にもバイクに乗ってきている人は結構いるみたいで、学校側もそれを黙認しているところがある。この人もその中の1人ってことか。男性は私をバイクの後ろに座らせると、ヘルメットを手渡した。

自分も素早くヘルメットをかぶると、男性はエンジンをふかす。う、うるさい……。

「……まっ……る」

「はい？」

エンジンの音がうるさくて声が聞こえない。私が聞き返すと、男

性は耳元までやって来て、低く「俺にすっかりつかまってる」と囁いた。

一瞬、顔の近さにドキツとしたけど、男性の方は表情などまったく変えずに、そのまま自分もバイクに跨った。ぼーっとしてたら、手を引っ張られて腰に回された。そうだ、つかまってないと振り落とされちゃう。

私がつかまっただのを確認すると、男性は勢いよくバイクを発させた。うう！慣性の法則が・・・っ！

バイクは初めてじゃないけど、この日は元々風が強かったこともあってものすごい風圧だ。男性の腰にしがみついていないと本当に無理。どんどん上がるスピードに、思わず頬を背中にくっつける。すると、柑橘系の爽やかな香りがした。

てつきり駅に向かっていているのかと思ったら、バイクは駅とは反対の方向へ走っていく。もしかして、家まで送ってくれるのかな？だってこの男性も家はK市って言ってたし。

私の予想は的中したようで、国道を走っていくうちに、見慣れた風景が広がってきた。男性はうちの近くのコンビニに入ると、バイクを止めた。

「家どこ？」

「あ、もうこの近くのので大丈夫です。ありがとうございました」

腰ももう大丈夫そうだし、ここからなら歩いて5分もかからない。私は男性に深々と頭を下げると、鞆に入っていた封の切られていないペットボトルのお茶を差し出した。

「こんなものですみません。じゃあ、ありがとございまして」

そう言って、私はそのまま立ち去った。時計を見ると8時半。うん……ギリギリかもしれない。

玄関のドアを開けると、中から大きな鳴き声が聞こえてきた。ああ、間に合わなかったか……。

「ただいま……」

「なっちゃん！」

靴を脱ぐ間もなく、大泣きしていた張本人が走ってきて私に抱きついた。私は彼をひよいと抱き上げると、涙を手で拭ってやる。

「ただいま、ゆうくん。ごめんね、遅くなっちゃったね？」

弟のゆうくんこと、結翔<sup>ゆづり</sup>は5歳で、8時半から9時の間には眠くなって機嫌が悪くなる。機嫌が悪くなって、泣き出してしまったときは、私があやしてやらないと寝ないのだ。

「おかえり、よかった。陽菜が帰って来てくれて……」

「ごめん、今日忘れ物しちゃって……」

ぐったりした表情で居間から出てきたのは長男の大翔<sup>ひなた</sup>。私の2歳上の高校3年生で、私とは別の高校に通っている。

「陽菜ご飯出来てるよ。食べてないでしょ？」

「ごめん。ありがと、陽翔はると」

陽翔はもう1人の私の弟で、中学3年生。家から学校までが1番近いので、必然的に家事や結翔のお迎えは陽翔がやってくれる。

そう。うちには両親がいない。3年前、交通事故で帰らぬ人になってしまったのだ。それでも、保険金や遺産で、私たち4人が大学に通えるだけのお金があったのが、幸いだ。

形式的には、叔父夫婦に引き取られたことになったんだけど、叔父の家に4人で押しかけるわけにもいかず、私たちは兄弟だけで住んでいるのだ。



出会い(1)(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

## 出会い(2)

翌日、私は玄関を出て愕然とした。自転車がない……。そうだ、昨日バイクで近所まで送って来てもらったから、自転車は駅に置きっぱなしなんだ。

駅まで自転車で10分の道のりだから、歩いたら30分はかかる。それじゃ完璧に遅刻だよ！

「お兄ちゃん！」

「どうした？」

「駅まで送ってって」

「自転車は？」

「……訳は帰ったら話すから！」

お兄ちゃんはじろりと私を睨みつけて、何か言いたそうな顔をしていたけど、今はとにかく時間が無いの！支度をして出てきたお兄ちゃんの自転車の後ろに立ち乗りをして、私は駅へと向かった。

駅に着いたのは、電車の来る2分前だった。危ない……。走ってホームに向かおうとするとお兄ちゃんが呼び止めた。何よ、時間がないのに！

「夜は、わかったな？」

「……はい」

今日の夜は尋問だな……。なんて、そんなことを考えながら、急いで電車の来る3番ホームに向かった。

「あんたアホだねー。せつかく課題取りに戻ったのに、やってくるの忘れるなんて」

「だって・・・昨日帰ったら結翔が泣いててさ。すっかり忘れちゃってたよ」

「そつかあ、ゆうくんが大変だったのか。まあ頑張つて！私先に部活に行くね」

「うん。先輩に言っておいて」

数学の国里先生はすつごく怖くて、課題を忘れたらその倍の量の課題を課せられる。しかも放課後やって、終わるまで帰らせてもらえないんだから・・・。

私数学苦手なんだよね・・・。はあ、今日も遅くなったらお兄ちゃんに何て言ったらいいんだろ。

「うう・・・わかんない・・・」

これが現国とか古典だったら、ちゃっっちゃか終わらせて部活にも間に合うのに、よりによって数学なんだもん。全然進まない・・・。

ただ今7時。部活の終わる時間・・・ってことはまた校舎内が寂しくなっちゃうじゃない！・・・そう思ったら怖くなってきちゃった・・・。

「もうヤダ・・・帰りたい・・・」

「おい」

「はいっ!」

「またお前か・・・」

昨日の……。今度は電気もついているし、顔もはっきり見える。ん？この人どこかで会ったような……？

「あー！鍵拾ってくれた方ですね？」

「今さらか……。記憶力ないのか？」

そんな言い方ないじゃない！っていうか普通あんな程度じゃ覚えてないわよ。ムツとしてしていると、男性が私のノートを覗き込んだ。

「いやあっ！見ないでください！」

「……酷いな……」

「……」

「これ、帰れないぞ？」

男性も国里先生のやり方を知っているらしく、本気で心配そうに言われてしまった。そんなことは自分でもわかってますよ……。でも精一杯やってこれなんだもん、どうしようもないじゃない。

「手伝ってやるうか？」

「え……」

「これじゃ日付が変わっても帰れないぞ」

「う……お願いします……」

悔しいけど、この人の教え方はとても分かりやすかった。私の躓つまずいているところを的確に、そして簡単に説明してくれる。

「あの、ここなんですけど……」

「一樹だ」

「はい？」

「日向一樹ひなたつが、3年だ」

あ、今さらながらこの男性の名前を聞いていなかったことに気づく。申し訳なく思っていたら、「お前は？」と尋ねられた。

「あ、三崎陽菜です」

「陽菜か。俺の名前をそっちから聞いてこなかったのは初めてだ」  
「すみません……」

謝った瞬間、ふつと一瞬日向先輩が笑ったような気がしたけど、次の瞬間にはいつもの無表情に戻っていたので、見間違いだったのかもしれない。

小一時間もすると課題にも飽きてきて、せっかく説明してくれる先輩の話が頭に入ってこない。そんな私に気づいたのか、日向先輩は説明をやめる。

「すみません……ちゃんと聞きます……」

絶対怒られると思って、先に謝っておいた。すると、日向先輩が今度ははつきりと笑った。え、何で？

「お前……面白いな」

何がお気に召したのかわからなかったけど、とりあえず怒っていない風ではないので安堵した。

あ、笑うとこの人、すごく可愛い。男の人をそんな風に思ったことはなかったのに、日向先輩にはそんな印象をもった。

課題が終わったのは、8時を回った頃だった。きつと先生も帰っているだろう。仕方なく、教務室の残っている先生に課題を預け、私は玄関に向かった。

玄関に行くと、教室で別れた日向先輩が、待っているのを見つけ、正直驚いた。きつととつくに帰ってると思ったから。どうして待っていてくれたんだろう。

「こんな時間に女1人で帰すわけにもいかねえだろ」

意外に紳士的だった。きつと昨日も、帰っちゃうフリしてただけで、本当は待っていてくれるつもりだったのかも。

「そういえば、何で先輩はいつもこの時間なんですか？」

「あ？」

昨日、日向先輩は遅くまで残っていた私の理由を聞いた時「俺はいつもの事だ」と言っていた。いつも、遅くまで何をしているの？

「本当に何も知らないんだな」

「はい？」

「いや、そのうちわかるから気にすんな」

「はぁ……」

結局、先輩は教えてくれなかった。別にそんなに気になっていたわけじゃないからいいんだけど。

先輩は今日もバイクで、もちろん私を送ってくれた。でも、今日は言っておかなければ！

「先輩！」  
「何？」

バイクで風を切っている時に話をするのは辛い……。でも乗る前に言いそびれちゃったんだもん。

「今日はK駅でいいです！」

「なんで？」

「自転車があるんです！」

先輩はわかったのかわからないのか、返事をせずに走り続けた。今日も柑橘系のいい香り。

さっきの声はちゃんと先輩に届いていたようで、バイクはK駅に辿り着いた。

「ありがとうございました。兄が……。うるさいですよ」

「昨日の事か？」

「はい。でも自転車が駅にあるのを忘れてて、いつもの時間に家を出た私が悪いんです。それでバレちゃって……」

今は9時過ぎ。家に着くのは9時半か。ゆうくん、大丈夫だったかな……。？ちょうどその時、携帯が鳴った。みると相手はお兄ちゃん。激怒しているんだろうな、と思って出てみると、その通りだった。

『陽菜！今どこだ！？』

「い、今駅に着きました……」

『遅い！迎えに行くから、動くな』

「はい……」

ぶつと切れた電話。あの勢いじゃ5分足らずで来るかもしれない。

「・・・過保護な兄貴だな」

はっ！そうだ、先輩もいたんだった。恥ずかしい・・・。

「まあ・・・仕方ないです」

お兄ちゃんは両親が亡くなってから、大黒柱として私たちを支えてくれたんだ。だから、心配するものわかるの。

「じゃあな、陽菜」

先輩は私の頭を軽くポンポンと叩くと、またバイクで去って行った。先輩・・・目立つんですって！先輩の容姿といい、バイクといい、目立つ要素満載なのに。ほら、みんな見てるじゃない・・・。

「陽菜！」

鬼の形相のお兄ちゃんがものすごいスピードでやってきたことで、私は再び注目的になった。勘弁して・・・。



## 出会い(2) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

よじやく名前を出せました。恋愛模様まではまじしびらくお待ちください。

### 出会い(3)

「洗いざらい話してもらおうかな？」

そう言っただけで私はフローリングの床に正座させられている。痛いんだけど・・・なんて言っても聞き入れてもらえないんだろうな。

幸か不幸か（いや、不幸だ）、明日は土曜日。明日からテスト前なので部活もなく、今日は長々お説教ができるというミラクルなシチュエーション。

こんな時に限って、結翔はすやすやと隣の部屋で寝息を立てている。今日は陽翔が上手く寝かしつけてくれたんだね、ありがと・・・。

「昨日も今日も、どうしてこんなに遅い？部活には遅すぎるだろう」

「昨日は学校に忘れ物をして、今日は課題で居残りさせられたのよ・・・」

そんな怪訝そうな顔をされても、本当の事だもん。私嘘は言っていない。

「じゃあ何で昨日は自転車に乗ってこなかったんだ？」

ああ、来たね。その質問をされると困るんだよね・・・。だって、男の人にバイクで送ってもらったなんて言ったら、絶対怒るでしょ？

「あの・・・ね、それは・・・」

「男の人にバイクで送ってもらったみたいだよ」

「なっ……！」

言いよんどんでいる私の代わりに、陽翔が口を開いた。ってというか何で知ってるのよ！昨日はちゃんと家にいたじゃない！

「俺の友達が塾の帰りに見たんだって」

「男……？」

「結構背の高い、がっしりした人だったみたい。タイプのちよつと大翔に似てるかも」

陽翔はお兄ちゃんのことを大翔って呼ぶの。もう中3で、長身のお兄ちゃんに追いつくくらいだから、見上げてると私の方が妹みたい……なんてこと考えてる場合じゃなくて！見られてたなんて……やっっちゃったなあ……。

「陽菜」

「はい」

「しばらく俺が送る」

「はい……」

言い出すと思ったんだよ……。だって、中学の時も和真（元カレ）と遊んで遅くなったら、学校の行き帰りに陽翔という監視がついたんだもん。今回は学校も遠いし、そういう訳にもいかないから、お兄ちゃんが直々に動くらしい……。

お兄ちゃんの高校は私の通っている高校と家の中間にあって、県内トップクラスの進学校。その割に基本的にフリーダム。だからバイクに乗っていきなければその旨を申請すればいい。しかも事後申請あり。おかしいよね。どれだけ生徒を信用してるんだろう。いや、逆に見放してるのかも。

だから、お兄ちゃんはやっと早めに出て私を送り届け、Ｕター  
ンして自分の学校に向かう。そして帰りも部活が終わってから私の  
学校まで来て、そして連れて帰るのだ。

「あの、しばらくつて・・・？」

「テストが終わるまで」

やっぱり・・・？テスト前なんて部活がなくなるから、友達と  
遊ぶチャンスなのに。偶然にも、高校のテスト期間ってほとんどか  
ぶってて、帰る時間も一緒になる。だからお兄ちゃんが送り迎えす  
る分には全然問題ないの。

いつもなら怒られてる私を庇ってくれる陽翔も、こういう話題の  
時はいつもお兄ちゃんサイド。この結託力、何なんだろう・・・。

「でね、僕と悠大くと競争してね、勝ったんだよ！」

「へえ、すごいね、ゆうくん！」

翌日は、暖かな初夏の日差しをいっぱいに浴びて、お兄ちゃんと  
ゆうくと3人でお買い物。陽翔も誘ったんだけど、部活だった  
みたい。最後の大会、近いもんね。

こんな風に、ゆうくんを挟んで3人で歩いていると、若い夫婦に  
間違われることもしばしば。そういう時はゆうくん、すごく喜ぶの。  
両親が亡くなったのがゆうくんが2歳の時だったから、まだお父さ  
んとお母さんが恋しいんだよね。

そんなゆうくんのために、私たちはあえて否定しないことにしている。可愛い末の弟のためなら、このくらいなんでもないもの。

「なっちゃん、抱っこ」

「えー、ゆうくん重くなつたからなあ」

「俺が抱っこしてやるよ」

「うー、じゃあ大翔で我慢してあげる」

「・・・このガキ・・・」

最近ゆうくんの口も達者になつてきて、私たちも驚くことばかり。こんな風に陽翔の口調を真似たり、私の口調を真似たりと、どんどんいろんなことを覚えていくから、びっくりだ。

ところで、町を歩いていると、道行く女性の視線はいつもお兄ちゃんに集まる。妹としては何でそんなに？と思うんだけど、きっと一般的にはイケメンの部類に入るのだろう。以前モデルのスカウトも来てたし。

そうなると、お兄ちゃんそっくりの陽翔もきつとモテるんだろうな。お兄ちゃんより物腰ソフトだし。ということはいずれゆうくんも・・・。ああ、お姉ちゃんは複雑だよ。

そんな姉の気持ちも知らず、ゆうくんは「なっちゃん、どしたの？」と上から見下ろしてくる。もう、可愛いなあ！

ゆうくんのほっぺにすりすりしながら、私たちはスーパーに入る。そして、1週間分の食料を買い溜めする。平日は3人も部活で帰りが遅いから、休みの日にまとめて買っておかなければならないのだ。

「今日は何が食べたい？」

「肉」

「・・・お兄ちゃんはそのっかりだよ。聞いた私がバカだったわ」

「僕ねえ、シチューがいいの！」

「え・・・もうちょっとさっぱりしたのにしようよ・・・。もうこの季節、暑いよ？」

「なっちゃんのシチュー美味しいよね」

「・・・シチューにしようね」

そんな可愛い顔で言われたらダメなんて言えないよう。やっぱり我が弟ながら、未恐ろしいわ。

夕飯の材料をはじめ、お買い得品を狙って食料をカゴに入れる。もう手慣れたもので、ゆーくんも「これお得」と言って次々カゴに入れる。しかもそれが本当に必要なものだから驚きだ。こりゃあカリスマ主婦にもなれそうな勢いだ。

「ゆーくん、向こうから卵を持ってきてくれる？」

「うん！」

最近ようやく卵を持つことを許された（落とさずに持つてこれるようになったから）ゆーくんは、卵と聞くと嬉々として卵のコーナーに走って行った。

「結翔もだいぶ使えるようになったな」

「そうだねー。日に日に成長していくもん」

すっかり気分は母親。きつと隣も父親気分に浸っていることだろう。そんな父親気分の男は結翔の後を追いかけて卵コーナーに向か

った。結翔には内緒だけど、やっぱりまだ1人では行かせられないの。最近は何騒だしね。

2人は卵コーナーのついでにお菓子コーナーにも寄ってくるだろう。うちのお約束としては、1回の買い物につき1つだけお菓子を買っても良いことになっている。きつとみんなの分と称して4つほど持ってくるだろうけど。

だから私は今のうちに他のコーナーで結翔の興味のないもの（調味料や日用雑貨）を見に行く。そうだ、シャンプーが無くなりそうだったんだ、と思い出してそれらが置いてある一角に行くと、見慣れた横顔が。

「先輩」

「・・・ああ、お前か」

制服じゃない日向先輩はすごく大人っぽくて、学校とはまた違った印象だ。

「そついえば先輩もK市って言ってましたね」

「ああ。それより昨日は大丈夫だったか？」

「あー・・・あんまり」

先輩に、これからしばらくはお兄ちゃんが送り迎えをしてくれることを話すと、すっごく呆れられた。いや、当然だよ。高1にもなって兄の送迎だよ？

「お前の兄貴・・・三崎・・・？」

「知ってますか？」

「・・・いや、たぶん違う・・・」

同じ市内の中学校で、同じ学年でもやっぱり知らないか。まあ、あまり知っててほしくないけど。

「じゃあな、俺はもう行く」

「あ、はい」

うーん、クールだ。うちのお兄ちゃんにも先輩くらいクールだといいのに。本人曰く、家と学校の顔は違うらしいけど、私にとって家の顔が全てなんだから、そんなの知ったこっちゃない。

「なっちゃん！卵！」

「ゆーくん、ありがとうね」

「陽菜、さっきの知り合い？」

「え？いや、たまたまそこにいた人だけど・・・」

もしかして、先輩と話しているところ見られたかな。あんまりこっこの見られるといい展開にならないんだよね。

「ならいい」

「そう？」

含みのある言い方が気になったけど、とりあえず見られてはいなかったみたいだから良かった。昨日の今日でちくちく言われるのは嫌だもんね。



出会い(3)(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

作者はゆうくんがお気に入りです

## 日向一樹(1)

「よう」

「あ、おはようございます」

「酷い顔だな・・・徹夜か？」

「今日のテストは苦手の数学ですから」

「・・・まあ頑張れ」

「はい」

校門で偶然先輩に会った。放課後以外に先輩を学校で見たのは初めてだったから、ちよつと吃驚。放課後以外にもいるんだね。

「ちよつと!」

「あ、葵。おは・・・」

「何で日向先輩と親しげに喋ってんの!？」

「え?」

挨拶もそこそこに、玄関で葵に拉致されてやってきたのは屋上。1階から4階まで一気に走り抜けてきたから2人とも息が切れている。それでも葵は息を切らしながら早口で捲<sup>まく</sup>し立てた。

「ねえ、陽菜!日向先輩とどうやって知り合ったの?」

「放課後の学校で。勉強も教えてもらったの。いい人だね」

「彼がどんな人だか知ってて言ってる!？」

「何が?」

あまりにも葵と私に温度差があるもんだから、彼女も呆れたのかわざとらしく大きな溜息をついた。

「いい？日向一樹先輩がこの学校の生徒会長だったことは知ってるよね？」

「……」

そうだったけ？入学式で生徒会長の話みたいのがあったような気がするけど、なにせ背の低い私は前の人に遮られてさっぱり見えてなかった。名前だって、憶えてない。だって私とは関係ない人だって思ったし。

「この学校の女の子で日向先輩を知らない人がいたって知ったら、あんた珍獣扱いだからね！」

そこまで言わなくても……。中学校ならまだしも、高校でそんなに生徒会が中心になる活動なんてあるの？そう聞いたら葵は肩を落とした。もしかしてまた墓穴掘った？

「ホント、あんたバカ！？この学校を牛耳ってるのはほとんど生徒会なんだから！」

牛耳るって……。でもたかが生徒会でそこまで権力あるっておかしいと思うんだけどな。

「だから……その理由が日向一樹にあるって言うてんの！」

生徒会に権力がある理由が日向先輩にある？全く意味が分からないって顔をしてたら、だんだんと葵の説明に力が入ってきた。

「いい？3年9組の日向一樹先輩といえば、生徒会長であるにもかかわらず性格は最悪。毎回連れて歩く女の人は別人で、気に入らない人は男女問わず、あらゆる手を使って潰しにかかる。一時はすこ

く荒れてて、他校の人たちと毎日のように喧嘩してはそのほとんどを従えたらしいよ」

なんか葵の言ってる日向先輩と、私の知ってる日向先輩が同一人物には思えないんだけど。都市伝説みたいになってるんじゃないのかな……。

「それなのになんで生徒会長なんてやってるか、気になるでしょ？」

「え、まあね……」

「それはね！日向先輩が生徒から絶大な人気を誇るから！」

「なんで？」

葵の言っている人となりが本当だったとしたら、人気がある理由がわからない。

「まあ見ての通り、超絶にかっこいいってこともあるんだけど、成績優秀、スポーツ万能はもちろん、おかしいと思ったことは先生だろ？が先輩だろうが、誰にでも真っ向から反論するの。しかもそれが結構みんなが思ってることと一致するんだわ。だから、性格に難ありでも人望はあるってわけ。でも、やっぱり一部の人以上は話しかけるのに勇気がいるのよ」

なるほどね。簡単に言うのと良くも悪くも、自分じゃできないことを実行してくれるヒーローなんだ。道を外れてみたいけどできない、間違ってるのに言い返せない、勉強しても成績が上がらない、運動がまったくできない、そんな人たちにとっては憧れの的になるわけね。

「実際日向先輩が生徒会長になってから、うちの学校は随分よくなっただらしいよ。当初は日向先輩の生徒会長就任に難色を示していた

先生たちも、風紀がよくなったとか、授業がやりやすくなったとかで今じゃ諸手を挙げて喜んでいる状態なんだって」

ああ、もしかして初めて会った日、あんな時間まで先輩が残ってたのは生徒会の仕事をしていたからなのかもしれない。

『本当に何も知らないんだな』

あれはこの噂のことを言ってたのかもしれない。でも、私は正直この噂を知らなくてよかったと思う。だって、知ってたらこんなに普通に接することは出来なかったでしょ？

「そういう意見もあると思って聞いておくよ」

「呑気だね。ま、イケメンは見慣れてるってか」

「そういう訳じゃないけどさ」

「そういえば、日向先輩って大翔先輩と似たようなタイプかもね」

「お兄ちゃん？そうかな・・・」

「そうだよ。だから陽菜は抵抗なく話せるのかも」

お兄ちゃんよりも日向先輩の方がずっと大人だと思っけど。でもきつと葵の言っている『大翔先輩』っていうのは、お兄ちゃんの言う『学校の顔』なんだろう。だから私とは見え方が違うのかもしれない。

「あー、思い出したら陽翔くんに会いたくなっちゃった」

「あのねえ・・・」

葵はどちらかというとお兄ちゃんよりも陽翔が好きなの。でもね、しばらく見ない間にでっかくなっちゃったんだよ。葵が見たらきつと驚いちゃうと思う。

「テスト終わったら遊びに行っている？」

「うん、もちろん……って！テスト！もうすぐ始まるっ！」

「え、もうそんな時間？」

「ヤバいって！早く！」

私は来たときとは逆に、葵の手を引つ張って教室へと急いだ。

「泣かないでよ……」

「だって……」

私は学校近くのコンビニでお兄ちゃんを待ちながら、葵に慰められていた。だって、せっかく勉強してきたのに、半分も埋められなかった……。高校に入って初めてのテストなのに、最初から赤点かもしれない……。

私はみんなと違って学校も遠いし、家に帰ったら家事が待ってるから、高校では部活はやめたらどうかと言われてたが、どうしても青春の1ページを部活で彩りたかった。ただそのために学生の本分が疎かになってしまったら本末転倒だ。これからは心を入れ替えて頑張ろう……。

「朝より酷い顔だな」

「先輩……」

今日は良く会っただけ。でもよりによってこんな時に会わなくてもいいんだけど。葵なんて緊張のあまり石化しているよ。

「これやる」

差し出されたのはチョコレート。日向先輩にチョコって、なんか不思議な組み合わせ。テストの時の休み時間にはいつも1つだけチョコを食べるんだって。糖分を摂ると頭がよく働くらしい。私も次のテストにはチョコ持ってこよう。

先輩はそのまま、バイクに跨って帰って行った。コンビニには寄らなくてよかったのかな？

「はぁ・・・目の保養」

「葵・・・」

彼氏がいようとしまいと、葵は葵だった。今度は私が呆れていると、再びバイクがコンビニの駐車場に入ってきた。

「悪い、遅くなった・・・なんで泣いてる？」

「お久しぶりです、大翔先輩！陽菜は数学ができなくて泣いてるだけです。心配いりません」

「久しぶり、葵ちゃん。・・・そんなことでお前は泣いているのか？」

「だって・・・」

私が頂垂れているにもかかわらず、葵は自分の彼氏を見つけると、「あ、彼が来た。じゃね、陽菜。さよなら、大翔先輩！」と言ってさっさと帰ってしまった。もうっ！所詮友情は愛情に敵わないのね。

「ほら」

「ん・・・」

手渡されるヘルメットをかぶり、バイクの後ろに跨る。私はそこで先輩からもらったチョコを1つ、口に放り込んだ。甘くほろ苦いチョコが口の中で広がる。甘いものを食べると、なんか満たされるなあ。落ち込んでるのがバカらしくなってきた。

もうあんまり落ち込むのはやめよう。全然建設的じゃないし。それより今日は午前放課だから、お昼を食べて帰るんだ。思い出したらお腹空いてきちゃった。

「ね、何食べに行く？」

「肉」

「・・・私はパスタがいい」

「パスタなんて食った気にならねえ」

数分の言い争いの後、結局私たちは中間をとってファミレスに行くことになった。そこで思いがけない光景を目撃することになるとは知らずに。



日向一樹(1)(後書き)

読んでくださってありがとうございます。どうぞ最後まで。

## 日向一樹(2)

どうしよう。なんでパスタが食べたいなんて言っちゃったんだろ  
う……。素直に『肉』って意見を受け入れておけば、家でいくら  
でも肉を焼いてあげたのに。ああ、もうこうなったら思いっきり長  
居して、向こうが先に帰るのを待つしかない。

私が何を気にしているか、一言で言えば日向先輩。私たちが奥の  
席に通された数分後、日向先輩が女の人を連れて入ってきた。それ  
だけだったら、別に何の問題もないの。ただ、その2人の会話がち  
よっと、ね。

「この前バイクの後ろに乗せてたの誰よ」

「誰でもいいじゃねーか、お前には関係ないだろ」

「なっ、だってあの日は待ち合わせしてた日よ!？」

「連絡入れただろ」

これってどう考えても私のせいで喧嘩してるよね……。うわあ、  
すごく申し訳ない。相手の女の人はものすごい剣幕で、ともすれば  
テーブルに置かれてるフォークとか振りかざしそうな勢い。

絶対に私だつてバレないようにしよう。幸い、先輩は私の存在に  
気づいていないから、このままひっそりやり過ごすのが1番だ。

本当は彼らに背を向けていたかったけど、今さらお兄ちゃんと席  
を替わってもらうのは目立つので、お兄ちゃんの陰に隠れるように  
心がけた。お兄ちゃんがでかくて助かったよ。

数分後、私たちに料理が運ばれてきても、女の人の気は全く収ま

っていないようで、まだ早口で先輩を責め続けている。当の先輩はというと、全然反省している様子もなく、むしろ「うぜえ」って思う気持ちを前面に押し出している。これじゃあ相手の気が収まるわけがない。

「陽菜、見すぎ」

「あ……」

お兄ちゃんは先輩たちに背中を向けているから、彼らの顔は見えていないけど、女の人の声はばっちり聞こえているようだ。だって、店中に響くくらいの大声なんだもん。周りの人も、みんな見ないふりをしてしっかり聞いているに違いない。

「それにしてもすげー女だな」

「そうだね……」

あまりそっちに興味を示さないで、お兄ちゃん……。女の人はこっちに背を向けているけど、先輩はこっちを向いて座っているんだから。絶対にお兄ちゃんに振り向かせないようにしなくちゃ。

「あ、ねえ。そういえばこの間ゆーくんがね……」

追加注文で店員さんを呼ぶことも、ドリンクバーを取りに行くのに席を立つことも、どれも目立つような気がして、とりあえずゆーくんの話でもしてみる。ゆーくんの話ならお兄ちゃんもちゃんと聞いてくれるから、時間稼ぎにはなる。

早く帰ってよ……って思っているのに、女の人の頭には依然血が上ったままで、収束する気配すらない。ってというか先輩もこんなに目立っているのに、全く周囲を気にしている様子はない。ああ、終

わる気がしない……。

だったらこっちがさっさと店を出てしまえばいいんじゃない？と思っただけど、レジに行くにはどう考えても先輩たちの横を通らなければならぬ。やっぱり2人が帰るまで待つしかないのかな。

「俺トイレ」

「えっ！」

たかがトイレに私が大きな反応を示したので、お兄ちゃんは吃驚したみたい。そりゃそうだよな、「トイレ」って言っただけでこんなに驚かれるなんて、思ってたなかっただろう。

「なんでもない！いつてらっしゃい」

不思議そうにトイレに立つお兄ちゃん。私はお兄ちゃんが目の前からいなくなるのと同時に、手帳を広げて顔を隠す。よかった、私の手帳が大きいサイズで。

その間にも女の人はヒートアップしていく。もういい加減にしてくれ……。と思ったその時。

ガタン！と大きな音がして、店中の会話がぴたりと止まった。そして、全員の視線が一転に集中する。

「気は済んだか」

「な、そんなわけ……」

「俺はもつてめえの面なんて見たくもねえんだよ」

そう言ってテーブルを勢いよく蹴り飛ばし、先輩は店から出て行

った。残された女の人・・・

「・・・！」

キツと周囲を睨みつけると、伝票を鷲掴みにして足早にレジへと向かった。

「修羅場は終わったのか？」

「お兄ちゃん・・・」

呑気すぎるよ……。でもこれでやっと帰れる。時計を見るともう午後3時になるうかというところ。そろそろゆうくんのお迎えに行く時間だ。先輩たちの後を追うように、私たちも店を後にした。

今日はいつもよりかなり早い時間に、しかも私とお兄ちゃんが揃って迎えに行くと聞いて、ゆうくんは朝からご機嫌だった。こんな時間に制服の男女が保育園に出入りしていると、近所の人たちは不思議そうに見て来るけど、他の子のママや保育士さんはみんな事情を知っているのでもって好意的。お兄ちゃんや陽翔がいると特にな。

「こんにちは、島田先生！」

「あら、陽菜ちゃんテストはどうだった？」

「うふふ・・・聞かないでください・・・」

島田先生は、私がこの保育園に通っていた頃からいるベテランの先生。ゆうくんが入園するときには声をかけられて、それからずっと私たちを気にかけてくれている。というか、10年以上会ってなか

ったのに、私のことを覚えていてくれたことに驚き！

島田先生だけはお兄ちゃんや陽翔じゃなくて、ちゃんと私を見てくれるから好きだなあ。

「それにしても陽菜ちゃん、急に大人っぽくなったわね。やっぱり高校生になると違うのかしら？」

「そんなことないですよ。でも、ありがとうございます！」

高校は朝が早くて、夜が遅いから、どうしても送り迎えにはお兄ちゃんか陽翔に行ってもらうことになってしまふ。だから、保育園に来るのは高校生になってから初めてなんだ。

「……にしてもお兄ちゃん……」

「まあまあ、すごい人気ね」

お兄ちゃんはお迎えの若いママたちに取り囲まれていた。ゆーくんは……と思っただけ見回してみると、慣れた様子で他の子と園庭で遊び続けている。

「保育士さんまでいるよ……」

「本当ね、後で注意しておくわ」

「いつもあんなですか？」

「そうねえ。こんな感じかもね」

そうなんだ……。兄が若奥様達にキヤーキヤー言われている姿を見るって、なんか気まずい。ゆーくん連れて先に帰ろうかな……

「ゆーくん」

「あ、なっちゃん！」

私の声に、目を輝かせて走ってくるゆうくん。ああ、天使！ゆうくんは私の足にしがみついてキラキラ笑顔を見せた。

「帰ろっか。今日は一緒に夕ご飯作れるよ」

「うん！ハンバーグ！」

ゆうくんは私と一緒にご飯を作るのが好きな子なの。平日は私の帰りが遅くて、前日の夜に作り置きしてあるご飯を温めて食べるから、いつもは休日しか一緒に作れない。だからテスト期間は本当に特別なのだ。

お兄ちゃんたちは私たちが帰る支度をしているのに気付くと、ママたちに別れを告げて駐車場にバイクを取りに行った。バイクだと、正門までぐるっと回ってこなきゃいけないから、先に歩いていても問題ないだろう。

「じゃあ島田先生、さようなら」

「さよーならー！」

「はい。結翔君、陽菜ちゃん、さようなら」

2人で手をつないで正門を出る。保育園のある道のもう1本先は、もう国道。いつもは危ないから国道は通らないんだけど、今日は保育園前の道が工事中で仕方なく国道に出る。

ゆうくんに合わせて、ゆっくりとしたペースで歩いていると、正面から見知った顔が歩いてくるのに気が付いた。先輩だ。今日はよく会うなあ。

さっきのヒステリックに叫んでいた女の人はもういなくて、代わ

りに友達とみられる男性と並んで歩いている。私が挨拶をしようか迷っていると、意外にも向こうから話しかけてきた。

「おう、陽菜。このちっこいのは弟か？」

「はい、結翔っていいいます」

先輩はもうさっきまでの不機嫌な様子ではなく、いつもの先輩だった。



日向一樹(2) (後書き)

読んでくださってありがとうございます！

### 日向一樹(3)

ゆうくんは誰？という顔で不安そうに私を見上げる。私が「日向一樹先輩だよ」と言っても、私の後ろに隠れて出てこない。

確かに、先輩も隣のお友達も幼児受けする顔はしていないと思う。だって、顔も服装もいわゆる今時の若者だもんね。まあお兄ちゃんもそうだけど。そう思っていたら、先輩は結翔に向かってこう言った。

「結翔か。かつこいい名前だな」

「かつこいい・・・？」

「ああ」

先輩はゆうくんを目線を合わせるようにしやがみ込む。小さい子と話すときは目線を合わせると怖がられないってことを、知っていてやってきているのかな。お蔭でちょっとゆうくんも安心したみたい。

それに、ゆうくんは最近『かつこいい』って言葉に敏感だ。今のゆうくんにとっては最高の褒め言葉と言っても過言ではないかもしれない。

この2つのポイントによって、日向先輩はゆうくんの心の中にも簡単に入り込んだのだった。

「じゃあな、陽菜。ちゃんと勉強しろよ。結翔も、またな」

「じゃーね、いっくん！」

「・・・いっくん・・・」

ゆうくんセンスのニツクネームに苦笑しながらも、先輩は拒否することなく去って行った。いっくんって……。うちの生徒が聞いたら卒倒しそう。

それにしても、さっきファミレスでテーブル蹴っ飛ばしてた人と同一人物とは思えないくらい、普通だったな。ものの1時間かそこで、入れ替わったんじゃないだろうか。

「おい、先に行くなら言ってから行け。お蔭でまた捕まりそうになつたじゃねーか」

「あ、ごめーん」

お兄ちゃんが若干イラついた表情でバイクを引いてきた。あ、若いママたちに囲まれるのも内心嫌だったんだね。てつきり笑ってるから楽しんでるのかと思った。

「あんなん作ってるに決まってるんだろ」

愛想笑いか、上手だね……。もしかして、さっきの先輩も愛想笑いとかがだったかな。機嫌悪かったのに、私が挨拶をしようか迷っていたから、仕方なく声をかけてきてくれたのかもしれない。それにあんまり子ども好きには見えないし。だとしたらごめんなさいだなあ……。

「大翔！ゆうくんかつこいいって！」

「はあ？」

いきなり、ゆうくんが嬉しそうにお兄ちゃんに言った。日向先輩に言われた一言が余程嬉しかったらしくて、お兄ちゃんにも聞いてほしかったんだと思う。

「いつくんが言った」

「・・・いつくんって誰だ？」

「私の高校の先輩だよ。今偶然会ったの」

「ふーん・・・」

お兄ちゃんは私が男の人と仲良くなるのにあまりいい顔をしない。それはまあ過去にいろいろあったからなんだけど、過敏になりすぎる気もするのよね。

「ね、ゆーくんかっこいい？」

「あ、ああ。かっこいいな」

「へへー！」

ああ、嬉しそうなゆーくん。ゆーくんは私の事も大好きだけど、それ以上にお兄ちゃんのこと好きよね。本人は何故か認めないけど、お兄ちゃんに褒められたり、認められたりするとすごく嬉しそうだもん。

でもね、ゆーくん、『名前が』って言うの忘れてるよ？って思ったけど、別に言う必要もないので黙っておいた。だって、名前がかっこよかるうが、ゆーくん自身がかっこよかるうが、お兄ちゃんの反応は一緒だから。結局お兄ちゃんはゆーくんにも甘い。

「昨日はありがとうございました！」

私は玄関で靴を履いている先輩を見つけて、駆け寄った。昨日も思ったけど、朝の日向先輩は低血圧なのかすごく眠そう。だから私

から見てもちよつと怖いんだよね。でも話し方は普通だから安心。

「……何がだ？」

「弟……結翔に優しくしてください」

「ああ、そんなことが」

先輩は何でもないように言うと、そのまま教室に向かってしまった。心なしか今日はテンションが低いような……？

「ごめんね、あいつ昨日女とケンカしてさ」

急に話しかけられて驚いて振り返ると、背の高い男の人が私を見下ろして立っていた。うわあ、この人も先輩とはタイプが違うけど、かっこいい。先輩が野性的ならこの人は王子様タイプかも。

いや、そんなことはどうでもいいんだけど、この人はいったい誰……？どこかで会ったかな、そう思って凝視していたら突然目の前の男の人が噴き出した。

「あの……？」

「あ、ごめんごめん。あんまり『誰、こいつ』って顔で見てるからさ」

……そうよね。いくらなんでも凝視はなかったよね。怖い人だったらキレられてたかもしれないし、気を付けないと。この人は優しい人で良かったけど、でも恥ずかしい……。ところで、この人やっぱりどこかで会ったような……。

「覚えてない？昨日、一樹の隣にいた……」

「ああ！ああ……え？」

そう言われればそうだ！って思ったんだけど、こんなにキラキラしてたかな。昨日は『先輩も隣の人も幼児受けしない感じ』って思ったような気がするんだけど、今日の前にいる人は見るからに王子様で優しそうだし、小さい子も喜んで寄って行きそう。

再び不思議そうな顔に戻った私に、男性はくすくす笑って言った。

「本当に何も知らないんだね」

バカにされているような言い方がちょっとイラつく。だから何が？主語がないのよ、主語が！そうしたら男性がまた笑い出した。ホント、ケンカ売ってるの？

「いや、ごめん。怒らないで。ちょっと新鮮だっただけでさ。で、俺のこと昨日と印象違うなって思ってる？」

「ええ、まあ」

口調が少々ぶっきらぼうになってしまつのは私のせいじゃないから！

「そんな怒らないでって。こっちは学校用、あっちはプライベート用。だから同一人物だよ。結翔によろしく？」

「はい……」

そうして男性は先輩の後を追いかけるようにして、廊下を歩いて行ってしまった。あ、名前を聞くの忘れちゃった。

「陽菜ー！ー！」

「うわっ！ー！」

後ろからいきなり抱き着かれて、下駄箱に掴まってなかったら転ぶところだった。

「葵……」

「ごめん！でも、あんた日向先輩だけじゃなくて皐月先輩とも知り合いだっただの!？」

「皐月先輩？」

興奮しながら話す葵によると、今の男性は皐月颯太先輩みづき せうたといって、日向先輩と同じく3年生らしい。そして、日向先輩と一緒に生徒会をやっている副会長なんだって。

「ワイルドな会長が、王子様な副会長か……。甲乙つけがたいけど、今年の1年生の間では副会長の方が一歩リードね」

そうかな？なんか副会長の方が性格悪そうなんだけど、きっと皐月先輩の言うところの『学校用』に騙されているんだろう。まあ、特に接点もなさそうだからいいけど。

あ、もしかして『何も知らない』っていうのは2人が会長と副会長だったってことかも。以前日向先輩にも同じことを言われたことがあるし。でも日向先輩が言った時と、皐月先輩が言った時と、受け取る印象が全然違った。言い方の問題？それともシチュエーションの問題？

「でも何で陽菜ばかりこんなおいしい思いするのかな！やっぱり欲がないところに幸運ってやってくるのね!」

それは何が幸運かってことによって違うと思うんだけど……。

それにしても、この学校は生徒会役員を顔で選んでいるのかしら。他の役員は知らないけど、トップ2人を見たらそう思っちゃう。

「今度会ったら、私にも紹介してね？」

「彼に怒られるよ？」

「大丈夫！私のミーハーっぷりは彼も知ってるから！」

それでいいんだ……。私なら自分の彼がテレビのアイドルにきやーきゃー言ってるのもちよっと嫌なのに。葵の彼は寛大なんだね。

「さ、今日は泣かないようにテスト受けようね」

「う、はい……」

昨日の二の舞にならないようにしたいけど、2限が数学の次に苦手な化学なのだ。もしかしたら泣くかも……。

でも、鞆の中には昨日もらったチョコレートがある。これがあればなんとか頑張れそうな気がするよ。



日向一樹(3) (後書き)

新キャラ登場ですが、彼が動いてくれるのはしばらく先になりそうです・・・。

## お兄ちゃんと私(1)

「あんつ、お兄ちゃん・・・そこ、気持ちいい」

「痛くない？」

「ううん、すぐく・・・いいつ」

「・・・その声、エロい」

結翔を寝かしつけた後、お兄ちゃんがソファにうつ伏せになった私の上で呟いた。エロくたっていいよ。気持ちいいんだもん。

「やめろよ、近所の噂になりそう・・・」

呆れた表情でリビングに入ってきた陽翔が大きなため息とともに言った。陽翔はそのまま窓辺に行って、空いていた窓をぴしゃりと閉めた。あ、窓開いてた。

「いや、こいつすげー凝ってる」

「お兄ちゃん、マツサージ上手すぎ・・・」

そう。私たちは決して兄妹でいかわしいことをしていたわけじゃない。肩をバキバキやっている私を見かねて、お兄ちゃんがマツサージしてくれていたのだ。

小学校の頃からずっとバスケットをやっているせいかな、お兄ちゃんは体のことについて詳しいし、マツサージもすぐ上手なの。

「声だけ聞いてたらそうは思えないから言ってるの。ヤルなら窓閉めろ」

「どっちの『ヤル』？」

「アホか・・・」

2人のバカみたいなやりとりを聞きながら、私は夢うつつ。お兄ちゃんは口を動かしつつもちゃんと手も動いているから好き。もう気持ちよすぎで眠ってしまいそう。

「寝るな。まだ風呂入ってねーだろ」

「うう〜・・・」

うとうとしかけたところに、上からぺちんと頭を叩かれ目を覚ます。明日は休みなんだし、大目に見てよ。

「そうだ、シャワーが水しか出なくなっただって言いに来たんだっただ」

「え!?!」

さっきお兄ちゃんに結翔をお風呂に入れてもらったときは大丈夫だったのに。ちょうど陽翔が使い終る頃、突然水になったってシャワーが出ないってことは、髪も体も洗えないってことだよ。一応湯船にお湯は張ってあるけど、結翔が遊んで減ってるから2人分もないし、人が入った後だから頭にかけるのには抵抗が・・・。

「明日修理屋呼ぶか。俺が早く帰って来てやるよ」

「いいよ、お兄ちゃん最後の大会近いでしょ？私が部活午前中で帰ってくるから」

「いいのか？」

「うん。私たちの大会まではまだ時間があるし、みんなうちの事情知ってるし」

休みの日といっても、高校は土日どっちも一日中練習があること

が多い。力を入れている部活ならなおさらだ。うちの部活は特に強いわけじゃないけど、みんな熱心だからテスト前じゃなければ休みはほとんどない。お兄ちゃんの学校は進学校なのにバスケ部がすごく強くて、こちらほとんど休みがない。

中学生の陽翔もバスケ部だけど、中学校は大会前じゃない限り土日のどちらかは休みの事が多いし、あっても半日だから、結翔の面倒は陽翔にお願いするのだ。どうしても3人と家にもいないときは、近所の田浦さんというおうちで預かってもらう。

田浦さんのうちはおじいちゃんとおばあちゃんの2人暮らしで、両親がまだ生きていた頃から親しくしていた。お葬式の準備とかも手伝ってくれたし、私たちにとっては第2の両親みたいな存在。

2人も私たちのことを本当の孫のように可愛がってくれて、特に結翔のことは目に入れても痛くないってほど可愛がってくれている。

私が高校で部活に入ろうか迷っていた時も、「今やれることをやりなさい」って背中を押してくれた。ホント、お世話になりっぱなしのお宅なのだ。

でも、流石に給湯器の修理まで田浦さんに頼めないから、何時に電話したらいいのかな、なんて話していると、再び陽翔が大きなため息をついた。

「それもそうなんだけど、今日の風呂は？」

そうよね。明日の修理も大事だけど、今は今日のお風呂の方が問題だ。そろそろ暑くなってきて、日中は汗ばむくらいの陽気だし、その中で思いつきり体を動かしてきたお兄ちゃんは風呂なしじゃ無

理だろう。

「俺が結翔見てるから、2人で風呂入りに行つて来いよ」

「どこに？」

「ちよつと遠いけど、スーパー銭湯ができたじゃん。2人ならバイクで行けるだろ？」

「ああ、そうすつか。陽菜、10分後に出発な」

正直、もう少しマッサージをしてほしかったんだけど、しかたない。私は急いで部屋に行き、着替えやタオルなどを準備して玄関に向かった。

「うわあ、綺麗だね」

「結構遅くまでやってんだな」

広く新しい館内は、幅広い年齢のお客さんと賑わっていた。今は午後9時を回ったくらいなんだけど、週末の夜ということでもまだまだ家族連れも多いし、若い人も多い。日中はきつと年配の人が多くなるんだろう。

受付カウンターに行くと、優しそうな女の人が丁寧に対応してくれた。こういう丁寧で親切な対応も、この施設の売りなのだ。(・・・と、張り紙に書いてあった)

「閉館は24時です。大浴場、露天風呂、サウナ、ジャグジー、どこをお使いになっても結構ですが、貸切風呂をご利用の際は入館料の他に使用料1000円をいただきます。どうなさいますか？」

にこやかに私たちに説明してくれるおねえさん。貸切風呂を勧めてくるっていうことは、明らかに勘違いをしているね。

「どうする？ 貸切風呂」

にやにやしてお兄ちゃんが私に聞いてくる・・・バカじゃない？ もちろん、お兄ちゃんのことにはシカトして、受付のおねえさんには丁寧にお断りしたわよ。

「じゃあ上がったらここに集合な」

「了解」

私はうきうきする心を抑えて、女湯に向かった。何でうきうきしてるかって、そりゃあ私がお風呂大好きだから！ しかもこのスーパ―銭湯、露天風呂だけは温泉なんだって！ 嬉しすぎる。

体を洗って、髪を洗って、そしてまずは内風呂へ。大浴場っていつでも大小各種のお風呂が5つもあるの。そしてジャグジーに水風呂まで。全部制覇しなきゃ！

外には大きな露天風呂。しかも打たせ湯まであってもう至福。さつきまで入っていた若い女性が中に入って、露天風呂には私だけになった。思わず泳いじゃいたくなりそうなくらい、気持ちいい。

今日は晴れていたから、空を見上げると星がすごく綺麗だった。この施設が郊外にあるせいか、家から見る星空よりも輝いて見える。

気が付くと、私は頭だけお風呂のふちにかけて、お湯の中に両手両足を漂わせていた。人が来る心配がしたので慌てて体を元に戻す。危ない、危ない・・・。

私はその人と入れ違いに中に戻り、ジャグジーで体を癒した。お兄ちゃんはそんなに長い時間お風呂に入っている人じゃないから、きつともう上がってテレビでも見ているかもしれない。

でも私はしばらくジャグジーから出ることができなかった。だつて気持ちいいんだもん。お兄ちゃんのマッサージでほどよく解れた体に、ジャグジーの水流が良い刺激になっている。お湯の温度もそこそこ温くて、ずっと入ってられそう。

そうは言っても何時間も待たせるわけにはいかないの、サウナに入りたい気持ちをぐっと抑え、私は浴場を出た。

お風呂上りで、いい感じに火照った体には、半袖とショートパンツで十分だった。というか、長袖だと思って持ってきたTシャツが半袖だったというオチなんだけどね。

流石に髪は乾かさないと風邪をひきそうだったから、半袖の分しつかりとドライヤーをかける。高校に入学してすぐに茶色く染めた髪。染めた直後は結構痛んだけど、念入りに手入れをしていくうちに枝毛も少なくなってきた。

なんだか日に日に髪の色が明るくなっていくような気がするけど、よく考えたら日向先輩だつて臯月先輩だつてかなり明るい髪色をしていた。会長と副会長があれなんだから、いいかって気になってくる。

お兄ちゃんも結構茶色だけど、あの高校つて校則緩いよね。なんたつてバイク通学が簡単に許可される学校だもんね。

そんなことを考えている間に髪も乾いたので、1人寂しく待っているであろうお兄ちゃんのところへ急いだ。

だけど、テレビの置いてあるロビーにお兄ちゃんの姿はなかった。



お兄ちゃんと私(1) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

## お兄ちゃんと私(2)

まだお風呂に入っているのだろうか。そう思ってロビーのソファに腰かける。喉が乾いたので、自販機で買ってきたスポーツドリンクを半分ほど飲み干す。

きよろきよろと辺りを見回してみると、閉館時間まであと1時間ちよつとなのにもかかわらず、まだたくさんのお客さんがいた。ただ、その年齢層はさつきよりも若くなっている。家族連れや年配の人がいなくなっているから、そう思うのかもしれないけど。

「君、1人なの？」

「はい？」

ナンパか・・・とうんざりして振り返ると、そこにはとてもナンパなんてしそうないい好青年風の男性が立っていた。

「いや、こんな時間に若い女の子が1人であるなんて不思議だなと思って」

ちよつと困ったような表情で話す男性。今時風の髪型なんだけど、色はしつかり真っ黒で、服装もダサくないけどチャラくなくて、すごく真面目な印象を受ける。本当に不思議に思って話しかけて来たのかどうかは知らないが、悪い人であってほしくない人物だ。

「兄と来てるんです。お風呂が壊れちゃって」

「あ、そうなんだ。よかったよ、浮浪少女かと思ってさ」

私がお兄ちゃんと来ていることを話すと、男性はほっとしたよう

に言った。本当に心配してくれていたのだろうか。だとしたら何故？博愛主義者？

「いやね、俺今日は非番なんだけど、お巡りさんやってるわけよ」「えっ！警察！？」

だからこんな時間に1人である私に話しかけて来たんだ。一瞬でもナンパだと思った自分が恥ずかしい。お巡りさんはそれからお兄ちゃんが上がるまで話し相手になってくれた。

「お巡りさんはやめてよ。俺は岩淵悠馬<sup>いわふち ゆうま</sup>。なんとも呼んで」

「岩淵・・・悠馬さん？」

「ん？どうかした？」

岩淵、悠馬、そしてこの顔・・・もしかして・・・

「悠大君<sup>ゆうだい</sup>って、知ってます？」

「あ、息子のこと知ってるの？」

やっぱりだ。岩淵悠大君は、結翔の保育園のお友達で1番仲のいい子。すごく優しい子で、だけど芯が強い男の子だ。私によく懐いてくれていて、可愛い子なの。

でも、今日の前にいる男性はとて5歳の男の子がいるようには見えない。だって、どう見ても23、4じゃないかな・・・。

「失礼ですけど、お年は？」

「俺？4月生まれだからもう28歳になりました」

「に、28!？」

見えない！童顔過ぎでしょ！？私の驚きように、あははと笑っている岩淵さん。彼曰く、よく大学生に間違われるんだって。うん、それよくわかるわ。とても私と一回り違うなんて思えない。干支が一緒ってことだもんね、信じられない。

「ところで、君は？」

そこでようやく自分が自己紹介をしていないことを思い出した。なんて失礼な奴なんだ……。

「すみませんっ！私、三崎陽菜です。結翔がいつも悠大くんにお世話になってます」

「あー、結翔君のお姉さんか！悠大がいつも家で話すんだよ。結翔君の事もだけど、なっちゃん、なっちゃんってさ」

可愛い。あんなプリティな笑顔で『なっちゃん』なんて寄って来られたら何でもしてあげたくなっちゃんよ。

……あれ？そういえば悠大くんって、お母さんがいないみたいなことを結翔が言っていたような……？

「あの、今悠大君は？」

「家だよ。俺の両親がみてくれてるんだ。悠大が寝た後によく来るんだよ」

やっぱり、お母さんじゃないんだね。これ以上はあんまり詮索しないようにしておこう。

それにしてもお兄ちゃん遅すぎ！もう11時を過ぎたところ。あのお兄ちゃんが2時間もお風呂に入っているなんてありえない。

「あの、ちょっと兄に電話かけてもいいですか？」  
「うん、いいよ」

私はそこから少し離れてお兄ちゃんに電話をかけた。数回のコール音の後、お兄ちゃんはようやく出た。

「あ、お兄ちゃん？まだ？」

『何、お前も出てるの？』

「とつくだよ。ずっとロビーで待ってるのに」

『マジかよ・・・わりい、ちょっと捕まってる・・・』

「捕まってる？」

『今行くから、どこ？』

「テレビの前」

『了解』

不可解な言葉を残して、電話は切れた。捕まってるって何だ・・・でもあの様子からするとお兄ちゃんも結構前から待ってたみたい。

岩淵さんのところに戻ってこれからお兄ちゃんが来ることを伝えようと、挨拶したいと言って一緒に待ってくれることになった。それから、悠大君はお兄ちゃんとも面識あるもんね。

数分後、ちょっとイラついた様子のお兄ちゃんが私を見つけてやってきた。そして私の隣にいる岩淵さんを見るやいなや、目で「誰だ？」とでも言うように睨みつけてきた。ああ、もう！ガラ悪すぎ！

「こちらは岩淵悠馬さん。悠大君のお父さんだよ」

「え、あー・・・いつも結翔がお世話になってます」

「いいえ、こちらこそ。悠大が『結翔君にはかっこいいお兄ちゃんがいる』っていつも羨ましそうに言ってるよ」

あんなに不躰な視線（世間ではガンを飛ばすという）をぶつけたのに、岩淵さんはそれに気を悪くした様子もなく、にこやかに答えてくれた。うーん、これが大人の対応？

でも、岩淵さんを見てたら悠大君があんなに優しくいい子だったことにも頷ける。ホントそっくりだよ、この親子。

「じゃあ、俺はそろそろ帰るよ。2人も気を付けて帰るんだよ」  
「はい、さよなら」

岩淵さんはバイバイ、と手を振ると足早に立ち去った。最後まで笑顔を絶やさない岩淵さんだったね。それに引き替え・・・

「お兄ちゃん目つき悪すぎ！」  
「誰かわかんなかったからだよ。またお前が捕まってるのかと思っ  
た」

「そうとは限らないんだから、もうちょっと冷静になってよ？」  
「善処する」

私のことを思ってくれているのがわかるからあんまり強くは言えないんだけど、でもこれじゃあ全然他意のない人まで遠ざけちゃう。まあ今回の件でお兄ちゃんも自分でわかったみたいだし、これから  
はちよつとは良くなるかな？

「帰るぞ」  
「はい」

さりげなく私の荷物を持ってくれるあたり、女の子慣れしてるな  
って思う。きつとこつとこつとこつとに女の子はくらくらときちやうんだ  
らう。

あ、そういえばさっきの捕まってるって何だったんだろう・・・。

「ああ、気にすんな」

気にすんなって言われても気になるんだけど・・・。と思って振り返ると、大学生くらいの若い女性の集団がこちらを見ていた。あー、あれか・・・。

お兄ちゃんの嫌いそうな、押しの強そうな女性たち。お風呂上りだっていうのにしっかりメイクをしているのが不思議な違和感を醸し出している。

私の事じゃなくて、自分のこと心配した方がいいんじゃないかな？だって私は今の今まで誰にも声はかけられてないし。

「それは岩淵さんがいたからだろ。ヤバそうな男結構周りにいたし」「そうだった？」

そうだとしたらきつと岩淵さんは私が1人でいるのは危ないと思っつて、一緒にいてくれたんだよね。いい人だ。

「だから心配なんだ」

なんて小さく呟いていたお兄ちゃんだけど、私は聞こえなかったふり。これに突っ込んだら長そうだしね。

再びバイクに乗って、夜の町を疾走する。ホント、今日はいい天気。お兄ちゃんはいつも私を後ろに乗せている時はスピードを加減してくれているから、空を見上げる余裕があるの。日向先輩のバイ

クでは・・・無理。

「明日の朝何時出発？」

「えー、土曜だから8時かな」

「わかった」

未だにお兄ちゃんの送迎は続いていて、せつかくの定期が無駄になっっているという現実。そろそろいいんだけどな。日向先輩とも最近顔を合わせてないし。

それを言ったところで、お兄ちゃんが送迎をやめてくれるわけではないので言わないけど。自分もバスケの練習があるはずなのに、そういうところは徹底してるんだから。

そういえば、明日はうちの学校でどっかの部活が練習試合をするって聞いた。やっぱり今の時期、運動部は大会を控えて気合入ってる。お兄ちゃんたちみたいなの強豪チームはなおさらだろう。それなのに私の送迎なんてしてていいのだろうか。

「いーの。俺天才だから」

「・・・そう」

自分で言っちゃうから嘘っぽく聞こえちゃうけど、ホントに上手だもんね。怪我だけは気を付けてね、って言ったなら「はいはい」だって。心配ばかりするくせに、心配されるのは苦手みたい。そういうところは可愛いよね。



お兄ちゃんと私(2) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

### お兄ちゃんと私(3)

「ごめん、結翔がスイッチ切ってただけだった」

なんじゃない、それ！誰も確認しなかったのが悪かったんだけど、お湯が出なかつたのはお風呂のスイッチが切れていたただけのことで、私たちが出発してから陽翔が気付いたらしい。一応お兄ちゃんにメールくれたみたいんだけど、全然気付かなかったって。

でもそのお蔭で、私も部活に1日参加できることになった。朝、田浦さんの家に結翔を預けると、お兄ちゃんのバイクで学校に出発。

「じゃあ、帰りはまた連絡寄せ」

「うん」

お兄ちゃんと校門で別れると、それを見計らっていたかのように葵や先輩が物陰からわらわらと出てきた。

「陽菜、毎朝らぶらぶだねえ」

「葵・・・あんまり嬉しくないよ」

「でもあんなにかっこいいお兄さんがいて、陽菜ちゃん羨ましいよ」

葵も先輩も、お兄ちゃんを美化しすぎだよ。全然羨ましがられるよなことはないんだよ。だって、これは私のわがままでもなんでもなくて、強制命令なんだから・・・。

って言ってもわかってくれるはずもなく、私は彼女たちを適当にあしらいながら楽器を準備し始める。

うちの部活の練習は、午前中はみっちり基礎。9時から12時まで3時間は基礎練習で終わるのだ。でも、私は基礎練習が嫌いじゃない。基礎練習の質でその日の調子が左右されるし、自分の欠点もよくわかるしね。

ちなみに私が担当している楽器、トランペットは金管楽器の中でも花形。なくてはならない楽器だ。でも、その分ミスが目立つ楽器でもある。

今、トランペットパートには1年生から3年生まで7人の部員がいる。その中で大会に出るのは3年生3人と2年生1人。今年の3年生はみんなすごく上手で、その中に混じって吹いている唯一の2年生は次期パートリーダーと言われている実力者。

私ともう1人の1年生（実は葵）は、そんな先輩たちの背中を見て必死についていこうと頑張っているところ。でもやっぱりすぐには上達しないよね。地道に頑張るしかない！

「午後は大会メンバーは合奏で、それ以外の方は応援練習です」

午前の練習を終え、部長が各パートに連絡していた。午後は応援練習か。応援練習というのは運動部の、特に野球部の試合の時に演奏する応援曲の練習。甲子園とかでよく見るあれだ。

今、大会メンバーとして大会曲を練習している先輩たちも、1、2年生の時は応援の方に回っていたんだって。しかも、うちの野球部は結構強くて、何年かに1度は甲子園出場を果たす。公立なのに、すごいよね！

だから応援にも気合が入っていて、地区大会から吹奏楽部が応援に行くのだ。余談だけど、その関係で付き合うようになったカップルがいっぱいいるの。こっちはほぼ女子の集団、向こうは男子の集団だからね。

野球部の応援だから、必然的に屋外での演奏になる。屋外は屋内と違って音が反響するものがない。ということは軽く吹いただけでは音が選手や観客には届かないということ。遠くに届くような、伸びのある音を。それも力が入っていない、きれいな音で吹かなければならない。

そのため、外で吹く感覚をつかむために応援練習は校庭や中庭、屋上で行う。私はそんな応援練習が好きだった。だって、風に吹かれて楽器を吹くのとて、楽しいじゃない？

「陽菜ー！ミーティング！」

「えっ！？もうそんな時間！？」

気がついたらもう部活が終わる時間になっていたらしい。あんまり熱中しすぎて、時間が過ぎるのも忘れていたみたい。

体には適度な疲労感。吹奏楽部なんてただ吹いてるだけって思ってる人も多いと思うけど、腹筋はもちろん、肺活量だって必要。これって結構体力勝負なんだから。

「ねえ、ちよつと体育館覗いてみない？」

「何があるの？」

「バスケット部が練習試合やってるんだって。日向先輩と皐月先輩見に行こうよ」

楽器を片づけながら葵が言った。そうか、今日練習試合をやっているのはバスケット部だったんだ。っていうか、日向先輩も皐月先輩もバスケット部なんだね。

体育館のギャラリーへは、廊下から直接行けるようになっていた。ギャラリーに続く階段を上がって行くと、歓声が聞こえてきた。ギャラリーには土曜日だっていうのに、女子生徒がたくさん集まっていた。しかも、うちの高校の生徒だけじゃなく、向こうの高校の女子生徒もたくさんいた。

人込みを抜けて、どうにかコートが見える場所までやってきた。どうやらまだ試合は続いているらしい。

「午前中は合同練習をして、午後から練習試合だったらいいよ」

朝からやっていたはずなのに長いな、って思ってたら葵が教えてくれた。そうか、葵の彼はバスケット部だもんね。日向先輩と皐月先輩を見に行こうなんて言っただけで、本当は彼のこと見たかったんじゃない。そう言ったら葵、真っ赤になっちゃった。珍しい。

「ほ、ほら！日向先輩も皐月先輩も出てるよ！」

誤魔化すようにコートを指差す葵。しかたない、今日は勘弁してやるか。葵の指差す方を見ると、ユニフォーム姿の2人がいた。

キュッキュと響くバッシュの音と、指示を出す監督、そして応援するチームメイトの声が体育館を包み込む。それは単なる練習試合とは思えないほどの雰囲気だった。

「なんか両チームともすごい気迫じゃない？」

「そりゃそつだよ。因縁試合だもん」  
「因縁試合？」

うちの高校のバスケット部はこの辺じゃ有名なチームだ。簡単に言うてしまふと強いってこと。今日の相手校は、そんなうちのバスケット部と同じくらい強いチームで、しかも去年の春の大会では負けている。だから3年生たちは練習試合とはいえ、並々ならぬ気合が入っているんだって。

汗を拭いながら相手を睨みつける先輩。そんな姿を見てみると、なんだかドキドキしてきちゃう。まともに顔を見るのも久しぶりだし、何よりバスケットをしている姿は初めてだ。これはみんながきゃーきゃー言う理由もわかる。

ボールを追うと、皐月先輩も目に入る。以前のキラキラ王子は、バスケの鬼と化していた。相手を捕える視線は、とてもこの間の皐月先輩と同一人物とは思えない。

「まだ2クォーター目だね」  
「うん、結構遅くに試合が始まったんだね」

第2クォーター目が終わった時点で、26対31。相手高校が一步リードだ。それにしてもホント実力が拮抗している。事実上の地区大会決勝戦、なんて声も聞こえてくる。

第3クォーターが始まると、すぐに日向先輩がシュートを決め、点差が3点に縮まる。その瞬間、先輩と目が合ったような気がしたんだけど、すぐに逸らされてしまったから気のせいだったかも。

そこから、怒涛の猛攻が始まる。一気に点差を詰めると、ついに

逆転のシュートが入る。それを決めたのが途中交代で入った葵の彼だったから、もう葵は大興奮。飛び上がって喜んじゃってるよ。

でも、それで終わるような相手校じゃない。逆転されてもまた向こうは落ち着いてシュートを決めてくる。これまでの守るバスケットじゃなくて、このクォーターは点の取り合いになりそうだ。

そう思ったら本当に次々シュートが決まっていく。試合のスピードも速くなって、ボールを追うのがやっとだ。まだ第3クォーターが始まって2分も経っていないのに、あつという間に35対37。どれだけポンポンシュートが入るんだろう。

私たちは会話をするのも忘れて試合に見入っていた。バスケットをほとんど知らない私から見ても、この試合のレベルが高いんだってことくらいはわかる。そんな中で、4番をつけている日向先輩って、やっぱりすごいんだな。

今までこっちのチームしか見てなかったんだけど、向こうのチームの4番もさつきからすごい活躍。日向先輩がマークしているけど、実力は五分五分ってところ。頑張っ、先輩！

しかし、その2点差が縮まらないまま、3クォーター目が終了した。

お兄ちゃんと私(3) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。



## お兄ちゃんと私(4)

試合中、私も葵も言葉を発することができなかった。だから3クオーター目が終わると、2人同時にふうつと息をついた。

「なんか、想像してた練習試合と違うね」

「うん。レベル高すぎ・・・」

練習試合だから、もっと和気あいあいとしたものだとはかり思っていたんだけど、全くそんなことなかった。運動部では常識なのかもしれないけど、運動部経験のない私たちには衝撃だった。

ベンチに座って監督の指示を聞く先輩たちの表情は真剣そのもの。何かに打ち込んでいる人の顔って、すごく凛々しくてかっこいい。

「陽菜」

ギャラリーからコートサイドを見つめながらそんなことを考えていたら、急に後ろから声をかけられた。男の人？

私と葵が同時に振り返ると、そこにはさっきまでコートに立っていたと思われる背の高い男性が・・・。

「どうして・・・」

ユニフォーム姿のまま、タオルを肩にかけてギャラリーに上がってきた男性の背番号は4。そのユニフォームは私たちの高校のユニフォームではなかった。

「大翔先輩！」  
「おう、葵ちゃん」

どうして教えてくれなかったのよ！お兄ちゃん、うちの高校に来るなんて一言も言っただけじゃなく、何が『終わったら連絡寄こせ』よ。っていうか、日向先輩ばかり見てて自分の兄に気づかない私も私だけど……。

「お前が他ばっか見てて気付かないから、来た」

「はあ！？」

「終わるまで、じっくり見てろ」

それだけ言うと、お兄ちゃんは急いでコートに戻った。第3クォーターと第4クォーターの間のインターバルはほとんど時間がないらしく、お兄ちゃんが戻るとすぐに試合が始まった。

お兄ちゃんは試合が始まる直前に、ちらっとこちらを見て不敵な笑みを浮かべると、すぐにパスを受け取り、自ら豪快にシュートを決めた。

第4クォーター開始10秒足らずで決められたそのシュートは、体育館をどよめかせた。なんでこんなにも体育館中が騒然としたか、それは私が見た限りでは、お兄ちゃん、つまり相手校の4番がこの試合で自らシュートを決めたのが初めてだったから。

お兄ちゃんは確かにさつきから相手をドリブルで次々かわしていたり、シュートをアシストしたりと、すごい活躍だった。ただ、なぜか自分でシュートを決めることはなかったのだ。

そんなお兄ちゃんがいきなり豪快なシュートを決めた。だから意

表を突かれた日向先輩たちは、動くことができなかつたの。

味方とハイタッチして守備位置に戻る途中、再びお兄ちゃんが私に視線を向けた。『他ばっか見てて気づかないから』、今のシュートはそんな私に向けた嫌味？

でも、今のシュートが日向先輩たちに火をつけたのか、その直後に日向先輩が速攻でゴール下までボールを運ぶ。シュートを打つかと思いきや、思いつきリリースペースにいた皐月先輩にノールックパス。そしてボールを受け取った皐月先輩が鮮やかにシュートを決めた。

す、すごい……。この2人の連携は、他を圧倒している。お兄ちゃんも流石にムツとした表情。この試合、本当にどっちが勝つかわからない。

「ね、どっち応援するの？」

不意に葵が聞いてきた。そうなんだよね、さっきまではもちろん日向先輩たちを応援してたんだけど、お兄ちゃんにも負けてほしくないし。そう言ったら「陽菜も隠れブラコンだからね」なんて言われちゃった。

「でも、やっぱり今日は日向先輩」

先輩がバスケをやっているところなんて初めて見たし、その真剣な表情が、私の心をぐっと掴んで離さなかつた。

「大翔先輩に言ってやる」

「なんとでも」

その後、試合は一進一退の攻防を繰り返して、最終的に相手校が3点差で勝利した。試合終了後の日向先輩の表情は見えなかったけど、練習試合だからって悔しくないわけがない。下へ降りて声をかけることもできず、ただ私はロッカーへと引き上げていく先輩の後ろ姿を見つめていた。

「ねー、いつまでそうしてるの？」  
「へ？」

ぼーっとしていて、気が付くともうコートにもギャラリーにも、誰一人残っていなかった。

「もうすぐバスケット部も出て来るよ、行こう」

なんだか、今あんまりバスケット部と・・・というか日向先輩と顔を合わせにくいなあ、なんて思いつつギャラリーを後にする。だって、何て声をかけていいかわからないんだもの。

そんな心配も、「先輩たちなら帰ったよ」という葵の彼氏の一言によって杞憂に終わった。ほっとしたような、ちょっと寂しいような。

「じゃあね」

玄関で葵と別れると、私もお兄ちゃんの待つ自転車小屋に向かった。バイクを自転車小屋の脇に停めているから、とメールが入っていたのだ。自転車小屋に着いたけど、お兄ちゃんはまだいないみたい。

「あ……」

先輩のバイク、まだある。さっきもう帰ったって葵の彼は言っていたけど、もしかしてまだ学校にいるの？

ここで待つていたら、お兄ちゃんより先に先輩が来たら、そんな淡い期待を胸に抱いてそわそわと落ち着きなく右往左往。

「陽菜」

現れたのは……

「なんだあ……」

「なんだとはなんだよ」

お兄ちゃんだった。お兄ちゃんは怪訝そうな顔で私にヘルメットを手渡す。そりゃあね、先輩に何か言いたいことがあったわけじゃないの。でも、顔を合わせずらいと言いつつも、心のどこかで先輩が来てくれないかな、って思ってた。

お兄ちゃんの背中にしがみつくと、あんなに汗をかいた後とは思えないくらい爽やかな香りがした。どうなってんだ、この男。

「なあ、陽菜」

「何？」

エンジンをかけながら、お兄ちゃんが背中を向けたまま話しかけて来た。

「お前、日向と知り合いか？」

一瞬、心臓がドキリと跳ねた。そこで正直に言っても良かったのかもしれないが、何故か私は打ち明けることを躊躇い、「何で？」とだけ言った。

「第4クォーターの途中、あいつが俺に言ったんだ」

「な、何て？」

内心ドキドキしながら、それでも平静を装って問い返す。

「『インターバル中に女にちょっかい出してんじゃねえ』って。あいつがそんなこと言うの初めてだったからさ」

先輩の言葉の真意はわからない。お兄ちゃんが話していた『女』が私だとわかっていたのかもわからない。ただ試合中にギャラリーに行つてまで、女と話していたお兄ちゃんが気に入らなかつただけかもしれない。でもあるいは・・・なんて。

「お兄ちゃんつて日向先輩と知り合いなの？」

「まあな。あいつもK市出身なんだよ」

「へえ」

知ってるけどね、という言葉は飲みこんでおいた。聞けばお兄ちゃんと日向先輩は中学時代からバスケットで張り合っていた、所謂ライバル同士なんだって。

日向先輩は私の名前を聞いて、私とお兄ちゃんが兄妹だって気付いたかな。でも私とお兄ちゃんは顔の系統が違うし、三崎って名字もK市では多いからわかつてないかな。

先輩とお兄ちゃんが知り合いだなんて思ってもみなかったから、先輩には今まで何も言っていなかったけど、今度会ったら「あれは兄です」って言っておこう。時間が経つと言いにくくなりそうだから。2人がライバル関係ならなおさら。

でも、お兄ちゃんには私が日向先輩と知り合いだということは、黙っていようと思った。だって、ただでさえ男の人と親しくなるのを警戒しているのに、日向先輩と親しくなったなんて言ったら、絶対に邪魔されるもの。

「あ、ラップ買って帰るから、スーパー寄って」  
「おう」

結局、私はお兄ちゃんの問題には答えなかった。上手く話題を逸らすことに成功！そして貴重な情報入手！

お兄ちゃんは自分の質問を忘れて、そのままバイクを発進させた。そう言えばお兄ちゃんは先輩に何て答えたんだろう。でも、それを聞くとまた話を元に戻すことになってしまうので、結局聞けずに終わってしまった。

お兄ちゃんと私(4) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。



## お兄ちゃんと私(5)

翌日の部活、私は久しぶりに電車に乗っての通学だった。なぜならお兄ちゃんのバイクの調子が悪かったから。昨日の帰りの途中、なんか変な音がすることに気付いて、近くのバイク屋さんに行ったら、しばらく入院することになったのだ。

私も最近はお兄ちゃんと帰ってくるし(毎日迎えに来るからね)、男の人の影もないから(テスト期間はほとんど先輩と話す機会がなかったし)、お兄ちゃんによる私の送迎は、めでたく終わりを迎えたのだった。

こういう時、タイミングを計ったかのように先輩に会えるって、まさに奇跡というべきだろうか。いつもバイクで通学しているはずの日向先輩が、この日は何故か駅で電車を待っていたのだ。

「先輩！」

音楽を聴いていて、私の声に気付かないらしい先輩。仕方がないから、そーっと近づいて行って、ひょいと先輩の顔を下から覗き込んでみた。

「・・・おう」

驚いたのを必死で押し殺そうとしている様子が、なんだか可愛らしい。先輩はイヤホンを外すと、それを鞆の中にしまった。

「電車なんて、珍しいですね？」

「まあ、今日は天気悪いしな」

確かに、今日は午後から雨が降るって予報で、今でも分厚い雲が空を覆っている。先輩も雨の日は電車を使っただ。

「お前は どうして電車なんだ？」

「お兄ちゃんのバイク、壊れちゃったんです。だから、今日から電車通学再開です」

先輩は、興味なさげにふーんと言っただけだった。なんか、あんまり機嫌がよくない・・・？そういえば最後に先輩と話した時も、テンションが低かった。もしかして、彼女さんのことを引きずって・・・？

「先輩、彼女さんとケンカしたらすぐに仲直りした方がいいですよ？」

「・・・は？」

先輩は私に、「何を言ってるんだ」とでも言いたそうな顔を向けた。あ、そうか。日向先輩は、皐月先輩が私に言った言葉を聞いていないんだ。それに、私があの日一部始終を見ていたことも知らない。

「皐月先輩に聞いたんです」

とだけ言って、先日の皐月先輩とのやりとりのみを説明した。すると、先輩はチツと舌打ちをして、顔を顰めた。

「彼女じゃねえ。勝手に寄ってきただけだ」

彼女じゃなかったんだ。でも、よくよく話を聞くと、あの日

嫌が悪かったのはやっぱりあの女性が原因だったのだという。それは、あの後にしばらく女性からの着信と、メールが続いてうんざりしていたのが理由らしい。つまり皐月先輩の説明は大方当たっていたってことなんだ。

「そういえば、お前昨日試合見に来てたか？」

「あ、はい。葵が大谷君を見たいって言ったので」

大谷君っていうのは葵の彼氏の、大谷修也君おおたに しゅうやのこと。1年生なんだけど、昨日みたいに途中出場しちゃったりする実力のある人だ。

「じゃあ第3クォーターと第4クォーターの間のインターバルで、三崎大翔・・・向こうの4番と話してたのもお前か？」

「は、はい」

「やっぱりそうか・・・あいつにちょっとかい出されても、相手にすんなよ」

はい・・・？日向先輩の言葉の意味を、瞬時には理解できなかった。どうやら先輩は私がお兄ちゃんにちょっとかいを出されて（言葉を変えればナンパをされて）いたと思ったらしい。ということは兄妹だということにはやはり気が付いていないようだ。

「親しいんですか？」

「いや・・・。でも最近いろいろ噂は聞く」

なるほど、お兄ちゃんと親しい友達なら、話し方や雰囲気から気付く可能性もあるけど、そんなに親しくないのなら気付かないのも頷ける。

今がチャンスとばかりに、妹ですって言ってしまうおうと思ったん

「ただ、その前に妹としてその『噂』っていうのが気になるの。今のうちに聞いておかなければ。」

「その噂っていうのは？」

「まあ、俺も本当かどうかは知らないけど……」

なんて前置きをしてから、先輩は話し始めた。

お兄ちゃんにはもう決まった彼女がいるから、入り込む隙はないんだって。そんな人いたかな、なんて思いながら話を聞いてみると、毎日のような周囲の女性からのアプローチには、全くと言っていいほど耳を傾けず、しかもどうやら最近では部活が終わると友人の誘いも断ってそそくさと帰っていくらしい。

休日には2人でスーパーに行つて、仲睦まじく買い物をしている姿を何人も目撃しているという。極めつけは先日、夜中に一緒にお風呂に入りに行くまでの仲……！

しかも、その相手の女性はここ数年間ずっと同じ女性で、それでも彼女を見つめる表情は、可愛くてたまらない、って表情をしているんだって……って、全部私じゃん！確かにこの前、スーパー銭湯でも捕まっちゃって言ってたしな。

「三崎も意外と一途だよな。他は気に入らないけど」

先輩、気に入らない相手にまで感心しちゃってるし！いやいや、それは『彼女』じゃなくて『妹』ですから……。中学時代はとつかえひつかえと言つていくくらい、上から下までいるんな女性と付き合っていたお兄ちゃんが、最近では真面目だな、って思ってたけど、私のせいだったのね。

ちょうど両親が亡くなった時期からだから、きつと下3人を支えて行かなきゃいけないっていう思いが、恋愛感情より優先されていたんだろ。申し訳なく思うと同時に、ちよつと嬉しかったりして。

でも、本人の意思とは関係なくこんな噂が流れていたら、彼女つくりたくてもつけれないよね。うーん、どうしよう……。

「どうした？」

「はっ……!？」

私は難しい顔をして考え込んでいたようで、今度は逆に、先輩に顔を覗き込まれた。ヤバい、ヤバいって!そのアップは瞬殺ものだよ。

動揺して言葉が出てこない私への助け舟、電車が3番線に到着した。とりあえず、今はまず電車に乗って、心が落ち着いたら妹だとカミングアウトすることにした。

しかし、いざ電車に乗り込んでみると、日曜だっていうのに大混雑。どうやら今日はこの先のライブ会場で、超有名なアーティストがライブを行うらしい。こんなに朝っぱらから行かなくてもいいのにつ!カミングアウトどころか、話すことすらできないじゃない。

しかも苦しい……。160センチもない私は、人込みの中に埋もれてしまうから、息をするのもやっとなの。電車が揺られるたびに、私もあつちに行ったりこつちに行ったり。

「俺に掴まってる」

掴まるところが見当たらず、ふらふらしている私を見かねた先輩が、自分の腕を貸してくれた。それで周りの人様に迷惑をかけることはなくなったんだけど、その代わりに揺れに翻弄される人様から迷惑をかけられまくった。

すると、先輩が体を反転させて私と他の乗客の間に入ってくれた。お蔭で、私は先輩と電車のドアに挟まれる形になり、随分と楽になった。きっと先輩が人の重みを全部受けてくれているからだろう。

それでも、先輩はそのことに対して何の反応も示さなかった。絶対重いはずなのに……。お兄ちゃんなら「感謝しろ」なんて言い出しそうなところだけに、この先輩の様子には驚くばかりだ。しかも密着しているからすごくドキドキする。絶対顔赤くなってるよ……。

電車に乗っている間中、先輩はこの体勢を崩さなかった。降りてからも、このことについて触れることはなく、他愛もない会話をしながら学校に向かったのだ。この頃には、私の頭の中からカミングアウトのことはすっかり抜けてしまっていた。

お兄ちゃんと私(5) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

## お兄ちゃんと私(6)

部活が終了して楽器を片づける前に携帯をチェックするのが私の癖。楽器を吹いている時は気付かないから、気になってしまふの。大抵の人は私がこの時間は部活をしているとわかっているもので、そんなにメールが来ているということもないんだけど、今日はメールが2件来ていた。

1通目の送り主は陽翔。こんな時間にメールが来るなんて珍しいなと思い、すぐに内容をチェックすると、結翔が熱を出したので病院に連れて行ったという内容だった。

温かくなってきたいた時期だけに油断していた。結翔はあまり体の強い子どもではないので、もっと小さい頃は年中熱を出していたのだ。

急いで帰らないといけないと思いつつ、2通目のメールをチェックする。送り主はお兄ちゃん、お兄ちゃんも陽翔から同様のメールをもらって、既に連絡を取ったらしい。

『結翔だけど、悠大の家で遊んでいる時に吐いたらしい。すぐに悠馬さんが家に連絡入れて、車で家まで送ってくれた。その後、陽翔と一緒に病院にもついてきてくれたって』

熱を出したのは心配だけど、正直悠大君の家でよかったかもしれない。そして、そこに悠馬さんがいてくれてよかった。家に車はあるけど、唯一運転できるお兄ちゃんは学校だったし、陽翔だけじゃ病院に連れて行くのも大変だっただろう。



『結翔の飲み物と、悠馬さんへのお礼買いに行くからS駅で待つて  
る。車出す』

メールはそう締めくくられていた。S駅というのは、私の通う高  
校の最寄駅。学校は家から来ると線路を跨がないといけないから、  
S駅の正面口の方が行きやすいのだ。バイクなら高架下をくぐれる  
んだけどね。

このメールを受信したのが30分前だから、今から片づけて駅に  
向かったらちょうど到着するくらい。私は先輩に断って、ミーティ  
ングには出ずに学校を飛び出した。予報通り午後から降り出した雨  
は、思っていたよりも強い。しかも風もそこそこ吹いているから、  
傘があまり意味を成していない。でもそんなことを気にしてはいら  
れないので、土砂降りと言っているほどの雨の中私は走り出した。

S駅に着いた頃には私の制服はびしょびしょで、髪の毛からも水  
が滴っているほど。傘を閉じてきよるきよるとお兄ちゃんの車を探  
すが、まだ来ていないようだ。

仕方がないので雨を防ぐために駅の中に入り、ハンカチで滴る水  
滴を拭いていると、数分後に向こうから見慣れた車が姿を現した。

私が駅から出ようとドアを開けると同時に、背の高い男性が入  
れ違いで駅に入ってきた。男性とすれ違った瞬間にふわっと覚えの  
ある香りが鼻をくすぐる。

「日向先輩！」

先輩は私に気が付かなかったみたいで、私を見下ろしながら驚い  
ている様だった。今日は朝も驚いた顔を見れたし、貴重な日かもし

れない。

「その格好・・・」

「あ・・・」

そうか、私がこんなにびしょびしょで髪も濡れてばさばさだから、誰だか分らなかつたのか。自分の状態を忘れてついつい呼び止めてしまったけれど、こんな恰好なら気付かれない方が良かったかもしれない。

「雨酷いから、濡れないようにしてくださいね！」

「お前に言われたくないけどな」

まったくもってその通りだ。こんなずぶ濡れな奴に言われたくないだろうな。自分で言っておきながら、自分の発言に笑ってしまう。先輩もそれにつられて口角を上げて少しだけ笑った。

「これ使え」

鞆から出されたのは、大きなスポーツタオルだった。洗濯されたばかりのいい香り。それにどことなく先輩の香りもするような気がする。

「ありがとうございます」

ちょっと寒くなってきたので、遠慮なくタオルを肩からかけさせてもらうことにした。温かい。先輩はもう一つ、今度は普通サイズのタオルを取り出して、私の髪をガシガシと拭いてくれる。そんないいムード(?)の中、不機嫌そうな声が私の耳に届く。

「陽菜」

「はいっ！」

そんなことをしていたら、待ちくたびれたお兄ちゃんが車を駐車スペースに停めて迎えに来てしまった。やっばい・・・お兄ちゃんには日向先輩とは知り合いだったことは言っていない・・・。

「三崎・・・？」

眉間に皺を寄せた日向先輩が怪訝そうにお兄ちゃんを見ている。そうだ、まだ兄妹だっていうことも言っていないのだ。先輩に説明しようと口を開きかけたところで、私より先にお兄ちゃんが口を開いた。

「日向、陽菜と知り合いか？」

「・・・後輩だ」

その言葉を聞いてちらつとこちらを一瞥するお兄ちゃん。その鋭い視線が私を射抜く。言葉は発していないのに、その冷たい視線はお兄ちゃんの言わんとすることを十二分に語っていた。

「あの、ね？」

「帰るぞ。日向、タオルさんきゅ」

「あ？ああ・・・」

お兄ちゃんは私の言葉を遮り、日向先輩にタオルのお礼をすると私の腕を掴んで車へと引きずって行った。そんな私たちの様子を先輩はただ黙って見ているだけだった。

速い歩調で駐車場へ向かうと、半ば押し込まれるように車に乗せ

られる。助手席側のドアが閉められてから少しすると、運転席側のドアが開き、お兄ちゃんが乗り込んできた。恐る恐る視線を合わせ、にこつと微笑んでみるも……

「日向と知り合いかって……俺、聞いたよな？」

淡々と話す口調は荒げられているわけではないのに、それが余計に私に恐怖を与える。こ……怖い……。でも私、そうだと間違うとも言っていないし。だからお兄ちゃんに嘘ついてなんかないから！

「で？」

で……って言われても。もうお兄ちゃんは大体の予想がついているのだろう。だったら言えればいいんでしょ。

「そうよ、送ってくれたのも先輩。たまたま課題をやってたら先輩も学校に残ってて、苦手な数学を教えてもらったの」

開き直って、今までの出来事の真相を話す。そうしたらお兄ちゃんはずわざとらしく大きく溜息をつくと、ハンドルに額をつけた。

「あいつ、あんまりいい噂聞かねえんだよな」

日向先輩と同じようなこと言ってる。でもお兄ちゃんに聞いてもやっぱり親しいわけじゃないみたいで、試合の時に一言二言話す程度の関係らしい。

つまりお互いよく知らないけれど、なぜか良い印象を持ってはいないってことだ。一般的に、性格が真逆だとかこういう感じになるけれど、2人の場合は似すぎているから合わないのかもしれない。

ちなみに日向先輩の噂ってなんだろう。以前葵にちょっと聞いたけど、どうも現実的じゃなかったんだよね。お兄ちゃんの方が葵よりは真実に近い噂を知っていそうな気がする。

気になるけど、上手い聞き方をしないと教えてくれないだろうな。うーん、なんて聞いたらいいだろう。

「今、どうやってその噂を聞き出そうか考えてんだろ？」

簡単に言い当てられてぐうの音も出ない。やっぱり嘘がつけない性格なんだよ、私は。でもわかってるならお兄ちゃんも教えてくれたっていいのに、自分からは話してくれないんだから性格が悪い。

「どうやってたら教えてくれるの？」

「噂なんて所詮噂だ。別に知らなくてもいいだろ」

おお、珍しく説得力のある言葉。確かに噂は気になるけど、聞いたからって100%信じるわけじゃないの。葵から聞いた時もそうだったけど、噂は噂。興味本位で聞きたいだけ。その人となりかどうかは自分の目を信じるタイプ。

流石は私の兄、考え方が似ているね。そういつさっぱりした性格、自分でも嫌いじゃないんだ。

「でもあいつは気に入らない」

「なんでよ、何かあったの？」

噂を信じるタイプじゃないなら2人の間に何かがあったとしか考えられない。私が聞いても、お兄ちゃんは「昔ちよつとな」としか

教えてくれなかった。

やっぱり、2人は昔・・・それが高校に入ってからなのか、中学時代なのかはわからないけど、何がトラブルがあったんだ。それでお互いをよく思っていないということなのだろう。

「ふ、ふえつくし！」

車内の重い空気にそぐわない間抜けなくしゃみ。あー、寒くなってきた。本当に、ちよつと濡れすぎて限界なの。どんどん体温が奪われちゃって、タオルをかけていても鳥肌が立つくらい。これじゃ私まで風邪をひいちゃう。

「俺の服着とけ」

お兄ちゃんは車を取りに行ったときに着替えてきたようで、Ｔシャツに長袖のパーカーを羽織っていたので、そのパーカーを脱いで私に貸してくれた。

「でもこんな人目のあるところで制服脱げないよ」

「パーカーで隠しててやるから。本当に風邪ひくぞ」

パーカーで隠すって言っても、助手席側と前はいいよ。でも運転席側はお兄ちゃんの体で隠すってことじゃない。それじゃお兄ちゃんには丸見え・・・

「見ないでよ」

「見るか」

呆れたようにそう言うと、パーカーを脱いで私を隠し、目を閉じ

た。あ、この間に着替えろってことね。

ちょっと狭いけど、文句は言っていられない。急いで濡れた制服を脱いで下着だけになると、先輩から借りたタオルで体をさっと拭き、パーカーを羽織った。今までお兄ちゃんが着ていたお蔭で、温かくてちょうどいい。

「いいよ」

時間にして3分ほどだっただろうが、お兄ちゃんは目を開けると同時に「長い」と一言。自分としては早かったつもりなんだけど、待ってるだけだと長く感じたのだろう。でも、とりあえずはこれで少しの買い物くらいは乗り切れそうだ。私が乗り込んでから5分以上経って、ようやく車は出発した。

お兄ちゃんと私(6) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。



## お兄ちゃんと私（7）

一夜明けると、結翔の熱もすっかり下がって一安心。でも念のため今日は1日保育園を休ませることにして、田浦さんの家に預けてから学校に向かった。具合が悪い日はよくぐずるんだけど、今日の結翔は聞き分けが良くて、田浦さん夫婦もほっとした様子だった。

私は昨日と同じ電車に乗るため、駅に急いだ。今日も朝から雨が降り続けているので、先輩が電車に乗っている可能性は高い。昨日のことを謝るために、どうしても先輩に会いたかった。

駅まで歩くと結構な時間がかかるので、早めに家を出た。そのため、駅に着いたのは昨日の電車の時間まであと15分もあるという時間だった。

とりあえず3番線に向かって、ホームに先輩がいないことを確認すると、改札から繋がる階段の前に陣取った。改札から3番線に来るにはこの階段を通らなければならない。これで先輩が来たことにすぐ気付けるだろう。

1本早い電車が発し、私1人がホームに取り残された。降りてきた人たちが私のことを不思議そうに見ているけど、そんなこと気にしない。今日はどうしても先輩を見逃すことはできないのだから。

「陽菜ー！」

「あ、おはよう」

「おはよう。階段睨みつけて、何してるの？」

階段を上ってきたのは葵。私は昨日の出来事を掻い摘んで葵に説明した。すると葵はうんうんと頷きながら面白そうに話を聞いていた。私にとっては面白くも何ともないんだけど……。

「じゃあ先輩はまだ陽菜が大翔先輩の妹だって知らないの？」

「わかんない。昨日気付いたのかもしれないけど、まだわかってないかも」

「ふうん。じゃあ早めに兄妹ですって言うっておかないとね」

「え、どうして？」

私が一刻も早く先輩に会いたいののは、昨日のお兄ちゃんの失礼な態度と、挨拶もなく帰ってしまったことを謝りたかったからだ。兄妹だということを説明するのはそのついででよいと思っていたのだが……。

「うーん、だつてきつと先輩……」

と葵が呟いたところで、電車がホームに入ってきた。その轟音で葵の小さな呟きは私の耳には届かなかった。ひとまず電車に乗り込んで、そして再び葵に聞いた。

「さつきなんて言ったの？」

「あ、ううん。確信なんてないからいいの。ただ小さな誤解が後々問題になるかもしれないから、早めに兄妹だつて言うておいた方がいいねつてこと」

「そうね」

つて！思わず電車に乗り込んでしまっただけで、先輩を見つけれなかった。葵と話しつつも、ちゃんと目は階段を見ていたのだから、見逃したわけではないと思う。ということは、今日は電車には

乗らないということだったのだろうか。

目に見えて落胆する私に、葵が「学校行ったら探そう」と慰めてくれた。でも、学校に行ってしまうえば1年生と3年生だもの、あまり会う機会はない。階は別だし、仮に同じだとしても、気軽に3年生教室になんて行けるわけがない。

それに3年生はもう実技教科はないから、音楽室や家庭科室のある特別教室棟にはほとんど行かない。とすると、チャンスは放課後しかも部活が終わって先輩が帰るまでの短い時間に捕まえるしかない。

放課後の部活が終わって、速攻でバスケット部の練習している体育館に行ったのに、日向先輩だけは影も形も見当たらなかった。他の部員はまだほとんど残っていたし、大谷君なんてまだシュート練習をしていたのに！

毎日大谷君を迎えに来る葵はともかく、私がバスケット部に来るとは珍しい（というか初めて）ので、部員は「誰だ？」という表情でこちらを見ていた。その視線に怯んだ私は、やっぱり帰ろうかと思つて身を引いた。その時、

「あれー、陽菜ちゃん？」

と、どこかで聞いたような声が体育館中に響き渡った。部員全員の注目が声の主に集まる。私もみんなの視線の方向に目をやると、そこにいたのは副会長にしてバスケット部副部長（葵情報）の皐月颯太先輩だった。

「臯月先輩！」

「どうしたの？陽菜ちゃんがうちの部活見に来るなんて珍しいね」

「はい、ちよっと日向先輩に用事があった」

「うーん、残念。一樹は今日早めに上がったんだよ」

「そうですか・・・」

がつくりと肩を落とす私。今日はすれ違っただけだ。思わず、体育館の端で他の女の子たち（ファンクラブの人たちらしい）から離れてへたりと座り込んでしまった。

結構長い時間そうやっていたのかもしれない。だって、さっきまでシュート練習をしていた大谷君がすっかり帰り支度をして、葵と共に私を上から覗き込んでいたのだから。

「また明日チャンスあるよ、帰ろう？」

いつもは2人で帰ってしまうんだけど、今日はきつとあまりにも落ち込んでいる私を置いて帰ることは出来なかったのだろう。一緒に帰ってくれると言ってくれた。申し訳ないから断っただけ、葵は断固として1人で帰そうとはしなかった。それでも私が食い下がっていると、脇から呑気な声か。

「じゃあ俺も一緒に帰る」

「颯太先輩！」

驚いて声を上げたのは大谷君だった。私たちは状況が飲みこめなくて、ただ臯月先輩を無言で見上げているだけしかできなかった。

「どうしたんですか？」

「どうもごうも、周り見てみるよ。残ってんのお前らだけ」

フアंकクラブの女の子たちも解散した後だからか、臯月先輩は王子様の仮面を外して、素の臯月先輩になっていた。その臯月先輩の言葉を聞き、辺りを見回してみると、本当に部員も見学者も誰も残っておらず、臯月先輩が鍵を閉めるために残っているだけだった。

「何があつたか知らんけど、鍵閉めるからとりあえず外に出ろ」  
「はい」

私たちは言われるままに体育館から出て、玄関へと向かった。教務室に鍵を返した先輩も後から合流して来て、不思議な組み合わせの4人で駅に向かうことになった。

「先輩も電車通学なんですか？」  
「そう。だって陽菜ちゃんとも前K市で会ったじゃん。結翔とも」

そうだった。ということは臯月先輩もK市出身なのか。と考えていたら、大谷君が臯月先輩も日向先輩も同じ中学出身だということを知ってくれた。ということは、お兄ちゃんに聞いたら臯月先輩のことも知っているのかもしれない。

ちなみに大谷君だけはK市のもつと先のN市から遠距離通学をしている。自分だけがN市出身だということで、どことなく寂しそうだったのが可愛く思えた。

「それで、一樹に何か用事でもあつたの？」  
「はい、ちよつと昨日失礼なことをしてしまって・・・」

ちよつどいい、臯月先輩にもこの際私と三崎大翔が兄妹だという

ことを言っておいた方がいいだろう。そう思っつて、実は・・・と切り出すと、思いの他臯月先輩は驚かなかつた。

「やっぱりそうか。全然似てないから、違つのかと思つたけど・・・俺、昔陽菜ちゃんと会つたことあるよ」

「はい!？」

会つたことがある？臯月先輩ほどのキラキラした人を見れば、流石の私も忘れてたりしないと思うんだけど、どう記憶の引き出しを探してみても臯月先輩は見当たらなかつた。そんな私を見て、先輩はくすりと笑つて言つた。

「俺、昔は背も小さくて全然冴えなかつたんだよね。だから今のイメージとは違つかも」

「そうなんですか・・・。その時、私と先輩は話したりしました？」

「さあね、そこは思い出して」

それ以上、先輩は教えてくれることはなかつた。昔会つていいる・・・日向先輩と同じ中学で、同じ部活だつたということは、やはりお兄ちゃんに聞いてみる必要があるらうだ。

「そつかー、それを一樹に言いたかつたつてわけか」

臯月先輩は何の脈絡もなく、呟いた。誰に話しかけるでもない、ただの独り言のようだつたが、その表情はおもちゃを見つけた子どものように、楽しそうだ。

「あ・・・？」

「あ、ごめんごめん。うん、また明日部活が終わつたら来てもらんよ。きつといるからな」

「はい」

その言葉を信じて、翌日も、その翌日も部活後に体育館を訪れたが、日向先輩には会えなかった。

お兄ちゃんと私(7) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。



## お兄ちゃんと私(8)

「お兄ちゃんのバカ・・・」

「俺のせいだよ」

「だって、お兄ちゃんが私に話させてくれなかったから」

私は自宅のリビングでクッションを抱えながら、お兄ちゃんに向かって文句を言っていた。この1週間、部活後に体育館に通い詰めたのに、日向先輩には1回も会えなかったのだ。葵や大谷君、そして臯月先輩はその度に落ち込む私を慰めてくれた。

どうも、私は日向先輩に避けられているらしい。その理由は定かではないが、きっとあの雨の日の出来事が原因なのだろう。

大谷君や臯月先輩に聞いてみても、部活を休んでいるということはないらしい。でも、ここ最近はかなりピリピリしていて、休憩時間も黙々と自主練をしているから、周囲の人々が話しかけられないのだという。

教室ではどうなのかと思い、臯月先輩に尋ねると、教室でも同じように『近寄るなオーラ』を周囲に振り撒いているらしい。たまに臯月先輩が話しかけても、基本無視。

こんな状況で、どうやって先輩と話す機会をつくれればいいのだろう。もう来週はバスケの地区大会が始まってしまって、それどころじゃない。だから今週のうちに話しておきたかったのに、今日はもう金曜日の夜。時間なんてないよ・・・。

自分の部屋に行き、ベッドに倒れこむ。そして目に入るのは、き

ちんと洗濯をして畳んである先輩のタオル。この時はすごく幸せだったな。先輩の驚いた顔も、笑った顔も、この日まではよく見ることができたのに。

このまま先輩と疎遠になってしまふのだろうか。そう思ったら、私は自分が泣いていることに気付いた。

・・・ああ、そうか。私、いつの間にか先輩のことが好きになっていったんだ。

相手は学校の有名人。ファンクラブもできるほどの人気を誇る生徒会長だ。私なんかの本気で想っても、どうしようもないということとはわかってる。それでも、気さくに話しかけてくれる日向先輩だから、ちよつとだけ、人より特別なんじゃないかって勘違いしちゃったんだよ。

好きだって自覚した途端、自分の勘違いも自覚しちゃうなんて、皮肉だね。でも、先輩にとって私が特別じゃなかったとしても、私先輩が好きだということは変えようのない事実だ。

「謝らなきゃ」

そうしないと、私の気が済まない。避けられて、嫌われたままなんて、そんなの耐えられるわけじゃない。私は先輩のタオルを握りしめて、固く心に誓った。

高等学校バスケットボール地区大会当日。運動部以外の生徒は学校で自習だったんだけど、大人しく自習をしている生徒なんてほん

の一握り。ほとんどの生徒は各部活の応援に会場へ行っている。

私はというと、葵と一緒にちゃんと学校にいる。というとも、バスケの地区大会は、うちの高校が会場だったからだ。なんという幸運なんだろう。うちの高校の体育館の設備が整っていることに、これ程まで感謝したことなどない。

「課題もやって、試合も見れて、うちらすごくラッキーだよね？」

と、葵。先生たちも生徒が各部活の応援に行くことは予想しているので、課題に提出期限を付けたのだ。つまり、1限目の課題はその時間中に出さないと受け取らない、ということ。

それでも自習監督の先生はつかないので、1限の課題のプリントを持って体育館に向かい、そこで試合を見ながら課題をし、1限が終わる前に課題を教室に持っていけばいいのだ。私と違って、葵は頭がいい！だから2人で協力してやれば（ほとんど私が教えてもらっただけ）できないことはないのだ。

私たちは午前放課なので、午前3時間をなんとか乗り切れば、午後の試合は集中して観ることが出来る。うちの高校の試合は午前10時半頃に第一回戦。おそらく一回戦目で負けることはないだろう。第二回戦は午後だから、第二回戦からは集中して観戦できそうだ。

簡単なHRを各教室で済まし、1限目の課題を入手すると、私たちは早速ギャラリーに向かった。

ギャラリーには、他の高校の生徒はいなかった。他の部活は市営の体育館だとか、県営のグラウンドだとかで大会が行われているために、どこの高校の生徒も入ることが出来るが、バスケは高校が会

場だ。自習とはいえ授業を行っているところに他の高校の生徒を入れるわけにはいかないのだろう。

いたのは保護者と思われるような大人と、うちの高校の生徒だった。しかも、それはほぼ日向先輩と梶月先輩のファンと思われる女の子だった。

「先生たちも呆れて、何も言わないのかもね」

「私たちもその一員だけどね・・・」

試合がよく見える場所を陣取ると、始まる時間まで、課題を進めることにした。1限目は私の得意な古典で、しかも予習をしてあったところだったのでかなりすらすら解くことができた。私がすらすら解けるのだから、私以上に古典の得意な葵はかなり早く終わらせていた。

「私、先に課題置いてきちゃうね。ついでに2限の課題も持つてくる」

「うん、ありがと葵」

日向先輩たちの試合が始まるまであと10分あるので、教室に戻る時間は十分だろう。ギャラリーを出ていく葵を見送ると、私はコートに視線を移した。

コート上では前の試合が終わり、次の試合の選手たちが準備を始めていた。もちろん、そこには日向先輩の姿も。知らず知らずのうちに目が先輩を追いかける。今日も心なしか機嫌は良くなさそうだ。

その時、ちらっと先輩がこちらを見た。以前練習試合を見た時は、気のせいかと思ったけれど、今回は気のせいなんかじゃない。私と

目が合った瞬間、先輩の表情が一瞬だけ変化したのを、私は見逃さなかった。

好きな人と目が合って、相手の表情が急に変わることほど切ないことはないが、それでも私の決心は変わらなかった。絶対に今日捕まえるんだから。

ただ、そのために突破しなければいけない壁。それは・・・

「陽菜ー！」

そんなに大きな声で呼ぶな！でかい図体して、ユニフォーム姿のままギャラリーになんて来たら目立つでしょ！

「それ以上近寄らないで！」

「無理。早く弁当寄せ」

「・・・こんな日に忘れないですよ！」

こんな大事な大会の日に、この兄ときたらお弁当を忘れてったんだもの。会場が私の学校なのをいいことに、持って来いだなんて、横暴だ。コンビ二でいくらでも買ったのに。

私はこのお兄ちゃんの不可解な行動は、わざとだと思っている。私が日向先輩と仲直りをしようと企んでいることに気付いているであろうお兄ちゃんが、それを阻止しようとしているとしか思えない。だって、あんな失礼な態度をとったお兄ちゃんと親しげに話している私を見た先輩が、私に良い印象をもつはずないもの。

とにかく、この場は早く去ってもらいたいので、さっさとお弁当とスポーツドリンクを渡してどっかに行ってもらおう。

「はい、お弁当！今日はもう他人よ、他人！お兄ちゃんといると目立つんだから！」

「よかったじゃん。喜んで目立っておけよ」

「いいのっ、目立たなくて！はい、さっさと戻って！」

お兄ちゃんは半分面白がって、笑いながらギャラリを後にした。そこでふと周りを見渡してみると、やはり大勢の視線が私に突き刺さっていた。好奇の眼差し、羨望の眼差し、そして、悪寒のするような嫉妬の眼差し……。

うんざりして手すりにもたれかかり、下のコートを眺めていると、一部始終を見ていた臯月先輩が苦笑いをして、「ドンマイ」って目で見ていた。

臯月先輩は、ここ数日の日向先輩を巡る一件に片足を突っ込んでしまったために、私の相談を頻繁に受けることとなったのだ。第一印象は全くよくなかったのに、今ではとても頼りになる相談相手になった。

しばらくして葵が戻ってきた。その手には私の苦手な数学の課題が……。課題の中には先輩に教えてもらった問題もある。あの時はまさか自分が先輩のことを好きになるなんて、考えてもいなかったな、なんて遠い昔のことのように思い出してみて、悲しくなった。

また、先輩と他愛もない話ができるように、今日は頑張る！自分の決意を再確認した瞬間、先輩たちの第一試合がスタートした。

「もう課題に集中しない？」

「そうね・・・」

試合のハーフタイム、私は葵とそんな話をしていた。だって、もう見る必要もないくらいの実力差なんだもの。見てることうちが居たたまれなくなるくらい、相手チームが可哀想になってくる。

もううちの高校は主力メンバーを温存して、控えメンバーが出てくるくらいだ。私たちも課題に集中して午後からの試合に備えよう。なんて言っても今度の課題は2限と3限をまるまる2時間使ったの数学祭り。

その分、終わったたら帰っていいから嬉しいと言えば嬉しいけど、思いつきり文系の私たちにとっては2時間分の数学の課題なんて苦行以外の何物でもない。だから午後の試合に間に合わせるためにも、必死に課題を終わらせなければならぬのだ。

「うゝ・・・もう無理・・・」

「それを言っちゃダメよ、私もくじけそうなんだから・・・」

たっぷりプリント10枚（しかも裏表両面！）の課題の3枚目に差し掛かったところで、私は既に限界を迎えていた。頭のいい葵でもまだ4枚目の裏。かなり苦戦しているようだ。このままでは提出締切の時間に間に合わなさそうだ。絶望と嫌気から、俯いて大きな溜息をついた、その時だった。

「そこ違う」

突然頭の上から降ってきた声に、私たちは驚いて勢いよく視線を上げる。私たちの目に飛び込んできた人物、それは他でもない日向

一樹先輩だった。



## お兄ちゃんと私（9）

驚いた表情の先輩は、ちよつと疲れたような感じもしたけれど、さつき見たような不機嫌さはなかった。今までと同じような、気さくに話しかけてくれる先輩。

「なんだよ、俺の顔になんかついてるか？」

「いえ……」

だって、今までずっと避けられていた人物にいきなり、それも向こうから話しかけられたら驚いて凝視してしまうでしょ？

「あの、日向先輩！」

と言いながら、勢いよく立ち上がったのは私ではなく葵。呼びかけてから「あ、私は陽菜の友達の山本葵っていいいます」なんて自己紹介してる……。日向先輩も「ああ」なんて気のない返事。

「陽菜が何か謝りたいことがあるそうなので、聞いてやってください。私は修也が呼んでいるのでちよつと行ってきます」

葵の指差す方を見ると、大谷君が意味深な笑顔を浮かべて手を振っていた。なるほど、きっと大谷君が日向先輩をここに連れて来てくれたんだ。ありがとう、大谷君。

2人がギャラリイを出ていくと、私は先輩に向き直って、「この間はすみませんでした」と頭を下げた。しばらく頭を下げたままでいたのだが、先輩は何も言葉を発してくれないので、そつと頭を上げて先輩の方を見た。

すると、先輩は怒っているのでもなく、笑っているのでもなく、ただ不思議そうな顔をして考え込んでいた。そして私を目が合っ一言。

「謝られることなんてあったか？」

「はいいい？」

えー・・・覚えてないの？というか、怒っていたのではないのだろうか。あの時のことを怒っていたから、ここ数日は避けられていたと思っていたのに。

「なんだよ、日向。陽菜になんか用事か？」

・・・また話をややこしくする男が・・・。なんでこのタイミングでお兄ちゃんが出てくるんだろう。でも、お兄ちゃんが出てきたことで私が何を謝っているのかは思い出してくれたみたい。だって眉間に皺がよってきたものね・・・。

「三崎・・・お前、自分の女が男としゃべってるくらいでいちいち突っかかってくんじゃねえ」

はい？自分の女？ここで、私は日向先輩が盛大な勘違いをしていることを感じ取った。臯月先輩は兄妹だって薄々感づいていたのに、日向先輩はわかってなかったのね。私と同様、先輩の勘違いに気付いたお兄ちゃんは、一瞬だけ目を丸くしたけど、次の瞬間にはにやりと笑って悪いことを考えている顔になった。

「わかってんなら人の女にちよっかい出すんじゃねえよ」

って！そこで乗らないでよ！お兄ちゃんは調子に乗って私の腰に腕を回していかにも、って感じでくっついてくる。ほらー、先輩の眉間のしわがどんどん深くなってくよ。だんだんオーラも黒くなっていつているような錯覚まで引き起こしちゃうじゃない。

そんなお兄ちゃんのいたずらに、何か反論しかけた先輩だったけど、ふうつと溜息をつくと言を返して立ち去ろうとした。だ、だめだよ！

「先輩っ！」

お兄ちゃんの腕が振りきれないので、遠ざかっていく先輩に届くようになり大きな声を出した。そうしたら周りの注目まで浴びてしまった。うう・・・かなり恥ずかしいんだけど、ここは我慢。

「これ、うちのお兄ちゃんです！断じて私の彼氏なんかじゃありませんー！」

その瞬間、ぴたりと先輩の足が止まり、ゆっくりとこちらを振り返った。そしてその口から出てきた言葉は・・・

「マジかよ・・・」

驚きと困惑の一言だった。お兄ちゃんは私が言ってしまったことに対して、つまらなそうに「あーあ、言っちゃった」なんて呑気な声を出している。

「ま、そういうことだ。俺そろそろ試合だから行くわ」

固まる日向先輩を尻目に、お兄ちゃんはニヤニヤしながらコート

へと向かった。去り際に日向先輩の肩なんて叩いちゃったり。それでも先輩は呆然と私を見つめたまま。えーっと、あんまり見られると恥ずかしいんですが……。

お兄ちゃんによる拘束も解かれたことだし、私は先輩の方にゆっくりと近づく。

「先輩、大丈夫ですか？」

「あ……ああ」

そこでようやく我を取り戻したかのような先輩は、ちよつとバツの悪そうな表情をして、近くの観客席に座った。どうしようかと迷っていたら、先輩が自分の隣の席をポンポンと叩いたので、促されるままに私もそこに座る。

ギャラリーには人が戻り始めている。お兄ちゃんの高校の試合が始まるからだろう。うちの高校にもお兄ちゃんのファンは結構いる。当然、その人たちは日向先輩のことを知らないはずがなくて……

「ね、日向先輩だよ！」

「わー、何でギャラリーにいるんだろ。ラッキー！」

「それにしても隣にいるの誰？」

なんて声が聞こえてくる。そして時折悪意の入り混じった言葉も先輩もそれには気付いていたらしく、声のする方をちらっと一睨みすると、一瞬にして彼女たちの囁きは止んだ。こちらからは見えなかったけど、きつと恐ろしく鋭い目でもしたのだろう。さっきまでの彼女たちとは打って変わって、その表情は強張っている。

「初めっから言えよ」

「はい……」

「じゃあ、あいつの最近の噂の女は全部……」  
「私です」

そうなのです。お兄ちゃんは一途でもなんでもなく……

「ただのシスコンだな」

おっしゃる通りです。それもバカがつくくらい。そのせいで私は何度憤慨したことが。今回の件もシスコンの弊害と言っても過言ではないだろうな。

でも、ようやく先輩に言うことができた。ずっとタイミングを逸してきたんだもの。こんなところで叫んでしまう形になったのは残念だけど、チャンスを逃さなくてよかった。

チャンスを逃すといえば、ずっと先輩に会えなかったのは、避けられていたからではないのだろうか。私のことを避けているのなら、先輩の方から声をかけてくることはないんじゃないだろうか。

「あの……最近練習後すぐに帰っちゃってたのは……?」

「ああ、バイト。新入りが急に辞めやがって、シフト外にぎゅうぎゅう詰め込まれた」

なるほど、だからピリピリして、イラついていたのか。

「俺に用事があったんだろ? 颯太から聞いてたから、お前捜してたんだけど見つからなかった。連絡先知らなかったしな」

先輩も探してくれていたのか。どうしよう、とっても嬉しい!ん

？もしかしてこれは先輩のアドレスを知るチャンス！？

「それで、お前の用事って？」

「あ、えっと・・・この間はお兄ちゃんが失礼なことを・・・それに挨拶もしないで帰っちゃってごめんなさい。あ、あとタオルありますかとうございました！」

「なんだ、タオルなんていつでもよかつたんだけど」

「いえ、助かりました！」

あれ、連絡先の流れがちよつと遠のいてしまったような・・・。  
あぁっ！先輩が口を開く前に『連絡先知らなかったしな』の流れで聞いておけばよかった。私って、どうしてこうチャンスを逃してしまふことが多いんだらう・・・。

笑顔でタオルを手渡しつつ、心の中で悔し涙を流していると、先輩はタオルを受け取って「ちよつと待ってる」とギャラリィから出て行ってしまった。

チャンスを逃した上にこんな状況で放置・・・先輩がいなくなるのを見計らったように、先ほど蹴散らされた女の人たちが鋭い睨みをこちらに向けてきた。ともすると向かってくるんじゃないかってくらいの、嫌な感じの視線。女ってどうしてこう、醜いんだらうね・・・黙ってそれに耐えていると、先輩が戻ってきた。

「ほ」

先輩の手に握られていたのは、けけけ・・・ケータイ！もしかして、そのためにわざわざ持ってきてくれたの？

「俺たちもつすぐミーティングなんだ。急げよ」

「は、はい！」

震える手をなんとか抑えながら、舞い戻ってきたチャンスをしっ  
かりと握りしめた。

お兄ちゃんと私(9) (後書き)

読んでくださって、ありがとうございます。

第1章はこれにて終了です。自分の恋心に気付いた陽菜のこれからを、どうぞよろしくお願いします。



幕間 1・5 (前書き)

ここまであまり出番のない陽翔視点です。

## 幕間 1・5

最近、姉の機嫌がすごくいい。いつからだろうか・・・遡ってよくよく考えてみると、約2週間前の、大翔の大会があつた頃からだつたと思う。確か、その前までは目に見える落ち込みようで、何があつたかは知らないが、こっそりと心配していた。本人には言わないが。

大翔はその理由を知っているみたいで、俺がさりげなく聞いても意味深な笑みを浮かべるだけで教えてくれない。拳句の果てにはニヤニヤしながら・・・

「そんなにお姉ちゃんのが気になるなら直接聞けよ」

なんて言われた。明らかにからかっている言い方に、さすがにちよつとムツとしたが、それで機嫌を損ねるほど俺はバカじゃない。幼い頃から結構冷めていて、両親が死んでからはさらに物事を客観的に見れるようになったかもしれない。

大翔はいざという時には頼りになるが普段はさつきみたいにへらへらしていることが多い。まあ陽菜の事となると人が変わるけど。要するにシスコン男なんだ。陽菜は裏表がなくて素直な性格だが、悪く言えばお人よし。そしてどこか抜けているところがあるから、必然的に俺はしっかりしてきたということだ。

話を本題に戻すが、大翔のからかいなど聞き流して、俺は結翔と風呂に向かった。夕食後は俺が結翔を風呂に入れることが多い。そして寝かしつけるのは陽菜がやることが多いので、その時に聞いてみることにしよう。

「結翔、陽菜最近機嫌良いな」

「うん！うれしいね」

末の弟の結翔も5歳にしては聡い子で、人の感情に敏感だ。陽菜が落ち込んでいる時は甲斐甲斐しく陽菜にお菓子を勧めたり、本を読んでもあげたりしていた。

「いっくんと仲直りして、よかつたね」

「いっくん・・・？」

「そーだよ。なっちゃんいっくんと仲直りしたんだって」

なんだ、その『いっくん』ってのは・・・。結翔は顔見知りのようで、かつこいと言われただの、いっくんは大翔よりかつこいだけのべらべらしゃべり続けている。聞いていないと怒るので、時折うんうんと頷きながら、笑顔で聞いてやる。俺ってそこらの中3より絶対大人だ。

「それで、いっくんって誰？」

俺は結翔の話が途切れるのを待って聞いた。すると、たどたどしく説明してくれた。半分以上は意味がわからなかったが、なんとか陽菜の高校の先輩だということはわかった。

なるほど、陽菜は大翔の大会前にそのいっくん（本名は不明）とケンカか何かをして落ち込んでいたが、仲直りをしたから機嫌がいいのか。やっぱり単純だ。

さて、そこまで聞けば後は本人にちょっと探りを入れるだけ。結翔が会ったということは少なくとも陽菜の高校のあるS市ではない。

ということはいっくん（仮）もK市の人間なのだろう。

もしかして、春の終わり頃にバイクで送ってきてもらった相手？俺の友達の話だと、大翔くらいの体格で、良く見えなかったが顔もそこそこ良かったという話だ。

湯船に浸かりながらそこまで推理していると、結翔の顔が真っ赤になってきたので風呂から上がった。最近は自分で完璧にパジャマが着れるようになったから、俺の手間も省けてきた。

「ね、今日はお兄ちゃん？」

「誰がいい？」

「なっちゃん！」

「はいよ」

寝る前の絵本を誰が読んでくれるのか、という問いだが、この問いをして「なっちゃん」以外の答えが返ってきたことはない。

「どうして陽翔のことは『お兄ちゃん』で俺のことは『大翔』なんだよ」

不満げな顔をして洗面所に入ってきた大翔。結翔はへへへ、と無邪気に笑っているが俺は内心大爆笑だった。誰が教えたでもないのに、結翔は俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶ。密かにそれが優越感だったりするのだ。

「大翔に威厳がないんだよ」

「お前は・・・生意気な」

大翔も大翔である程度は大人だから、俺の軽口にも腹を立てるこ

とはない。こういう軽口をたたき合っている時は、実は結構楽しい。

「なーに、男だけで内緒話？」

「いや、それより今日も陽菜だって」

「あ、絵本ね。了解」

俺たちがわいわいやっているのが楽しそうだったのか、キッチンの方から陽菜が顔を出した。歯を磨いている大翔だけを残して、俺と陽菜は結翔を連れて寝室へと向かった。

「僕これがいい！」

「はいはい」

という会話が5分前のこと。もう既に結翔は規則正しい寝息を立てて夢の中に旅立っていた。陽菜は布団をかけ直すと、そっと部屋から出る。それを見計らって……

「ね、いつくんって誰？」

「えっ、は、はい!？」

「さっき結翔が言ってたんだ。いつくんと仲直りしたって」

「え……せ、先輩だよ。高校の」

なるほどね。この動揺の仕方、当ててくれと言っているようなものだろう。

「彼氏？」

「そんなんじゃないって！」

ということとは片思いなわけね。しかし、たったこれしきの質問でこんなに真っ赤になるとは、こいつアホだ……。

「かつこいいんでしょ？俺も会いたいな」

「何言ってるの！そんなの無理だよ」

「そう？残念だな」

この時、俺の今後の目的はいつくん（仮）の正体を突き止めること  
とに決まった・・・俺も大翔に負けていないかもしれないな。

## 接近（1）

自覚したら避けられていることに耐えられなかった。避けられていないんだってわかったら、今度は以前のように話すことができなくなった。せつかくゲットしたアドレスにも、まだメールを送ったことはない。

「乙女」

期末テストを目前に控えた日の昼休み、照りつける太陽の下で呆れたように親友は切り捨てた。屋上ご飯を食べるにはもう今の時期は暑すぎる。7月に入ってしまえばもう夏の太陽なのだから。

そんな夏の青空とは裏腹に、私の心の中はまだ梅雨前線が停滞していた。あの地区大会の日から1か月。先輩とは会ったら少し会話を交わす程度の関係・・・つまり以前と大して変わっていない。むしろ春の方がバイクで送ってもらったりして親しかったような気がする。

「また勉強教えてもらえばいいんじゃない？」

「・・・無理だよ」

なんて軽く言ってくれちゃうけど、先輩は受験生。この夏は忙しみに決まっている。それに夏休みが明けたら生徒会主催の体育祭や文化祭があつて、その準備もあるはずだ。私なんかにかまっている時間があるとは思えない。

会えないと、余計に考えてしまうのはどうしてだろうか。よく、『片思いが1番楽しい』なんて言うけれど、その分悩みも多い。と

いつか今の私は悩んでいるだけ。

「あのねえ、待ってても先輩は来ないの。自分から行け！」

「えっ、ちよつとっ！」

反論する間もなく、屋上から追い出された。つまり・・・今行けと？行動派の葵は私を見ててじれったくなつたのかもしれないけど、でも昼休みに3年生教室に行くなんて無理！先輩に会いに行くんじゃないかって無理だつて。

・・・屋上のドア開かない・・・外から押さえつけてるな。もうっ、バカ力なんだから！このまま教室に戻ってしまおうか。でも今教室は野球部が使ってるんだよね。だから屋上に来たんだし。

とりあえず校舎内をうろろろしてみよう、そう思って歩いていると前から見覚えのある人物が。向こうも私に気が付いたらしくて、目が合うとニコツと笑った。

「臯月先輩！」

「久しぶり、陽菜ちゃん。1人でどうしたの？」

「いえ、実は・・・」

私は屋上から締め出されたことを臯月先輩に話した。臯月先輩には私が日向先輩を好きだつてことを言ったわけじゃない。だけど、連日体育館通いをしていたことを知っているし、あの時の私を見ていたから、私の気持ちには気付いていると思う。なんて言っても、見た目から勘が良さそうなことは伝わってくるし。だから、私は臯月先輩には包み隠さず何でも話してしまう。

「うーん、じゃあ行く？」



「はい？」

「いやいや、3年生教室なんて勘弁してほしい。王子様キャラ発動中の皇月先輩と、みんなの憧れの日向先輩に会いに行ったりしたら視線が痛いに決まってる。」

「大丈夫。教室にはいかないから」

ニコニコしたまま私の手を引っ張って、ずんずんと進んでいく。すれ違う人たちはみんななんだなんだと振り返っていく。これはこれで視線が痛いかも……。

「皇月先輩、どこに行くんですか？」

「いいところ」

可愛く言ってみても、私にはもう王子様には見えないんだけどな。あ、これは周りの人に向けての笑み？うーん、策士だな。

廊下をただひたすら歩き続けて、辿り着いたのは校舎の奥の奥。特別教室棟の最上階、しかも端っこにあるこの部屋はもしかして……？

「ただいまー」

「遅いぞ」

「ごめん、ごめん。でもいいもの拾ったよ」

「いいもの……？」

振り返ったのは紛れもない、日向先輩。ということはやっぱりこっつて……

「陽菜ちゃん、生徒会室にドキドキ初訪問の巻！」

「お、お邪魔します」

やっぱり生徒会室だよな。皐月先輩も、来るなら来るって予告してほしい。それにしても、日向先輩の表情と皐月先輩の軽さがまったくマッチしてないところに、この2人の関係性が見えるんだけど。きつといつもこうして皐月先輩に振り回されてるんだろうな。

日向先輩は驚いて一瞬言葉を失ったけど、次の瞬間には皐月先輩に呆れたような視線を投げつけると、私に椅子に座るよう言った。

「颯太が無理やり連れて来たんだろう？」

「いえ、そんなこと・・・」

あると言えばあるんだけど・・・。

「そうだよ。俺がそんな酷いやつに見える？」

「見えるから言ってたんだ」

「またまたー」

調子のいい皐月先輩に、日向先輩は大きな溜息。そしてついには相手をするのをやめてしまったのか、私の方に向き直って口を開いた。

「悪いな」

「いえっ、全然」

どうしてよう、すっごく不自然かも・・・。どうしても先輩と面と向かって話すのに緊張してしまって、今までのように話すことができない。そんな私の様子を、日向先輩は不思議そうに、皐月先輩

は面白そうに見ている。普通にしなきゃ！

「陽菜ちゃんさ、また一樹に勉強してもらいたいんだって」

突然皐月先輩が言い出した。そんな不躰に何を言い出すの！？ほら、日向先輩も呆気にとられているみたいじゃない・・・。

「でも一樹忙しいからな。無理なら俺が陽菜ちゃんの勉強みてあげてもいいんだけど、どう？」

その意図がいまいちわからなくて、そのまま成り行きを見守るしかない私に、皐月先輩は任せるとも言うように優しい微笑みを向ける。

「いいぞ」

「え？」

「勉強みてやる。でも俺も仕事しながらやるから、場所はここでもいいか？」

急展開・・・まさか本当に勉強を見てもらえることになるなんてしかも生徒会室で？葵はこうなることを知っていて私を追い出したのかと思っちゃうくらいだ。

「返事は？」

「はいっ、お願いします！」

皐月先輩、もしかしてこれを狙って私をここに連れて来てくれたの？腹黒いだけかと思っていたら、意外と中身も王子様だったんだ！

「陽菜ちゃん、考えてること顔に出てるよ？」

爽やかな笑顔にどす黒いオーラを背負った魔王様・・・もとい臯月先輩が、いつの間にか背後に立っていた。気配がなかったですって・・・。

「ありがとうございます」

「別に」

こつそりとお礼を言うと、臯月先輩はぷいとそっぽを向いてしまった。あれ？意外と臯月先輩も照れ屋さんなのかもしれない。そう思ったらちよつとだけ、可愛く見えちゃった。

「何上手いことやってるのよ！すごいじゃない！」

「あの颯太先輩をうまいこと使うとは、陽菜ちゃんすごいね」

屋上に戻ったら、葵と大谷君に思いのほか驚かれ、感心された。というかなぜ大谷君？もしかして葵、そのために私を追い出したんじゃない・・・。

「うまいこと使ったんじゃないよ。臯月先輩主導だもん」

「でも臯月先輩を味方につけておくに越したことはないよ。敵にしたら絶対怖いタイプなもの」

それには同感。敵に回したりなんかしたら・・・なんて考えたくもない。ふと周りを見ると、3人とも同じことを考えていたみたいで、思わず顔を見合わせて笑ってしまった。やっぱり臯月先輩も素を知っている人は、同じ意見なんだなあ。

そんな話で盛り上がっていたら、ポケットに入れていたケータイが震えた。開いてみると、送り主はこの1か月間見たくて堪らなかった人物の名が。

『今日から、放課後生徒会室』

素っ気ない、用件だけのメール。それでも嬉しかった。私は浮かれ気分で返事を打つ。極力短く冷静に、でも感謝の気持が伝わるように。

『今日は突然すみませんでした。でも、嬉しいです。明日からよろしく願います』

文面の冷静さとはかけ離れた、にやけきった私に、葵と大谷君もにやにや。3人して屋上でにやついているなんて、傍から見たらとてつもなく気持ち悪い集団だろう。

「明日報告しなさいよ？」

「了解！」

午後の授業は、苦手な数学。頭に入るかどうかは別として、今日は何でも乗り切れそう。

## 接近(2)

放課後、再び生徒会室にやってきた。戸が閉まっているが、これを開けるのにも勇気がある。お昼は臯月先輩に半ば強引に連れてこられたから緊張も何もなかったけど、自分から入るのには躊躇ってしまう。

「落ち着け、陽菜。深呼吸・・・」

自分で自分を落ち着かせて、そして取っ手に手をかける。ぐっと力を入れたら思いの外軽くて、体のバランスを崩してしまう。

「つと、大丈夫か？」

「はい・・・すみません」

ドアの先には日向先輩が立っていた。なるほど、私が開けようとしたいいタイミングで先輩も明けようとしたから、やけに軽く感じたんだ。それで私はバランスを崩し、先輩の胸に鼻をぶつけたと・・・。

「あはは、陽菜ちゃんってばドジだな」

部屋の中では臯月先輩が笑ってこちらを見ている・・・というか笑いすぎです。私は照れ笑いをしながら、勧められた椅子に座った。勉強道具を出して準備を進めると、さっきまで笑っていた臯月先輩はもう我関せず、というように雑誌を読み始めた。余裕だな・・・。

「颯太、暇ならこれやっつけ」

「えー・・・」

仕事を押し付けられたらしい臯月先輩は文句を言いつつ、手渡された書類に目を通す。なんだかんだ言つて臯月先輩もちやんと副会長をやっているんだ。そういえばこの生徒会室には他の役員の人たちは来ないのだろうか。私がこんなところで勉強していたら、知らずに来た役員さんたちは驚くんじゃないだろうか。

「先輩、他の役員さんたちはこの部屋には来ないんですか？」  
「来ない」

きつぱりと言いつつ。他の役員がいないわけじゃないだろうに、なぜ先輩はこうも言いきれるのだろうか。

「ここは『旧生徒会室』だ。鍵を持っているのは俺と颯太だけ」

私の疑問を悟ったのか、聞く前に答えてくれた。本来の生徒会室は1階下にあるらしく、この部屋は今ではほぼ日向先輩と臯月先輩の自室と化しているんだって。これが葵の言っていた、生徒会の権力だろうか。

「そんな部屋に、来ちゃっていいんですか？」

「陽菜なら構わない」

「え・・・あ、ありがとうございます・・・」

今の言葉の意味を、私はどう捉えればよいのだろうか。込み上げる喜びを、私は必死で抑え込んだ。だって、勘違いして後で落ち込むくらいなら、初めから期待しない方がマシなもの。

課題をやり始めると、先輩は隣に腰かけて書類と睨めっこしながら時折私のノートを覗き込む。隣に座っているだけでドキドキする

のに、先輩が覗き込む瞬間はあの香りがして、さらに心臓が高鳴る。聞こえてしまいそうなくらい……。

ドキドキしている私をよそに、先輩はクールだ。

「……相変わらず……だな」

「うう……」

覗き込まれたノートはもちろん、数学のノート。数学なんていくらやっても理解できないんだもん。それに、先輩に避けられてると思ってた時の授業は、ほとんど頭に入っていなかったから、今回のテストは冗談抜きで赤点かもって思ってたの。

「ここは……なんでそうなる……」

「ええ……これ自信あったんですけど……」

「三崎に教えてもらわないのか？」

「お兄ちゃんに勉強を教えてもらおうとすると家事3日分と交換なんです……」

そうなのだ。お兄ちゃんは頭がいくせに私に教えてあげようなんて気はほとんど起こさない。どうしてもという時はお願いするけど、そうすると必ず何かしらの条件が付いてくるんだもの。

でも、流石にテスト前はゆうくんの面倒をいつも以上に見てくれる。一応応援する気はあるらしい。

「この公式を使え」

「使い方がわかりません」

「……さっきやっただろ」

「どうやるんですたっけ……?」



勉強をやり始めてから1時間。ページにして2ページしか進んでいない問題集は、私の精神力を4分の3ほど奪っていた。最初の頃感じていた緊張は、この頃には吹っ飛んでしまっていた。なるほど、緊張するとか、ドキドキするとか、そういう気持ちは余裕があるときにしか感じられないのか。

「休憩だ」

「はい・・・」

差し出された甘いミルクティー。私のために買っておいてくれたようだ。だって2人は無糖のコーヒーだもの。やっぱり優しいなあ・・・。

「今日はここまでやったら終わりだ」

「・・・」

そう言って指示されたのは今やっているページの次の次の次、つまりあと3ページ。ここまで2ページやるのに1時間かかったということは、単純計算であと1時間半はかかるってことだ。先輩と一緒にいられるのは嬉しいけど、勉強するのは嫌だ・・・。

表情に出たのか、先輩がノートを丸めてパソコンと私の頭を叩いた。だって、勉強嫌いなんですよ、私。

大きな溜息をつく私に、先輩は苦笑しながらチョコを1つくれた。しかもあーんって！バクバクする心臓を抑えながら素直に口を開くと、口の中にチョコが放り込まれる。あの時と同じ、甘味。

「頑張ったらもう1つやるよ」

「餌付けじゃないですかぁ・・・」

なんて文句を言いつつも、やっぱり嬉しいものは嬉しいから、頑張れてしまおう。私って本当に単純だ。

私はチヨコ1個で本当に頑張った。いつになく集中していて、時折聞こえてくる日向先輩と皐月先輩の会話すらほとんど耳に入ってこなかった。そのお蔭で今日のノルマは、予定よりも早く終わりそ  
うだ。

「あ・・・」

「何？」

皐月先輩が突然『ヤバい』とでもいうような表情でケータイを見つめ、呟いた。何かあったのだろうか。

「ごめん！俺今日シフト変わっててバイト入ってたんだっ！一樹、バイク貸して！」

「高いぞ」

「・・・明日の昼飯！」

「ほらよ」

「さんきゅー！」

皐月先輩はバイクの鍵を受け取ると、挨拶もそこそこに勢いよく部屋を飛び出していった。大丈夫だろうか。いつも余裕綽々の皐月先輩があんなに慌てる姿は見たことがない。それ故にかなりの緊急事態だということなのだろう。

そんなことを頭の端で考えながら、それでも私は数学に集中していた。今日は雨でも降るんじゃないだろうか。この私が周囲の事に気

を取られず、しかも『数学』に集中するなんて。先輩にやり方を教えてもらったことがようやく身についてきたのか、この辺の問題なら少しずつ解けるようになってきたのだ。数学は、解けると意外と面白い。

それから数十分後、私は今日の課題のノルマをすべてやり終えた。当初の予定よりも15分ほど早く終わったため、窓の外はまだ明るさが残っている。嬉しい限りだ。解放感から、ぐっと背伸びをする。解放感の他に感じる充実感。数学で充実感を味わうとは思ってもしなかった。

「帰るか」

「あれ、先輩お仕事は・・・？」

「テスト期間中は生徒会の仕事も休みだ。今日やったのは期限がまだ先のやつ」

ということは私のためにわざわざ残ってくれたということ。申し訳ないと思うが、それ以上にやっぱり嬉しかった。昼に葵に屋上から追い出されて、そして皐月先輩に偶然会って本当に良かった。

その上、皐月先輩がバイクに乗って行ってしまったので、今日は日向先輩と電車で帰ることに。学校に来るときに一緒に来たことはあるけど、電車で一緒に帰るのは実は初めて。なんだか電車で一緒に帰るなんて、恋人同士みたい。ちょっと憧れてたんだよね。

鍵を閉めて、すっかり人気のなくなった校舎内を並んで歩く。いつもならこの時間はまだ生徒がたくさんいるのだが、テスト前ということでもうほとんどの人が帰ってしまっているようだ。

先輩と初めて会った日にニヤニヤされた守衛さんは、まだ早い時

間だからか来ていない。守衛さんのいない校門をくぐるのも久しぶりだ。

「電車は久しぶりですか？」

「いや、意外と乗ってるぞ」

それなのに最近あまり会わないな、と思つたら、テスト前に生徒会の仕事を片づけておくため、1時間早い電車に乗っていたらしい。1時間早い電車で学校に来て、授業と部活をこなし、そしてその後は再び生徒会の仕事。帰りは9時近くになることも少なくないと言つ。

「先輩、過労死しますよ？」

「こんなんで倒れてたまるか」

鼻で笑われた。そりゃあ先輩は体力もあるし、要領もいいから適度に体を休めているんだと思うけど、それでも心配。今度栄養ドリンクでも差し入れしようかな。歩きながらそんなことを考えていると、気がついたら駅についていた。もつたいない！

駅にはうちの高校の生徒はあまりいなかったけれど、隣の高校の生徒がたくさんいた。隣の高校はまだテスト期間じゃないようで、ちよつど部活帰りの生徒と時間が重なつたようだ。

「ね、あれって日向さんじゃない？」

「ホントだ。ラッキー」

「隣の子は彼女かな？」

「えー！彼女なんていたの？ショック・・・」

盗み聞きをするまでもなく、彼女たちの会話が耳に入ってくる。

声がかすぎる。本人を前にしてよくここまで大きな声で話せるものだ。私に丸聞こえなのだから、隣にいる先輩にだって確実に聞こえているはず。それなのに先輩は涼しい顔。慣れてるのかな。

さすが、女の子は放っておかないよな。と感心していると、今度は男の人の声で話し声が聞こえてきた。男女問わず他校にまで顔が知られているとは驚きだ。

「おい、あれ日向一樹じゃないか？」

「本当だ。俺日向さんのバスケット好きなんだよな」

「そうか？どこにでもいるタイプだろ」

「というか性格悪そうだよな」

「女もとつかえひつかえって噂だろ？隣の女だって遊ばれてるんだろうな……」

女の妬みや嫉妬も嫌いだけど、男の僻みも大っ嫌いだっていうことを、今実感した。先輩の何を知ってそういう噂を流すのだろう。女の人に関しては知らないけど、先輩はとっても優しい人なのに……勝手な想像だけでイメージを先行させないでほしい。それにバスケットって上手なもの！

「陽菜、放っておけ」

「でも……！」

「相手にするだけ無駄」

ここでもやっぱり先輩は涼しい顔。こういう嫌味にも慣れてるのだろうか。先輩は大人だから相手にしないのかもしれないけど、それでも言われて気持ちの悪い言葉じゃない。

ちょっと一言言ってやる……なんて度胸はないけれど、そんな

ことを言っていた人の顔だけは確認したくて、声のした方を振り返る。声の主たちは思っていたよりもずっと近くにいて、私が勢いよく振り返ったために向こうも思わずこちらを見た。

そして目が合った。

接近(3) (前書き)

覚えていますでしょうか、彼を。

### 接近(3)

「好きなんだ」

放課後の教室、真つ赤な夕日が彼の顔を照らす。まだ夏の暑さが残る、9月の頭だった。

「知ってる」

そう答えるのが精一杯だった。嬉しすぎて、でもそれ以上に照れくさくて、他に言葉が出てこなかった。

自分でも可愛げのない返事だと思う。でも、彼も私の性格を知っている、特に気に留めている様子もない。それどころか、私の答えを確認すると、彼はぐっと私の腕を引き、自分の方に引き寄せると、そつと触れるだけのキスをした。

突然のことで、言葉が出なかった。キスをされた瞬間は頭が真っ白になったけれど、唇が離れて少して状況を把握すると、突然心臓がバクバクしだした。きつと私、今顔が真つ赤だ。

彼は照れ隠しなのだろう、私に背を向けてしまった。だけど、その手は私の手を握って離さない。夕日でわからないけれど、きつと彼の顔も赤いんだろう。だって、手が熱いもの。

そのまま私は彼に手を引かれて教室を出た。廊下に行く人の目が、繋がれた私たちの手に集まっているのがわかる。恥ずかしい、だけど幸せだった。



仲のいい友達。そんな2人の関係が変わってきたのは、私がある事件に巻き込まれてから。彼はこのことをとても気にしてくれて、いつも私のことを気にかけてくれるようになった。それが特別になったのはいつの頃からだっただろう。そして、向こうも私のことを特別に想ってくれているとわかったのはいつだっただろう。

お互いに言い出せないまま長い時間が過ぎた。卒業するまでこのままなのかもしれないって、本気で思っていた。だけど、それから約3か月後のあの日、私と彼は友達から恋人になった。

「和真……」

目が合った人物は、私の良く知っている人物だった。見慣れない高校の制服に身を包んだ彼。私を知っている彼と比べると少し印象が違って見えるのは、以前よりも背が伸び、細かった体は鍛えられて、がっしりとした大人の男性に近づいているからだろう。

彼、乾和真いぬい かずまは私が中学時代に付き合っていた元カレだ。高校入学が決まると、一方的に私に別れを告げた和真。それからは話どころか、目を合わせることもすらしなかった。

だけど、私たちは数か月ぶりにこうして目を合わせている。懐かしい気持ちと同時に、驚きと戸惑い、そして動揺を隠せない。

お互いにしばらく言葉が出なかった。向こうも目を大きく見開いて私を見つめている。それもそのはず、私が確認したかった声の主は和真のすぐ後ろの男性たちで、和真ではなかったのだから。

和真はただ勢いよく振り返っていきなり睨みつけた女に驚いただけだったようだ。そして、それが私だとわかって、再び驚いたのだろう。

「久しぶり」

最初に沈黙を破ったのは和真の方だった。久しぶりに聞く声。この前まで思い出すたびに怒りが込み上げて来ていたのに、こうして本人と対峙してみると不思議と怒りは込み上げてこない。

「元気？」

あの頃と変わらない、優しい笑顔で彼は聞く。まるで私たちの間にあつた出来事が夢であつたかのよう。

「乾……？」

「日向さん、ですよね。初めまして」

私が返事をするよりも前に、日向先輩が和真を見て呟いた。知り合いなのかと思つたけれど、和真の言葉を聞いて2人が初対面だということがわかる。日向先輩は有名人だから、バスケバカの和真が一方的に知つていても不思議ではないが、日向先輩が和真を知っているのはなぜなのだろう。

「そつちの高校の推薦蹴つて隣の学校のバスケ部に入った奴の顔なんて、よく覚えてましたね」

「覚えてたんじゃねえ、思い出したんだ。この間の大会でな」

「嬉しいですね。うちの学校なんて1回戦負けだったのに」

「お前だけ動きが違ったからな」

先輩は相変わらずのポーカーフェイスで、一方和真はそれとは対照的に、終始笑顔で話している。会話の内容はなんてことないのに、2人の間に流れる空気はどこかピリピリとしていて居心地が悪い。

2人の会話はそれ以上続かなくて、気まずい沈黙が流れる中、電車がホームに入ってきた。そこでわざわざ他の車両に行くのも変な気がして、そのまま同じ車両に乗り込む。この空気をどうにかしたいと思いつつ、何を話してよいのかわからない。

そんな私の心の内を読んだのか、和真が私を見てくすつと笑った。そして、またもやこの沈黙を破ったのは他ならぬ和真だった。

「元氣？」

「あ、うん」

同じ質問をされて、ようやく私は自分が答えていなかったことに気付いた。というか和真と会ってから私はまだ一言も言葉を発していなかったのだ。

「そんなに見られても、何も出ないよ」

くすくす笑って言った言葉。付き合っていた当時、私がじつと和真を見ている時によく言っていた言葉だ。私がじつと和真を見つめる時は驚いて言葉が出ない時と何か言いたいことがある時、そして構ってほしい時。それをよくわかってくれていた和真はその違いすら見分けていた。

そんな昔の記憶を思い起こしながら、私は慌てて和真から視線を逸らす。なおも和真は笑顔を絶やさずにこそつと耳元で囁いた。

「日向さんと付き合ってるの?」

「そ、そんなんじゃないよ!」

思わず声が大きくなってしまふ。横に立っていた先輩も、他の乗客も何事かとこちらを振り返る。我に返って小さくなる私を、和真は声を押し殺して笑っていた。相変わらずだ。こうやって和真はいつも私で遊んでいた。

「そう言うそっちはどうなのよ。例の彼女とは上手くいつてるの?」

今度は小声で彼に問うた。すると、和真は滅多に見せない困ったような笑顔を浮かべて、聞こえるか聞こえないか分からないような声で、ぼそつと呟いた。

「彼女なんて、ずっといない」

「え……?」

「あ、俺もう降りなきゃ。じゃあな、陽菜。さようなら、日向さん」

私が言葉を発する前に、和真は電車を降りて行った。そうだった、和真の家は同じ市内だけど私や先輩の家とは遠くて、最寄駅も1駅違うんだった。

「話は終わったのか?」

「あ、まあ……」

日向先輩は私と和真の話が終わるまで待っていてくれたらしい。会話の内容まで聞こえたのかどうかは知らないが、必要以上に聞いてこないところは大人だ。

それから駅について、先輩と別れて家に帰るまで、私はずっと上

の空だった。あの、和真の最後の言葉がぐるぐる頭の中を巡る。

しかし、家についてしまえばもうそんなことを考えている時間はなくて……。

「なっちゃん！」

泣き腫らした目を擦りながら、それでもまだ目に涙を溜めてゆーくんが玄関に小走りやってきた。私が訳を尋ねると、ゆーくんが再びリビングに戻り、今度は陽翔を連れて戻ってきた。

ジーパンをゆーくんにつっ張られながら歩いてきた陽翔の顔を見て、ゆーくんの涙の理由がわかった。

「っ大丈夫！？どうしたの!？」

「平気。なんでもない」

「でもお兄ちゃんさっき痛いつて言った!」

「言っんじゃねーよ」

無然とした表情の陽翔は、左頬を真っ赤に腫らしていて、それで冷やしていた。これはどこからどう見ても殴られたようにしか見えない。

焦る私を見て、ゆーくんがさらに不安の色を濃くする。動揺しちやいけないと思いつつ、どうしたらよいかわからなくておろおろしてしまふ。そんな時、お兄ちゃんが帰ってきた。その手にはドラックストアの袋が。

「おう、おかえり……って、まだ泣いてたのかよ」

「大翔のバカ！お兄ちゃんは痛いのに!」

「はいはい。んで、陽菜はその様子だと理由は聞いてないな？」  
「うん」

私は頷く。陽翔は私にこういうことを何も話してくれない。昔からそうだ。私が病気になった時はこれでもかというくらい過保護だし、怪我をした時なんてその時のことを事細かく話させてからお説教をするのに。お兄ちゃんに相談したこともあるけど、「それが男だ」って笑われてお終いだった。

お兄ちゃんは陽翔の頬に買ってきた湿布を張ってやりながら、この怪我の訳を話し始めた。陽翔はすごく嫌がったのだが、有無を言わず黙らせた。流石にそこは長男の威厳がある。

「ま、予想はついてると思うけど、殴られたんだよ」

「誰に!？」

「知らない男」

「・・・知らない・・・？」

詳しく聞くと、今日陽翔にある女の子が告白をしてきたらしい。それを断ったところ、帰り道で突然後ろから知らない男が話しかけて来たという。そして振り返ったら、いきなり力いっぱい殴り倒された。

「それって傷害事件じゃない・・・!」

「・・・そうなんだけど、まあ聞け」

今にも警察に電話をかけそうな私を静止して、お兄ちゃんは話を続けた。

話しかけて来た男の後ろには昼間の女の子。そしてよく見比べる

と、2人はよく似ていた。そこで陽翔も気が付く。こいつは後ろの女の子の兄なのだ。

その女の子は両親や兄にちやほやと育てられ、今まで思い通りにならなかったことはないというくらい我が儘だった。それ故に、陽翔に断られた彼女は兄に泣きついた。妹が可愛い兄は言われるままに陽翔の元へ行き、そして突然の暴行に及んだのだ。

「完璧に犯罪だって！警察！」

「だから待ってっ」

完全に頭に来ている私に比べて、お兄ちゃんも陽翔も冷静沈着。いくらなんでも落ち着きすぎている。いくらお兄ちゃんだって、弟がこんな理由で殴られたと聞いて憤慨しないはずがないのに。

「やり返したんだよ」

拗ねるような口調で、陽翔が言った。やり返したと言ってもそれは当然のこと。正当防衛なんだから警察に言わない理由にはならない。そう私が言つと、大翔が苦笑いをしながら私を制した。

「いいか、冷静に考える。陽翔がやり返したんだぞ？」

深呼吸を促され、まだ興奮状態の頭で必死に考える。女の子からの告白を断った。逆恨みされてその兄に殴られた。そして陽翔が・・・やり返した・・・

私の表情の変化に気が付いたのか、大翔がニヤツと不敵な笑みを浮かべた。対照的に陽翔はバツの悪そうな顔。

それもそのはず。陽翔は幼い頃からとても可愛らしくて、女の子に間違われることも多かった。そのため、同級生や上級生からバカにされることもしばしば。その度にお兄ちゃんや私が庇っていたものだ。

体は細くても元々負けん気の強かった陽翔は、大きくなるにつれて相手を返り討ちにするようになっていった。しかも頭のいい陽翔らしく、相手が絶対的に不利になる状況でしか手を出さないのだ。今回のように、公になったとしても火の粉は向こうに降りかかるように。

「相手は・・・？」

恐る恐る尋ねれば、バツの悪そうな表情を浮かべていた陽翔が一転、薄く笑みを浮かべた。まるで汚らわしいものでも思い出しているかのように。

我が弟ながらその美しい笑みに背筋が凍りそうだ。やはり我が家で一番敵にはいけないのは陽翔だ。あの事件の時だって、私以上に陽翔を宥めるのが大変だったのだから。



接近(3) (後書き)

和真くんは「出会い(1)」で名前だけ登場していました。

気になる方はどうぞ。

## 接近（４）

あの日から、和真には会っていない。再会した日こそいろいろ思い出に浸っていたけれど、帰宅してからの陽翔の事件だったり、夜に来た先輩からのメールだったりで、次の日には完全に頭の中からは抜けていた。

そう！さらつと言ってしまったけれど、実は昨日の夜、日向先輩の方からメールをもらったのだ。今までもらったメールは事務的な連絡のみ。しかし昨日のメールは違った。

『今日の帰り、様子がおかしかったけど、無事家に着いたか？』

と、私のことを心配してくれる内容だったのだ。私はずっと上の空だったけれど、よく思い出してみると本当にボーっとしていたと思う。改札を通ろうとすればスーパールのポイントカードを出してしまっし、赤信号に全く躊躇なく突っ込んで行こうとするし、終いには家とは逆方向に歩き出してしまうという有様。それにいちいち突っ込んでくれたのは他でもない日向先輩だった。

ちなみになぜ先輩が家の方向を知っているかという点、以前家の近くのコンビニまで送って来てもらったことがあるからだ。

結局、本当なら駅から別の道に分かれるところを、そのコンビニまで送って来てもらった。

我に返ってみて、もったいないことをしたと切に思う。先輩と電車で帰るのも滅多にないことだし、しかもそこから家の近くまで送ってくれるなんて、きつとこの先もなかなかチャンスは訪れないだ

ろう。それなのに、ほとんど上の空だったなんて。

逃したチャンスは、2度と来ないと思え。それが両親の口癖だった。とはいえ過ぎてしまったことはどうにもならないので、今度は逃したチャンスを取り戻そうと努力しなければならない。私はすぐに返事を打ち始めた。

「ありがとうございます・・・無事・・・着きました・・・。迷惑を・・・かけて・・・すみませんでした・・・つと。あと、何か会話が続くことはないかな」

「陽翔が会いたがってたぞ」

「そう？んじゃ、陽翔が・・・つて！なんでいるのよ！」

「こんなところでぶつくさ言いながらメールしてる方が悪いだろ」

言い返したいけど言い返す言葉もない。ゆうくんを寝かせて、台所の後始末を終えて、一段落したところでメールに気付いたため、自分の部屋ではなくリビングでメールをしていたのだ。

陽翔も自室に行ってしまったし、お兄ちゃんもお風呂に入っているとって油断していた。というか、声に出ていたとは恥ずかしい限りだ。

「日向と付き合ってたのか？」

「そんなんじゃないってば」

今日はその話をよくされる日だ。その質問をされるたびに否定しているのだんだん悲しくなってくる。

「でもメールの相手、日向だろ？」

「そうだけどっ・・・何でわかるの？」

「さあな」

「さあなつて、あつ！ちよつと！」

お兄ちゃんは私の手からケータイを奪い取ると、私の手の届かないところで何やらメールを打ち始めた。こんな時に身長差が仇になるとは思わなかった。いつもは高い所に手が届くから便利だな、なんて思っていたのに。

それでも必死に奪い返そうとお兄ちゃんによじ登ってみるも、人間はサルではないのでちよつと難しい。

「……だからそういうことはカーテンを閉めてやれよ」

またまたちよつとよくリビングにやってきた陽翔が呆れながらカーテンを閉めた。冷静になって自分たちを見つめてみると、確かに怪しい。

お兄ちゃんはお風呂上りということと、下はジャージを履いているが上半身は裸のまま。そしてそこにしがみつく私。傍から見れば、会話が聞こえていないならなおさら、いちゃいちゃしているようにしか見えないだろう。

「で？今度は何してるの？新しいマッサージ？」

顔に湿布を張っていても、陽翔は絶口調だった。その嫌味節にはもう慣れっこだ。

「いや、お前にもいい知らせ。『いつくん』に会いたくないか？」  
「……どういうこと？」

まだ、陽翔は日向先輩のことを知らない。ゆうくんが喋ってしまったために断片的には知っているのかもしれないが、それでもまだ詳しいこと・・・フルネームとか、顔とかは知らない。でも、兄弟の中で知らないのが自分だけだと知って、陽翔はかなり拗ねた。だからそれからは陽翔にこの話題は避けていたのに。

「会わせてやろうか？」

「だから、わかるように説明して」

「ふふん、ほら」

お兄ちゃんには私には見えないように、高い所で陽翔にだけ送信済みのメールを見せた。それを見た陽翔は、おもちゃを見つけた子どものようにニヤツと笑った。そしてそれを見たお兄ちゃんもニヤニヤ。その意味深な笑みが嫌だ・・・。

それから10分。2人にお風呂を勧められたがそれどころじゃない。いつ返信が来るかが気がかりで、この場を離れられないのだ。相変わらずお兄ちゃんはケータイを返してくれないし、陽翔まで噂の「いつくん」に会えるかもしれないと知り、リビングでテレビを見ながら待っている状態だ。

だいたい、人のケータイから勝手にメールを送るなんて非常識すぎる。何を送ったのだろう。変なことを送っていないければよいが・・・明日説明をするのが非常に億劫だし、心配だ。

ピロリロリロ

無機質な着信音がお兄ちゃんのジャージのポケットから聞こえてきた。その瞬間、私はお兄ちゃんの方に手を伸ばしてケータイを取り戻そうとするが、その手は無情にも陽翔によって遮られた。そし

て、口を手で塞がれる。これは姉に対する行動じゃない！

「大翔、何て？」

「焦るなよ。えーっと、『明日の放課後なら空いてる』ってさ。明日、陽翔は？」

「俺はもう部活引退したし、放課後なら全然余裕」

「おっけ。んじゃ明日の夜、ご招待〜」

「んー！んーんー！」

「あ、わり」

ようやく陽翔が手を放してくれた。そして、それと同時にお兄ちゃんからもケータイが返される。私は2人を咎めるのも忘れて、お兄ちゃんが送った内容と、それに対しての先輩からの返信をチエックした。

「・・・何してるのよ」

「別に、本当の事しか書いてないだろ」

お兄ちゃんが先輩に送った内容はこうだ。

『うちの弟が先輩に会いたいわって聞かないんです。ちよつとの時間でいいので、会ってもらえませんか？兄がついてくるかもしれないんですけど・・・』

今までのメールの内容と全く噛み合っていない。どうせならもう少し前後のつながりを考えて送ってほしかった。なんて、怒る焦点がずれている気もするが、思ったよりも普通のメールで内心ほっとしていた。

それに対しての先輩の返信はこうだった。

『遅くならない方がいいんだろ？明日なら空いてる。勉強の時間が無くなるけど、いいか？』

どう考えても、先輩は「弟」をゆーくんだと思っている。だから時間は遅くならない方がいいと言ってくれたのだろう。お兄ちゃん、いつの間にか『ありがとございます。弟にも伝えておきますね』なんて返事をしていた。

『じゃあ明日の放課後、バイクのところで待ってる』

先輩からの返信はこうだった。やったあ、またバイクに乗せてもらえるんだ！・・・なんて喜んでる場合じゃなくて、誤解は解いておかないと。そう思っただけメールを打とうとすると、再びケータイが奪われる。

「ダメだよ。驚いてもらいたくないし。それとも、俺には会わせたくないの？」

「そんなんじゃないけど・・・」

ダメ、ダメだっ・・・陽翔の滅多に見せないおねだりには弱いっ・・・！こんな表情を外でもやっているのかと思うと、姉としてはちよつと心配だ。

「ケータイ、預かっておくれ」

天使の微笑と共に、私のケータイは陽翔に持ち去られた。横では腹を抱えて爆笑する兄。なんなんだ、この兄弟は。

## 接近(5)

結局どうやってもケータイを返してもらおうことができなかったの  
で、放課後になる前に直接誤解は解いておこうと思った。

しかし、タイミングの合わない日はとことん合わない。昼休みも  
勇気を出して教室や生徒会室まで行ったのにいないんだもの。そう  
こうしているうちに放課後になってしまった。最悪駐輪場と言えば  
いいか。

「遅かったな」

その聞き覚えのある声を聞いて、私は自分の耳を疑った。そして、  
声の主の眩しいくらいの笑顔を見て、自分の目も疑った。

「なんでここにいるの？」

「待ち遠しくて」

絶対嘘だ。私たちが逃げられないようにわざわざ来たただけ。そ  
して私と日向先輩の反応を楽しみたいだけだ！私はバイクに跨った  
ままニヤニヤしているお兄ちゃんと陽翔をジロリと睨みつけた。そ  
の直後……

「悪い、遅くなった」

日向先輩がやってきた。その視線は私に向いて、お兄ちゃんに向  
いて、最後に陽翔でしばらく止まった。そしてお兄ちゃんと陽翔を  
交互に見ながら、すべてを悟ったような溜息を一つ。



「例の弟か？」

「すみません……」

「いや、どうせ三崎の悪巧みだろう」

おっしやる通りです。お兄ちゃんの悪巧みなんです。そしてこの爽やかな笑顔を浮かべている弟も一枚噛んでいるんです。

「初めまして。三崎陽翔です。姉がお世話になってます」

「初めまして……」

陽翔は文句なしでいつもの余所行きスマイル。初対面の人は大抵この笑顔の前には笑顔になる。しかも男女問わず。だけど、日向先輩は無表情だ。どうしてだろう、先輩には陽翔の表面上の人当たりの良さが伝わらないようだ。

なかなかない反応に、完璧なはずの陽翔の笑顔も若干引きつる。2人の睨み合い(?)にヒヤヒヤするが、これはこれで滅多に見られないと思うと面白いかもしれない。お兄ちゃんも同じ気持ちなのだろう、必死で笑いを堪えている。

「それで、俺に何か用？」

「いえ、弟が……結翔が絶賛する方に、僕もぜひお会いしたくて」

ぼ、僕だって……。猫かぶっちゃっても、きっと先輩には通用しないと思うんだけどな。

「別に、俺は絶賛されるような人間じゃない」

「そんなことないですよ。僕もあなた、日向一樹さんの噂は聞いています」

「……どんな？」

その言葉に日向先輩がピクリと眉を動かした。先輩の睨みにも怯むことのない陽翔は不敵な笑みを浮かべている。おっと、陽翔の猫かぶりがだんだん薄れていく。陽翔も先輩には猫をかぶっても仕方ないということを知ったようだ。

「こんなところで言っちゃってもいいんですか？」

「所詮噂は噂だ」

なんだかハブとマンゲースみたいな攻防になってきた。どうしよう、止めたほうがいいのだろうか。でもどうやって……？

助けを求めてお兄ちゃんにアイコンタクトを図るが、無視。ちらりと私の方を見たのに、あっさり視線を2人に戻す。面白いから放っておくってこと？もう勘弁してよ。

「こんなところで楽しそうだね」

場にそぐわない呑気な声を上げてこちらにやってきたのは……

「颯太さん……？」

「や、陽翔。久しぶり」

臯月先輩がお兄ちゃんと面識があるのはわかる。だって同じ年で同じ市内の中学校出身だし、大会でも何度も顔を合わせただろうし。だけど、どうして陽翔が臯月先輩の事を知っているの？それに、臯月先輩の方も陽翔のことを知っているみたい。

「颯太さん、どうして？」

「だって、俺もここの高校の生徒だもん。こいつが生徒会長、俺が

副会長」

「……こいつが会長……？」

いきなりこいつ呼ばわりされて日向先輩の眉間に一瞬だけ皺が寄つたのを、私は見逃さなかった。臯月先輩を見て驚いた拍子に化けの皮が剥がれたみたいだ。

「臯月先輩、陽翔と知り合いなんですか？」

「うん。以前ちよつとね。さ、ここにあまり長くいるのはよくない。みんなバイクなんでしょ？早いところ帰るよ」

そつだ、黙認されているとはいえバイク通学は禁止。あまり長々とここにいるのは危険だ。それにお兄ちゃんと陽翔は他校生。他校生が校内にいるのもよいことではない。

「乗れ」

日向先輩にヘルメットを渡される。当然とばかりのその行動に、脇にいた兄弟はいい顔をしなかったが、お兄ちゃんと陽翔が2人にバイクに乗ってきたため、こうなるのが1番自然なのだ。流石に日向先輩のバイクに陽翔が乗るといっではないだろうし。

だから素直にヘルメットを受け取り、さつさとバイクに跨って先輩の腰に手を回す。そういえば臯月先輩は電車？

「今日は修理に出したバイクを取りに行くんだ。すぐそこだよ」

なるほど。だから昨日はバイクがなくて焦っていたのか。いつもバイクでバイトに行っていたならなおさら。でも臯月先輩はいつも電車で帰っていたような気がする。日向先輩とは違って、あまりバ

イクには乗ってこないのかもしれない。

「いいか？」

「はい」

私の準備ができたことを確認すると、先輩のバイクは走り出した。相変わらず、先輩のバイクはとっても速い！だからしっかりと掴まっていけないといけない。それを口実に、先輩の背中に顔を寄せると、いつものあの香り。夏の日差しが暑いはずなのに、広い背中の中も温もりが心地よい。ずっとこうしていたいな。

バイクは順調にK市へと向かって走っていた・・・はずだった。

「ここは・・・？」

「俺んち」

「はい!？」

どうして私は日向先輩の家にいるの？という話は数十分前に遡る。

バイクに乗りながら、私は日向先輩に問いかけられた。

「お前の兄弟はこれでもう終わりか？」

「終わりです」

「昨日のメール、三崎だろ？」

「その通りです」

「あの弟・・・陽翔もグルだろ？」

「まったくその通りです」

聞けば昨日の時点でおかしいとは思っていらしい。先輩も今日私に聞こうと思っていて、休み時間に教室に来てくれたんだって。すれ違いだったんだ。

「もしあのメールがお前じゃなかったら、場所を変えて勉強するかと思ったんだ。ヤバいんだろ？」

「そうなんです、ヤバいんです・・・」

昨日なんてメール騒動で勉強どころじゃなかったし、今日の授業も上の空だったから、実は危機感が日に日に増していた。

「これから勉強する元気あるか？」

「いいんですか？」

「いい。明日はバイトだから放課後できないしな」

「じゃあぜひお願いします！」

というやり取りの後、連れてこられたのが先輩の家。先輩の両親は去年転勤で県外に行ってしまったらしい。先輩はあと1年だし、こちらに残ることに決めたそうだ。お姉さんが1人いるらしいんだけど、大学生ということ、アパートを借りて1人暮らしをしているんだって。

「そこで待ってる」

通されたのは先輩の自室ではなくて、リビングだった。ホツとしたような、ちょっと残念なような。リビングは男性の1人暮らしだけど、とてもきれいに片付いている。緊張してソファに座っていると、キッチンから紅茶を入れた先輩が戻ってきた。そして、私の姿

を見るやいなや、ふっと笑った。

「緊張してるだろ？」

「へ！？いや、あの・・・はい」

そんなに見ていてバレバレなくらい緊張が表に出ていたのだろうか。恥ずかしい。でも緊張すると言われてもそれは無理な話だ。

「今日は何？化学か？」

「・・・先輩、エスパーみたいです」

勉強すると決まってるから、今日は化学をやるぞと決めていたのだ。どうしてそれがわかったのだろうか。

「だいたいそうだろ？理系科目が苦手なんだから、数学の次は化学」

完璧に読まれている。私って単純なんだな。問題集とノートを取り出すと、珍しく先輩も教科書とノートを取り出した。

「先輩もお勉強ですか？」

「ああ、復習と・・・予習でもしようかと思って。普段はほとんど勉強なんてしないんだけどな」

それで毎回トップクラスの成績が取れるんだから、神様って不公平だ。私にも、その頭脳を少し分けてほしい。

「分からなくなったら呼べ」

そう言うと、先輩は自分の課題をやり始めた。ノートにペンを走らせる先輩の姿は真剣で、うっかり見惚れてしまうそう。あまり見

すぎている怪しいので、はっと我に返り自分の課題に取りかかった。それでもなかなか進まなかったのは、言うまでもない。

## 接近(6)

「一息入れる」

テーブルの上に置かれたのは、砂糖とミルクがたっぷり入ったコーヒー。いつの間にか集中していたのか、時計を見るともう6時半を回っていた。外はまだ明るいから気が付かなかった。

「お前、集中するとすごいな」

「そうですか？」

「昨日も思っただけど、その集中力は見習いたい」

先輩に初めて褒められたような気がして、嬉しい。でも、せつかく2人きりなのだから、勉強ばかりで終わってしまうのは残念だ。何か話をしたいな、と思っていたら向こうから話題が提供された。

「乾とは知り合いか？」

「へ、和真ですか？」

いきなり和真の話題を切り出されて驚いた。今日のこと、つまり陽翔の事なんてすっ飛ばして、昨日の話なのだから。

「和真は・・・まあ隠していても仕方ないので言いますが、元力しなんです」

ついでだとばかりに、付き合いだした経緯や、別れる際の一悶着まで話してしまった。そして、昨日感じた違和感も。

「あんなにムカついてたのに、昨日会ったら全然そんな感じじゃな



かつたんです。むしろいい人っていうか。それに何か隠してるみたいだったし・・・」

「まだ好きなのか？」

「いえ！今はもう何とも！」

第一好きな人が目の前にいるんですから！なんてことは口が裂けても言えなかつたけれど。先輩はただ無表情で「そうか」とだけ。ちよつとだけ、嫉妬してくれたりした？なんて思ってしまった自分を殴りつきたい。

そう自分を戒めた直後に、先輩の整った顔がどんどん近づいてくる。え、何？近い、近いって！高鳴る鼓動が最高潮に達し、私は目を開けていることができずぎゅつと瞑った。

「ここ間違ってる」

「・・・はい？」

ゆつくりと目を開けると、先輩は私の横に顔を寄せ、ノートを覗き込んでいた。このパターン何度目よ・・・。実はこのいたずらには昨日も引つかかっていた。その反応に味をしめたのが、面白がつて何度も顔を近づけてくるのだ。いたずらっ子め！

「あの、この際言いますけど！そんな事はっかりしていると女の子はみんな勘違いしちゃいますよ！学校でなんて言われてるか知ってます？」

「知ってる。けどなんでよく知らないであんなに騒げるのかは理解不能」

「テレビの中のアイドルみたいな感じなんですよ。皐月先輩と並んでいるとより一層」

「ふん、下らない」

下らないって、まあ本人にしてみればそうかもしれないけどね。でもやっぱり女の子にとって、勉強も出来てスポーツもできて、かつこよくてカリスマ性もある、そんな完璧な王子様みたいな人は憧れの対象になってしまう。

「勝手に近寄ってきて自分の理想を押し付けて、理想と違ったからって勝手に文句を言って去っていく、そんな女ばかりだったけど・・・お前は変な奴だ」

「そこで何で私が出てくるんですか」

どこをどう通って私の話になるのだろうか。まさか、私も『そんな女』と一括りにされてしまっている？

「違うから」

「・・・声に出てました？」

「出ていた。俺が言いたいのには、お前は『そんな女』に当てはまらないから、変な奴だなるってこと」

「いえ、たぶん大多数が『そんな女』には当てはまらないかと・・・」

「そうか、先輩が特定の女性と深い関係にならないのは、こういう理由があったから・・・『女性』」「『そんな女』になっているからなのか。去って行った女の人たちはなんてもったいないことを。だつて・・・」

「私はありのままの先輩が素敵だと思います」

ぶっきらぼうだけど肝心なところでは優しく、ちょっといたずらっ子なところもあって。知れば知るほど興味が湧いてくる。いろ

んな面をもつと知りたいと思う。

「そりゃどうも」

こんな時でも先輩は素っ気ない態度・・・と思つたら、心なしが様子が変。もしかして、照れてる？だって目を合わせてくれないし。じつと見ていたらついに顔を背けられた。

「ぷっ・・・」

「なんだよ」

「なんでもないです・・・」

可愛いっ・・・！笑っちゃいけないけど、顔が自然に笑つてしまふ。それに気づいた先輩がまたちよつと不機嫌そうになるから、それすらも可愛い。完璧な先輩も、こういう一面がるんだなって思うと親近感がわいてくる。

「おら！さつさと直せ！」

「はい」

照れ隠しのためなのか、いつも以上にキツイ言い方をする先輩。でもこんな姿を見た後ならそんな姿も怖くない。むしろ今日も先輩の新しい一面が見られたことに上機嫌だ。ただ、そのせいで周りが見えていなかった。

「熱っ・・・！」

「バカ、何やってんだ！」

せつかく先輩が入れてくれたコーヒーに腕がぶつかって、私の胸から腿にかけて・・・つまり制服の前面を濡らした。淹れたてだっ

たために結構な温度で、服の上からとはいえかなり熱い。

「とにかくすぐに脱げ。向こうに脱衣所があるから」

「え、うわっ！」

気が動転して動けなかった私を軽々と持ち上げて、そのまま脱衣所に連れて行かれた。所謂お姫様抱っこも、この状況では熱さが勝つてあまり嬉しくない。

「いいか、脱いたらシャワー使ってもいいから冷やせ。タオルと着替えは置いておくから」

「すみません・・・」

脱衣所のドアが閉まったのを確認すると、コーヒーがかかった制服を急いで脱ぐ。そして、バスルームに入り、言われた通りに濡れたところに冷たいシャワーをかけた。幸い、火傷にはなっていないかったようで、痛みが出ることもなく落ち着いた。

脱衣所に戻ると、先輩の言っていた通り、タオルと着替えがあった。そのタオルは見覚えのあるもので、私が以前借りたものだった。やっぱりほのかにいい香り。着替えはというと、先輩の私服とみられる服が置いてあった。

ドキドキしながらそれを身につけ、脱衣所を出ようとするが、制服が見当たらない。早く洗わないとシミになってしまうし、明日までに乾かない。脱衣所をこそこそ探していたら、先輩が外から声をかけてきた。

「制服ならクリーニングに出したぞ」

「ええっ！すみません！」

「いい。ちょうど3件先がクリーニング屋なんだ」

そういえばそうだったかもしれない、とこの辺りを思い出しながら先輩の服を着て脱衣所を出る。

「明日までには間に合わないかもしれないから、明日の学校は俺の姉貴の制服で我慢してくれ」

「そんな・・・私の不注意なのに、すみません」

「サイズは合うか？」

「大丈夫です」

制服を手に取り、サイズを確認しながら言う。強いて言えばウエストがちよつと緩いかもしれないです。なんて言えるわけがなかった。先輩も長身だし、きつとお姉さんも背が高い人だったのだろう。私にしてみればスカートも丈が長めだ。

「火傷は？」

「全然。どこもヒリヒリするところもありません」

「それならよかった。今日は今着てる服を着て帰っていいぞ」

「ありがとうございます」

こんな状況じゃあもう勉強どころではないので、今日は帰ることにした。なんだかんだしていたらもう遅い時間だし、外も暗くなり始めている。

「送る」

先輩は私に家の鍵を渡し、自分はバイクの鍵を手にして、玄関に向かった。内心ラッキーと思いつながら、言葉だけは申し訳なさそうに「すみません」と言っておく。でも緩む表情は隠せないの、先

輩が先に行ってくれてよかった。

私も急いで鍵を閉め、車庫へと向かう。と、その時。

「あなた、どなた？」

1人の美女が驚いた表情で私に問いかけてきた。

## 勘違い(1)

私の目の前で目を見開いている女性は、女の私から見ても息を飲むほどの美しさだった。大きな瞳、すつと通った鼻筋、艶やかな髪、白い肌、長身で、細いのに出るところは出た体。まるでテレビや雑誌に出てくるモデルのようだ。年齢は先輩よりも少し上くらいだろう。

「それ、一樹の服？」

彼女は視線を私の来ている服に移して言った。そして、私の返事を待たないうちに眉間に皺を寄せ、明らかに怒っている表情を見せた。

どうやら、彼女は勘違いをしているみたいだ。確かに、勘違いをされる要素はたくさんある。先輩の家から、先輩の服を着て出てきているのだから。

「あなた、名前は？年はいくつ？」

「えっと、三崎陽菜、高校1年生です」

美人さんが凄むととてつもない迫力だ。こんな不躰なのに、思わず条件反射のように答えてしまった。

「そう、一樹の高校の子なのね」

そう言って彼女は大きな溜息をついた。そして、次の瞬間、私の度肝を抜くほどの怒声を上げた。

「そこにいるんでしょ！？さっさと出てきなさい！」

一瞬の静寂の後、物陰から現れた先輩。もしかして、隠れていた？

「隠れてないでさっさと出てきなさいよ」

「隠れてたんじゃねえよ。今来たんだ」

「嘘ばかり。男らしくないわね」

「うるせえな、何しに来たんだよ」

「あら、用もなく来ちゃ悪いの？」

「つたく・・・相変わらずマイペースだな・・・」

先輩は酷く面倒そうだったけど、彼女との会話や2人の間に流れる空気感から、険悪さは感じられなかった。以前先輩と女性がファミレスでもめているところに出くわしたけれど、その時の女性に対する表情とこの女性への表情は全く違う。そして私への表情とも。

2人は互いに憎まれ口を叩きあっているけれど、とても親しい雰囲気伝わってくる。そう思うと心がちくちくと痛みだす。

「先輩、お客様のようなので私1人で帰ります。服は明日洗って返します」

「いや、送るから」

「大丈夫ですよ、近いですし。さようなら」

私は半ば逃げ出すようにしてその場を去った。あんな先輩の、心を許したような表情をこれ以上見ていられなかったから。

しばらく走って、息が切れてもう走れなくなったところでようやく



く立ち止まった。息を整えながらとぼとぼ歩く私、なんだかバカみたい。

本当のことを言うと、先輩が勉強を教えたり、送ったり、家にまで呼んでくれたりしたこと、先輩にとって特別な存在になった気がしていた。そんな勘違いを今、まざまざと実感させられた。

調子に乗って、今まで近づきすぎたからいけなかったのかもれない。初めの頃のように、自分の気持ちに気付いても一定の距離を保っていればよかったのだ。勘違いして、勝手に期待したために、勝手に傷ついている。

込み上げてくるものを、私は抑えられなかった。一度溢れ出した涙は簡単には止まらない。すれ違う人はみんな私を振り返っていく。そんな視線が痛くて、下を見ながら歩いていると、誰かが私の前で立ち止まる。不思議に思い顔を上げてみると、目の前の彼は心配そうに私を見下ろしていた。

「陽菜？」

「和真……」

「どうした？」

「何でもないよ……」

「何でもない顔じゃないでしょ？」

和真は強引に私を引っ張っていくと、有無を言わず公園のベンチに座らせた。そして、自分も隣に座ると、何かを思い出したようにふっと笑った。

「覚えてる？初めてのデートでこの公園に来て、お前のにーちゃん

にばったり会った時のこと」

忘れもしない・・・和真と付き合いだしてから初めてのデートの帰り道、この公園に寄った。そして、このベンチに座ってキス・・・のはずだった。

「大翔さんさ、怒り狂って俺たちの方に来て、陽菜のこと連れて帰ったんだよな」

そうなのだ。たまたま部活の帰りに通りかかったお兄ちゃんは、まさにキスする寸前だった私たちに怒鳴り込んできたのだ。その後、家に帰ってから私とお兄ちゃんの間で、しばらくの間冷戦が続いたのだった。思い出すとバカバカしくて笑えてくる。

「あ、涙止まった」

「え・・・」

いきなり何故思い出話を始めるのかと思ったが、私の涙を止めるためだったのか。

「何があったかは無理に聞かないけどさ、あんな顔して歩いてたらまた変な奴に目をつけられるだろ？」

「ごめん・・・」

「謝るなって、何度も言ってるだろ」

そうだね、よく言われたね。あの事件の時だって、怪我をしたのは和真の方だったのに、ずっと私にそう言ってくれていた。

「あの時の怪我・・・もういいの？」

「全然。俺バスケずっとやってたじゃん。高校でも続けてるしさ。」

陽菜は・・・高校に入ってからはどう?」

この「どう?」の意味、私にはすべてを聞かなくても和真の言いたいことが分かった。

「大丈夫。楽しい」

「日向さんもいるしね」

「えっ!何で!?!」

「何でって、ねえ?」

不意に日向先輩の名前が出てきて、思わず声が裏返ってしまった。そんな私を見てくすくす笑う和真。もうお見通しみたいだ。

「俺、さつき陽菜に会う前に日向さんを見たんだ。日向さん珍しく焦ってて、何かあったのかなって思ってた時に陽菜を見つけた。だからごめん、聞かないなんて言ったけど、その涙は日向さん絡みだよね?」

焦っていた?あの女性と何かあったからだろうか。日向先輩の行動の訳を推し量ることはできなかったが、とりあえず聞かれたことには黙って頷く。

すると、腕をぐいっと引かれたと思ったら、次の瞬間には和真の腕の中にいた。突然の行動に驚いて声も出ず、体も動かない。

「別れた時のこと、言い訳はしない」

何を言い出すのだろう。今日の和真はどこかおかしい。いつもきちんと整理をして話をするタイプなのに、今日は支離滅裂・・・話があちこちに飛ぶ気がする。

「でも、これだけは知っていて。あの時から今まで、想うのはずっと陽菜だけだから・・・」

「え・・・」

「だから、もし次にこんな顔の陽菜に会ったら・・・俺自分を抑えられないと思う。俺のためにも、ちゃんと日向さんと仲直りするんだよ？」

それだけ言うと、和真は私を腕の中から解放して頭をそつと撫で、入って来た入り口とは逆側の公園の入り口を一瞥すると、そちらに歩いて行った。彼が向かう先にいたのは他でもない、日向先輩だ。和真は日向先輩と何やら一言二言話すと、そのまま公園から出て行ってしまった。

そして、日向先輩は怖い顔をしてこちらにやってくる。どうしよう、逃げようか。でも私を射抜く先輩から視線を外すことができない。怖いのに、逃げられない。

あれこれ考えて迷っている間に、先輩が私の座るベンチまでやってきた。そして、ただ何も言わずに隣に腰かける。2人と口を開かない。その沈黙の時間が、私には1時間にも2時間にも感じられた。そうしてしばらく経った後・・・

「あいつに、怒られた」

ポツリと先輩が口を開いた。あいつとは先ほどの女性の事だろう。やはり、私と先輩の関係を勘違いして怒ったのだ。和真が言っていた「珍しく焦っていた」というのも、きっとあの女性の誤解を解くためだったのだろう。

「いいんですか、彼女を置いてきて」

「ああ、あいつよりお前に言いたいことがあったからな」

それを聞いても、私は平気でいられるだろうか。ううん、たぶん無理だ。だってだいたい先輩の言いたいことはわかっているから。

「陽菜」

先輩が、ゆっくりと口を開いた。

## 勘違い(2)

「ごめんね！勘違いしちゃって！私てつきり一樹がまた遊びで女の子を連れ込んだのかと思って。しかもその女の子が純情そうな子でしょ？これは一樹に騙されたんだと思って・・・本当にごめんなさい！」

「いえ、そんな・・・」  
「だって、一樹ってば相変わらず不愛想だし、陽菜ちゃん置いて先に出ちゃうし。まだそんな付き合い方をしているのかって思ったら、つつい頭に血が上っちゃったの」

目の前の女性、里緒奈しおなさんは申し訳なさそうに頭を下げた。今、私は再び先輩の家に連れて来られて、里緒奈さんと先輩と3人で夕ご飯を食べていた。もちろん家には連絡済。電話の向こうでお兄ちゃんは何やら叫んでいたけど無視して切った。

「それにしてもあの三崎大翔君の妹さんとはね。目元が似てるかも」  
「兄のこと、ご存じなんですか？」

「もちろん。一樹の試合を見に行くたびに大翔君の名前を聞くんだもの。活躍ぶりもさることながら、あのルックスでしょ？有名人よ」  
「・・・姉貴、いい加減にしろ」

止まらない里緒奈さんのマシンガントークに呆れた先輩が助け船を出してくれた。でも里緒奈さんはそんな先輩の声なんて耳に入っていないようで、話を続ける。

そう、彼女こと日向里緒奈さんは、先輩の3歳上のお姉さん。現在は県内の大学に通っているのだが、どうしても一人暮らしがしたいということで大学の近くにアパートを借りているとのこと。将来

は中学校か高校の先生になりたくて勉強しているのだという。

私がこの家から日向先輩の服を着て1人で出てきたことで、里緒奈さんは盛大な勘違いをしたらしい。私が日向先輩に丸め込まれて体の関係をもってしまったのだと。

先輩は今まで本気の恋愛はしてこなかったという。しかし、遊びの恋愛・・・つまり体だけの関係の女性はたくさんいた。里緒奈さんはそのことをよく思っていないくて(当たり前だ)、両親が転勤になって一人暮らしになった先輩の様子を見にちよくちよく帰って来ているらしい。

「いいじゃない、仲良くなりたいのよ。遊びの相手じゃない女の子なんて初めて会ったのよ?」

「勘違いしてたやつがよく言う・・・」

「今までの行いが悪いのよ」

「俺は家に連れ込んだことなんて一回もない」

目の前で勃発した姉弟ゲンカを、私はただ黙って見守る。それにしても、お姉さんという時の先輩は学校での生徒会長でも、先輩でもなく、弟の顔をしていた。そんな先輩がどこか可愛く見えるなんてこれは内緒。

「それで、2人はどういう関係なの?付き合ってるの?」

先輩がキッチンで夕食の片づけをしている隙に、里緒奈さんがこそっと聞いてきた。その齒に衣着せぬ物言いに、思わず飲んでいたコーヒートを噴き出しそうになってしまった。

「関係なんて・・・ただの先輩と後輩です・・・」

「あら、そうなの？でも仲良しよね」

「仲良し……って言うんですかね……。私がいかに頭が悪いから、勉強を教えてもらっているんです」

先輩にとってはその程度の関係でしかない。こうして家に上げてもらって一緒に食事をしているのだから、2人が恋愛関係でないからこそ。

「そんな顔しないの。可愛い顔が台無しよ？」

「え、私今変な顔してました？」

「うふふ、すぐ顔に出るタイプなのね。可愛い。大丈夫！自信もつて！」

「はぁ……」

何の事だかさっぱりわからなかったが、里緒奈さんが大丈夫と言えば何故だか大丈夫な気がしてくるから不思議だ。

「それで？今日公園にいた可愛い彼、だあれ？」

「何でそれをつ！？」

「見てたから」

先輩と公園を出てからすぐに里緒奈さんと合流したのは、彼女が私のことを隠れて覗いていたからだっただけか……。しかも聞けば先輩よりも早く公園に辿り着いて、一部始終を見ていたというのだ。

「抱き合ってたけど、あの子が陽菜ちゃんの彼？でもその時の陽菜ちゃんの表情からして、そんな感じはしなかったのよね。だから私が推測するに……。元カレ……。なんじゃない？どう？当たってる！？」

「しーっ！声が大きいですって！当たり前ですから、もうちょっと小



「さい声で！」

里緒奈さんは「やっぱりね」と満足そうに呟いた。彼女の観察眼と推理力は恐ろしい。ほとんど当たっているのだから。それにしても、どこから見ていたのだろう。幸い、会話は聞こえていなかったようだけれど。

「陽菜ちゃんはまだ彼のこと好きなの？」

「・・・好きは好きですけど、もう恋愛っていうのじゃなくて・・・大切な人の1人・・・です」

「そう、そうよね。そんな感じだったもの。でも、彼はきつと今も好きなんでしょうね」

「何で知ってるんですか!？」

「あら、もうそれは知ってるのね。だって、彼の気持ちなんて見ていれば手に取るようにわかるわ。思春期っていいわよね」

論点がずれてきている。里緒奈さんは先輩とは別の意味で強引でマイペースな人だ。やっぱり姉弟なんだな、と感じてしまう。

「それで、彼になんて言われたの? 『彼は何も言わないけど、気付いた』・・・ってことじゃないでしょ? 陽菜ちゃんほわんとしてるから」

これは遠回しに「鈍いから」と言われたのだろうか。それでも不思議と嫌な気持ちにさせないからすごい。しかもまだ出会ってから数時間しか経っていないのに、すつと人の心を掴んで内側に入ってくるが、これも不快ではない。きつと彼女の人の柄のなせる業なのだろう。

「彼・・・和真が『あの時から今まで、想うのはずっと陽菜だけだ

から』って……でも、別れを切り出したのは向こうなんですよ」

私は別れた時の事を説明した。すると、里緒奈さんは笑顔のままうんうんとじっくり私の話を聞いてくれた。この人は聞き上手でもあるようだ。

最後まで話し終わると、里緒奈さんは「なるほどね」と一言言ってから、またまた自分の推理を話し始めた。

「彼は別れたくなかったと思うわ」

その言葉の意味がいまいちわからない。だって、別れようと言いだしたのは和真の方だ。

「何か別れざるを得ない理由があった……しかもそれは自分の理由というよりあなたのため。なんて、小説や漫画の読みすぎかしら」

最後はちよつと自信がなさそうになったが、もし本当に里緒奈さんの言うように別れざるを得なかったのなら、和真のあの言葉も理解できる。でも、その理由を今聞いて何になるのだろう。

「そうね、あの時こうだったら、こうしていれば……そう思っても、過去は戻って来ないものね。だから、元カレのことを考えるのもいいけど、今の自分の気持ちを見失わないようにしないとね」  
「はい」

それから一時間くらい話をして、私は日向家を後にした。もちろん、今度はちゃんと先輩に送ってもらって帰ることになった。

「人様のお宅のお嬢さんなんだから、しっかり送るのよ」

「はいはい・・・」

「じゃあね、陽菜ちゃん。またいつでも来て！これ、私のアドレス。いつでも連絡してね」

「ありがとうございます。お姉ちゃんができたみたいで楽しかったです。じゃあ、おやすみなさい」

里緒奈さんは私たちが見えなくなるまで、玄関の前で見送ってくれた。

## 距離（1）

今の自分の気持ちに正直に。とはよく言うものの、傷つきたくないというものまた正直な気持ち。臆病な私はまだ自分の想いを告げることができない。

「今日はバイクじゃないんですね」

「ああ。もう遅いし、近くだしな」

つつい、当たり前障りのない会話を選んでしまう。里緒奈さんがいた時はよかつたけれど、2人になると気まずい。その気まずさの理由は昼間の和真の一件。先輩は和真に何を言われたのだろう。

「乾に何を言われた？」

「はいっ!？」

自分の考えていたことを、先輩に言われて思わず大きな声を出してしまった。すれ違う人も驚いて振り返ってしまう。そんな人たちにすみませんと頭を下げると、私は声のボリュームを落として言った。

「そういう先輩こそ、和真になんて言われたんですか？」

「・・・」

この状況を探り合い・・・というのだろう。そのまましばらくはどちらも口を開くことはなかった。こんな状態のまま、とうとう私の家が見えるところまで来てしまった。そこで、ついに諦めたのか痺れを切らしたのか、先輩が口を開いた。

「陽菜は乾のことをどう思っているんだ？」

その質問は今日の昼間にも聞かれた質問だ。そして、私は「何とも思っていない」と答えたはずだ。2度も同じ質問をするということとは、先輩は私の言葉を信じていないということ。そして、私がまだ和真を好きだと思っっているということ。そう思ったら、悲しみと同時に怒りが込み上げてきた。

「先輩は・・・それを聞いてどうするんですか？和真の気持ちを聞いたんでしょう？それならまた付き合えばいいと思っただんですか？」

「陽菜・・・？」

「和真のことは好きです。でも、それは恋愛対象としてじゃないんです。何回も言ってるのに、どうして信じてくれないんですか？」

「いや、別に信じてないわけじゃ・・・」

「信じてないから何回も聞くんでしょう？私は先輩が好きなんです！」

自分で発したはずの言葉に自分で驚いた。やってしまった。つい勢いに任せて言ってしまった。そして言ってしまったから深く後悔した。こんなところで、こんなシチュエーションで言うことじゃなかったのに。先輩も、目を丸くして硬直している。

そんな先輩の姿を見て、私は急に我に返った。お互いに視線を外せないまましばらく時間が過ぎる。と、先輩が口を開こうとする。でも、今の私には無理！ここは・・・逃げるしかない！

「ひ・・・」

「あ、家もうここなので！さよならっ！」

「え、っおい！」

先輩の呼び止める声も聞こえないふりをして、私はその場を立ち去った。

「おかえり……って、その服日向のか？」

「だから何！？コーヒーこぼしたから借りただけ！文句ある！？」

「いや……」

あからさまに怪訝そうな表情を浮かべたお兄ちゃん。そんなお兄ちゃんの追及を大人しく受ける心の余裕が今はないので、事実を簡潔に述べて足早に自室へと向かった。ベッドに体を放り出し、そして後悔した。なんであそこで言ってしまったのだろう。

「もう先輩と顔合わせられないよ……」

そう呟いた時、部屋をノックする音が聞こえた。起き上がるのが怠くて、無視しようかとも思ったが、再びノックされたので仕方なくベットから降りてドアを開ける。

「陽菜？ケータイ返す」

「はあい……」

ドアの外にいたのは陽翔。陽翔は私の表情を見て一瞬眉間に皺を寄せたが、次の瞬間にはまた柔らかな表情に戻って私の額に手を当てた。

「具合でも悪い？」

「うつん、そんなことないよ。今日ゆうくん寝かせてくれたんだよね。ありがとう」

「別にいいよ。なんかあったら言え」

「ん。ありがとうね」

陽翔はそれ以上何も言わずにそのまま自室に戻っていった。これではどっちが年上なのかわからない。

受け取ったケータイを見てみると、たくさんのメールや着信が来ていた。葵からであったり、別の友達からであったり。急ぎの要件がないことを確認するとそのまま電源を切った。

「お兄ちゃん、送って？」

「……んあ？」

起きてきたお兄ちゃんに、おはようを言うより先にそう言った。まだ寝ぼけているお兄ちゃんは、変な声だけ出して私の頭をよしよしと撫でた。通じていない……。

「ね、聞こえた？今日送ってほしいなあ？」

「珍しい」

「ちよつとね、足が痛い。だから歩くのが辛いんだ」

なんて見え透いた嘘をついてみたり。寝起きでテンションの低いお兄ちゃんはジッと私を見て何かを考えている様だったけど、そのうち「わかった」と言って洗面所に向かった。ほつとして再びフライパンに向かうと、今度は後ろから声がかかった。

「今日は早く帰れるんでしょ？」

「え？」

振り返ると、お兄ちゃんとは違って目覚めすっきりな陽翔が立っ

ていた。

「だって、確か今日の放課後は日向さんの都合が悪くて勉強ないんだよね」

「あ、ああ・・・そうね」

動揺を悟られないように必死で平静を装う。勘のいい陽翔には無駄なことかもしれないが、それでも隠しておけるなら隠しておきたい。

「大翔に迎えに行ってもらって」

「え、どうして?」

「今日は・・・陽菜、誕生日でしょ?」

「・・・!」

さっと血の気が引くような感覚がして、足から力が抜けていく。立っていられなくなって倒れそうになる私を、陽翔がすんでのこるで支えてくれた。焦げるベーコンも、床に散らばった菜箸も何もかも視界から消える。目の前が真っ暗になってガタガタと全身に震えが走る。五感全てが遮断されているようだ。

「陽菜、落ち着いて!」

「おい陽菜! つ陽翔! てめえ何やってんだ!」

「・・・っ!」

騒ぎに気が付いてお兄ちゃんも駆け付けたりらしいけど、私の目には入らない。2人の会話もただの雑音にしか聞こえない。耳障りなノイズだけが頭の中で響いている。陽翔にしがみ付いている腕も、まだ小刻みに震えている。



『誕生日おめでとう』

言われれば嬉しいはずの言葉なのに、思い出すだけで背筋が凍りつく。忘れたと思っていたのに、未だ私は逃れられていない。

「……な……陽菜！」

「あ……」

ようやく、現実引き戻される。しばらく呼びかけていてくれたのだろうか、私が2人の呼びかけに反応したことで少しほっとしたような表情になった。私自身、ほっとした。

「大丈夫か？」

「平気……」

とは言いつつも、陽翔に支えられていないと立っていられない。支えている陽翔はもちろんのこと、大丈夫かと尋ねてきたお兄ちゃんも気が付いているだろう。それでも、私が落ち着きを取り戻したことで2人も胸を撫で下ろした。

「ちょっと休め。朝飯は俺が作るから」

お兄ちゃんはすっかり焦げて真っ黒になったベーコンを捨てて、冷蔵庫からウインナーを取り出した。私はそのまま陽翔に抱っこされてリビングのソファに連れて行かれる。

「ごめん」

「いいよ、気にしないで？でも……ちょっと手、握ってて……」

申し訳なさそうに謝る陽翔。陽翔が悪いわけじゃないんだよ。悪

いのは全部・・・

「今日は休むか？」

わざわざ私のためにリビングまで朝食を持ってきてくれたお兄ちゃんと言った。私はふるふると首を横に振る。

「でも・・・陽菜、立てる？」

「もう少し経てば・・・」

「無理すんな。今日は一日家にいろよ」

「でもテスト前だし、何かあるって決まったわけじゃないし」

「テストも大事だけど、自分の身の安全の方が大事！それに出かけて何かあるよりも、出かけないで何もなかった方がいい。『君子危うきに近寄らず』だ。ということで今日は欠席！決定」

有無を言わさないお兄ちゃん。陽翔も私の手をぎゅっと握りながらうんうんと頷く。でも、正直私も今日だけはちょっと自信がなかったし、不安だった。結果的に陽翔に思い出させてもらってよかったのかもしれない。うっかり誕生日だということを忘れて出かけたらと思うと、ぞっとする。

そしてそれと同時に、先輩と顔を合わせなくてよいということにも安堵する自分がいた。

## 距離(2)

『やっぱり、そうかと思ったよ。今日は家にいた方がいいね。学校の帰りに修也と陽菜の家に寄るよ。ノートも任せろ！HAPPY BIRTHDAY』

葵からの返信を見て、ふっと笑顔になった。葵は私のことをよくわかっていてくれるから、すべてを言わなくてもわかってくれる。そんな葵の存在は、私にとってとても大きなものだ。

「なっちゃん、僕今日は早く帰ってくるからね。待っててね」

「うん、いつてらっしゃい」

「いつてきます！」

私が風邪を引いて学校を休むと思っているゆうくんは、とても心配してくれて、7月だというのに私に毛布を持ってきてくれた。優しいなあ。

今日はお兄ちゃんがちょっと早めにゆうくんを保育園に送って行き、より学校に近くて長く家にいることができる陽翔が私と残った。そして遅刻ギリギリに出かけて行った。できるだけ私を1人にしないように、という気遣いなのだろう。

みんなが出かけた家の中は、シンとしていて少し恐ろしい。見慣れた家のはずなのに、今日だけは不気味に映ってしまう。よく晴れた初夏の朝なのに、ちっとも気分は晴れない。

1年前の誕生日のことは、今思い出しても震えが止まらなくなってしまう。あの時は幸いにも何とか自力で助けを呼んで事なきを得

た。だけど・・・

『誕生日おめでとう。この記念すべき日に一緒に死のう』

この時の言葉が今も忘れられない。1年経った今も・・・。

「いけない、暗い気分になっちゃった。あの時だって結局無事だったし、その前だって・・・」

じつとしていると嫌な事ばかり考えてしまう。勉強でもしようかと思ったけれど、どうにもそんな気分になれないので、溜まっていた家事をすることにした。夏は洗濯物が多いから、すぐに溜まってしまうのだ。

そして、暗い気分を少しでも盛り上げようとお菓子を作ることにした。誕生日だしケーキ・・・とも思ったが、材料がなかったのでクッキーにすることにした。私を作るお菓子の中で、みんなに1番好評なのがクッキーなのだ。特にレモンクッキーは大好評だった。

冷蔵庫にレモンがあることを確認するが、作るのはみんなが返ってくる直前の方がいいだろうと思いき、結局家事の後は勉強に取りかかることにした。

ふと気が付くと、私はリビングのテーブルに突っ伏して眠っていたらしい。昨日はあまりよく眠れなかったからだろうか。お昼を済ませてお腹がいっぱいになったらついつい眠ってしまった。

時間を確かめようとケータイを手に取ると、時計よりも先にメー

ルの受信を知らせるランプがチカチカしているのが目に入った。受信ボックスを確認すると、メールが数件入っていた。

一件目は葵。16時頃に家に来るとい内容だった。二件目はお兄ちゃん。無事か、困っていることはないか、という内容。三通目の陽翔も同様。

四通目は和真。『HAPPY BIRTHDAY 何かあったらいつでも呼べ』というメールだった。和真は1年前の誕生日、自分と別れた後にあの事件が起こったことを未だに気にしてくれているのかもしれない。むしろ、感謝しなければならぬのに、その前の事件で私が無事だったのは和真のお蔭なのだから。まあフラれた後はそんなことも忘れて、和真に怒りをぶつけていたけどね。

最後は日向先輩だった。

『話が見たい。連絡待ってる。それと、山本から聞いた。HAPPY BIRTHDAY』

用件のみの簡単な文章だったけど、どうしようもなく嬉しかった。和真のメールを見た時は心が温かくなったが、それとはまた違った感覚。やっぱり、私は先輩が好き。

でも、好きだから余計に怖い。『最後通告』をされたら・・・、それこそしばらく立ち直れないかもしれない。

結局、先輩のメールにだけ返事を出せなかった。はいともいいえとも言えず、ただ逃げる私。そんなの良くないってわかっているけど、踏み出せない。弱いな、私。

先輩以外へのメールの返信を終え、時間を確認するともう昼の2時過ぎだ。そろそろクッキーをつくり始めようと思いい立ち上がると、郵便屋さんがちょうど来たので、先に玄関の先にあるポストへ向かうことにした。

玄関のドアを開けて思った。暑い。今日はいいい天気で、日差しも強い。玄関から一歩外に出ただけで汗ばむくらいだ。

ポストの手紙を確認して玄関に戻る。やっぱり家の中は涼しい。手紙はダイレクトメールがほとんどだったけれど、1通だけ差出人の名前も、消印もない私宛の手紙があった。不審に思ったが、気になっけて開けてみる。

「ひっ……！」

開けて、そして後悔した。この手紙は間違いなく、1年前と同じ……。この近くにいたの？でも、そんなはずはない。手紙を破り捨てて玄関の鍵をかけ、窓は鍵を確認するとカーテンも閉める。

そしてただひたすらに膝を抱えて震えるしかなかった。思い出される恐怖で、体が動かない。外からの物音ですら恐ろしい。

早く、早く誰か帰って来て……。そう願っても今の時刻はまだ午後2時半。1番早いと思われる陽翔でもあと1、2時間はかかるはずだ。

怖い、怖い、怖い……。あの不気味な笑みと、肌にあたる冷たい感触が蘇ってくる。

ピンポーン

チャイムと同時に、すべての音が遮断された。チャイムは1回しかなくなってはいるはずなのに、頭の中では何回も何回も繰り返し鳴っている。幻聴だとわかっていても恐怖が勝つてどうすることもできない。頭の中はチャイムの音でいっぱいだ。さっきまで煩いくらいだった外の物音すら聞こえない。

しばらくその状態が続いたが、私の頭の中で鳴っていたチャイムは次の瞬間に一瞬にして鳴りやんだ。

ドンドンドン！

今度はドアを叩く音。それもノックとかいうレベルではない。明らかに強く力を込めて、威嚇するように叩いている。

・・・いる。玄関の前に、あの男がいる。疑惑は確信に変わった。逃げる場所は家の中だけ。もし、玄関を破られたら・・・？どうすればいい？窓から逃げようか。いや、窓から出ても玄関から丸見えだ。

考えている間もドアを叩く音は続く。今度は幻聴なんかじゃない。徐々に強くなっていくその音は、否応にも私を追い詰める。

とにかく1階にはいたくない。私は音を立てないように、だけど急いで階段を駆け上がる。しかしその途中・・・

「きゃあっ！」

急ぐあまり躓いて、階段で転んでしまった。幸いにも脛を打っただけだったのだが、大きな音と、声を出してしまった。

その瞬間、ドアを叩く音が止まった。そして、ドンドンドンドンドンドンドンドン！と、ドアが壊れるのではないかと思うくらいの勢いで叩き始めた。

どうしよう、家にいることがバレた。おそらく薄々は勘づいていたのだろうが、今の物音で私が家の中にいるということを確認したのだろう。

もう家の中にはいたくない。あの様子では、玄関を破って入ってくるかもしれない。あいつならドアを壊したりピッキングしたりするくらい平気でしそうだ。

「……逃げよう」

もう形振りなんて構っていられない。ケータイだけを持って、私は自室のベランダから屋根に下りる。屋根伝いに玄関と反対方向に行けば大きな木があって、下に下りることができるのだ。逆に言えば入ることも可能なのだが……。

あいつに気付かれないように、そっと木から下りる。この辺は元々人通りが少ない場所だし、共働きの核家族が多いため、外に人は見当たらない。だからこそ白昼堂々あんな行動がとれるわけだが。

木から下りたところで道に出なければ逃げられない。道に出るには男のいると思われる玄関の横を通り過ぎなければならぬ。息を潜めてそっと様子を窺う。玄関には背の高い男の影。それを見た瞬間に震えが起こるが、それで躊躇してはいられない。

意を決して飛び出す。途中までは上手くいったと思った。でも、



自分が靴を履いていないということをもっと気にしていなければいけなかった。

「痛っ・・・」

木の枝を踏んで足の裏から血が出てしまったのだ。思わず出てしまった声は囁き程度だったので、幸い男には聞こえていない。ほっとして再び歩き出そうとすると、反対の足の下にあった木の枝が思いの外大きな音を立ててパキンと折れたのだ。その瞬間・・・男の視線が私に突き刺さった。

「誕生日おめでとう」

### 距離(3)

ひたすら、どこに向かっているのかもわからずにただ走る。振り返ってはいけない。振り返ったら、きつと足が竦むから。人気のない住宅街に響く2つの足音。それが今の状況を物語る。

息が切れても、足がもつれても、走るのをやめてはいけない。スビードがどんどん落ちているのが自分でもわかる。後ろから聞こえてくる足音もだんだん近づいてくる。

もうダメかもしれない。それでも駅前まで出れば人がいるはずだ。そこまで何とか粘りたい・・・！そう思って頑張っていたら、ぐいと腕を引かれた。

「残念だったね。もう少しで駅だったのに」

にやりと笑う男の顔は、整っているのに目は常人じゃないような、鈍い光を湛えていた。舌なめずりをする姿を見て、ぞくりとひとつ身震いをする。去年も、同じような目を見て恐怖を感じた。2年前からずっと私に付き纏ってきたこの男は、去年の今日、学校帰りの私をいきなりナイフで切りつけた。

『この記念すべき日に一緒に死のう』

そう言ったことを鮮明に覚えている。私は切り付けられた腕を庇いながら必死に人のいるところまで逃げた。残念ながら、その時男はそのまま逃亡し、捕まらなかつたのだ。その後、私が高校に入学してから捕まつたと聞いたのに・・・。

「放してっ！」

「放したら逃げるでしょ？」

「あたりまえじゃない！」

男は何かを私の首に突きつけた。それは覚えのある感覚。見なくてもなんだかわかる。

「あなた、捕まったって聞いたんだけど？」

「そんなの俺が流したデマに決まってる。今日はあの男はいないのか？まあいないだろうな。そういう約束だ」

「和真のこと・・・？約束って何よ」

「さてね・・・さ、今日という日を待っていたんだ。この数か月は俺が捕まったと思って平和に過ごしただろう？我慢したんだぞ。この日のために・・・」

狂ってる・・・この人には何を言っても無駄だ。助けを呼ばなければ、そう思っただけ息を吸い込み大声を出そうとするも、それを察した男の手で口を塞がれる。

「ダメだよ。俺の車はこの近くなんだ、そこまで大人しくしてくれなないと、陽菜の白い肌に赤い刺繍ができるかもね」

ぐつと突きつけられる銀色の鋭い刃先が目に入り、大きく吸い込んだ息を飲む。その姿に男は満足したようで、不敵な笑みを浮かべた。

家から出なければよかった。そう思っただけでもう後の祭りだ。この時間ではここを通りかかる人も滅多にいない。しかも私の姿は大柄な男とブロック塀に挟まれて、道行く人からは見えていない。

「ひゃあっ!」

いきなり、男が私の首筋に舌を這わせる。下から上へと上る舌の動きに合わせて、鳥肌が全身に立つ。気持ちが悪い。

「ずっとこうしたかったんだ。後でもっと気持ちのいいことをしてあげるからね?」

「ひっ!いや、絶対嫌だって!放してよお!」

「うるさいな、痛くしないとわからない?」

次の瞬間、ちくりとした痛みと共に何か首筋を伝う感触が私を襲った。そこに手を伸ばしてみると、手に付いたのは紛れもない血。そうとわかると、じくじくとナイフの先が刺さった場所が痛み始める。

「白い首筋に赤い血・・・映えるねえ」

不可解な言葉を呟きながら男は再び私のうなじに口づけて舌を這わせ始めた。もう、このまま連れて行かれるのかもしれない。そう思った。

「うぐっ・・・!」

突然、男による拘束が解かれた。何が起こったのかさっぱりわからないが、とにかく男と距離を取るために2、3歩その場から離れて振り返る。そこにいたのは、ここにいるはずのない人物だった。

男はその人物に殴られて地面に這いつくばっている。余程の力だったのだろう、まだ男は立ち上がれないようだ。

「てめえか。何回も何回も懲りずに陽菜の前に現れるストーカー野郎ってのは」

「っ・・・誰だ？」

「てめえに名乗る名前なんてねえんだよ」

気が付くと、いつの間にか呼んだのかパトカーが到着していた。男は駆け付けた警察官に現行犯で連行されていった。

「どうしてここに・・・？」

「お前んち行く途中」

「なんで・・・」

「お前が昨日言い逃げしてメールの返事もよこさねえからだよ」

日向先輩は私の首の傷の手当てをしながら、まだちよつと怒ったように答えた。そんな先輩の姿を見て、声を聴いて、触れられて、安心した私は思わず先輩に抱き着いて泣いてしまった。

そんな私を、先輩は小さい子どもにするように、よしよしと頭を撫でながら抱きしめてくれた。しばらく涙が止まらなくて、しがみついたまま泣き続けた。

ようやく落ち着いて、私が先輩の胸から顔を放すと、そのまま抱き上げられた。驚いて軽く抗議するも、「裸足」という理由で下してもらえなかった。

「送る」

言葉少なに、先輩はうちに向かって歩き始めた。先輩には聞きたいことがたくさんある。どうしてあの男がストーカーだって知っていたのか、そして、私に会って話したかったことの内容は何なのか。

「いつぺんに聞くなよ・・・まず一つ目は、乾に聞いたから」  
「和真に・・・？」

昨日、和真と先輩が話していた内容は、これだったのか。そのことにも驚いたが、先輩から聞かされた事実の方が私を驚かせた。

「それ・・・本当ですか・・・？」  
「ああ・・・」

先輩が和真から聞いたこと。それは私と和真が別れた本当の理由。

「あいつはさっきの男に脅されてたんだよ。あの変態は乾と陽菜が別れば陽菜にもう付き纏わないって言ったんだ。当然乾は信じなかった。だけど、この要求を呑まないと強硬手段に出ると言われて渋々受け入れたんだと」

さっき男が言っていた『約束』とはこのことだったのか。そうとは知らずに私はずっと和真を恨んでた・・・和真は私のことを思っ  
て離れていったのに・・・。

「乾は男が捕まったという話を聞いて、また陽菜とやり直したいって言っていた。ま、捕まったってのはデマだったみたいだがな」

和真は、ずっと私を想ってくれていた。でも、私のためにそれを封印して突き放した。私はそれを知らないで、和真を恨んで、でも再会したら憎めなくて、やっぱり大切な人で、失いたくない人で・・・。

「和真は・・・あの男から何度も守ってくれて、私のために何度も

怪我をするような優しい人なんです。今でも大切な人で、彼がいなかったら今の私はいないし、こんなに笑ってなかったと思います」

和真は私にとってかけがえのない人。だけど・・・

「好きなんです・・・どうしても、先輩の事が好きなんです・・・でも、そんなこと言ったら和真に・・・」

「悪いなんて言っただけほしくないね」

なんてお約束な展開なんだろう。私の言葉を遮った声の主を振り返ると、乾和真その人が不機嫌そうな表情で立っていた。

「あいつのことを黙ってたのは俺だし、俺が勝手にやったことだ。それに、同情や義理なんかで付き合ってもらっても嬉しくないし、俺のせいで恋愛ができないなんて言われたくないんだよ」

和真はそう言い終わると、ふっと笑ってつかつかと私の前に歩いてきた。そして、小さな包みを私に手渡す。

「HAPPY BIRTHDAY。去年の今日、あいつのせいで渡せなかったプレゼント。あの日の俺からと思って受け取って」

それだけ言うと、和真は引き止める私の声も聞こえないかのように去って行った。去年のプレゼントは、私がずっとお店の前を通るたびに可愛いと連呼していたプレスレットだった。

ごめんね和真・・・ありがとう。

溢れ出す涙を拭うこともせず、声を抑えることもせず、私は家に着くまで泣き続けた。そんな私を慰めるでもなく、先輩もまた黙っ

て歩き続けた。



距離(4)(前書き)

なかなかスムーズな更新ができずにすみません・・・。

## 距離（４）

「着いたぞ」

家に着いたはいいが、私は鍵を持ってきていないことによつやく気付いた。出てくるときは２階の窓から、ケータイだけを持って出てきたのだ。必死すぎて鍵まで頭が回らなかった。

「お前の部屋まで、どうやって行けばいい？」

先輩は私の部屋の窓を確認すると木をひよいひよいと登って屋根に下り、私の部屋に入っていった。そして、中から玄関の鍵を開けてくれ、私を再び抱き上げてリビングのソファに座らせると、汚れた足を拭いてくれた。なんだかお嬢様みたいで、ちょっと恥ずかしい。

「すみません」

「謝るな。もうすぐ三崎たちも帰ってくるんだろ？それまでにその顔どうにかしておけ」

泣きすぎて真っ赤な目をした私を見てそう言つと、先輩は帰ろうと立ち上がった。私はそんな先輩の制服の裾を、思わずギュツと掴む。今この手を放したら、先輩は戻って来ない。そんな気がしたから。

「どうした？」

「・・・まだ二つ目の答えを聞いていません・・・」

先輩の言いたかったこと、それは？聞くのは怖いけど、今聞かな

かつたらきつと次の機会は訪れない。

しばらく先輩は無表情のまま私をじつと見つめ続けた。私も、負けずに先輩を半ば睨むかのように見つめた。そして、この気まずい状態がいつまで続くのだろうと、心が折れかけた時だった。

先輩の顔が近づいてきたと思ったなら、目を瞑る暇もなく口づけられた。それは一瞬だけのキスだった。先輩は唇を離し、私の顔を見た途端にふつと笑った。

「マヌケな顔」

「なっ……」

今の流れでそれ！？言葉が出なくて、口をパクパクさせていると、玄関のドアが開く音がした。

「ただい……ま……」

陽翔は『ただいま』の『ま』の部分で先輩を認識すると、あからさまに嫌そうな顔をしてこちらに近づいてきた。そして、私と先輩の間に割って入ると、私の首の傷を見て先輩を睨みつけた。

「これ、どづいつこと?」

その口調はとても冷たくて、今にも胸倉に掴みかかっていくのではないかという怒気を含んでいる。大抵の人ならば怯んでしまうのかも知れないが、それに動じるような相手ではない。

「俺も全部を知ってるわけじゃねえ。これから聞くんだよ」

そういえば、先輩にも詳しく話してはいなかった。ということ、私は家から逃げることになった経緯や追いかけられたこと、捕まっていたからのやり取りなどを話して聞かせた。

自分でもかなり支離滅裂だったと思う。落ち着いてきたと思っても、やっぱりまだ少し恐怖が残っていて、話している最中にも手が震えた。それでも、2人は黙って私の話を聞いてくれた。

話が進むにつれて、私だけじゃなくて2人の表情も強張ってきているのがわかった。私を感じている恐怖や嫌悪感をわかってきているのだと思うと、それだけでも少しは救われた気がする。

「・・・助かった」

私の話を聞き終えた陽翔がぼつりと言った。それは私に向けられたものではなく、日向先輩に向けての言葉だった。

「別に、お前に礼を言われることでもない」

その返事に少しムツとした様子だったけれど、それでも陽翔は先程までの先輩に対する態度を軟化させた。

あの男のこととなると、当の本人よりも過敏に反応し、怒りと憎悪を露わにする陽翔。今回、その男を警察に引き渡すという悲願を達成してくれたことで、日向先輩への見方が変わったのだろうか。もっとも、まだ顔を合わせてから対して時間も経っていない2人の事だから、案外気が合ったりするのかもしれない。

人と人との関係って不思議だ。私だって、今日の事件がなかったら、まだ先輩と顔すら合わせてなかったかもしれないのに。今日は

私も学校を休んでいたし、学校に行っていたとしても今日は先輩の都合が悪くて放課後の勉強会はなかったのだし……

ん？放課後の勉強会がない……？

「せつ、先輩！今日何か用事があったんじゃない？」  
「ん？」

突然何を言い出した、とでも言いたそうな顔をして、日向先輩が私を見た。余裕みただけで、用事はいいのだろうか。そう先輩に問うと、先輩は今思い出したかのように言った。

「そういえばバイトだったな」

「ばっ……！いいんですか？なんか巻き込んでしまってますみません……」

きっと先輩は私に話をしたらすぐにバイトに向かうはずだったんだ。なのに、あんな事件に巻き込んでしまって……

申し訳なく思っただけで俯いていたら、先輩がポンポンと私の頭を軽く撫でるように叩いた。

「お前が気にすることじゃねえ。元々夜からのバイトなんだよ。早く行ってやってるのはボランティア」

とはいえ、バイト先の人は先輩が来てくれると思って待っていたのだと思うと、やはり申し訳ない。

「……まったく、気にすんなって言うっても無理か？だったら今度俺のバイト先に来いよ。お前の事話したらマスターがやたら会わせる

つてうるさいんだよ。今度連れて行くつて言えば今日の事も笑つて済ましてくれるだろ」

「何？変な店に陽菜連れて行くなよ？」

「どんなイメージだよ、お前の中の俺は・・・そんなこと言うなら今日これから、お前らも来るか？」

「結翔を連れて行けるようなお店？」

「陽菜、お前もどんなイメージだ・・・」

呆れた顔で私たち姉弟を見る先輩。だって、先輩がファミレスでバイトしている姿なんて思い浮かばないんだもん。どう考えてもムードのあるお洒落なバーとかクラブを想像してしまう。

私たちの心の内を読んだのであろう先輩は、わざとらしく大きく溜息をついた時、玄関のドアが開いてバタバタとこちらに向かつてくる足音が聞こえた。

「ただいまー！あ、いっくーん！」

ゆうくんは先輩を見るなり、私や陽翔を完全にシカトして先輩に抱き着いた。後からゆうくんの鞆や帽子を拾いながらやってきたお兄ちゃんは、先輩を見ると何かを察したのか、陽翔と私を見て、目で何があったのかを尋ねた。

お兄ちゃんは私と陽翔が話す今日の出来事を、眉間に皺を寄せながら聞いていた。そして話をすべて聞き終わると、陽翔と同じように先輩に対してお礼を言った。それに対しても先輩はやはりクールな対応だった。

「それでね、先輩今日バイトだったのに、私のせいで遅刻させちゃったの。だからその代わりにみんな先輩のバイトしているお店に

来てくれないかって」

「行きたい！いつくんのお店、行きたい！」

「……結翔連れて行ってもいいのか？」

「……似た者兄弟め……問題ない」

こうして、私たちは先輩のバイトするお店にお邪魔することにした。何のお店なのかはわからなかったけど、お兄ちゃんはお店の名前と場所を聞いてピンときたみたい。

「行くなら早い時間の方がいいだろ？」

「18時過ぎるとまずいな」

「じゃあ今から行くか。大丈夫か？」

「ああ。俺は先に行ってる」

「了解」

そう言うと、先輩はさっさとバイトに向かってしまった。訳も分からない3人（うち1人ははしゃいでいるだけ）は、唯一すべてをわかっているお兄ちゃんをじっと見た。でも、お兄ちゃんが素直に教えてくれるわけもなく。

「着替えたら行くぞ」

とだけ言うと自分も着替えるために自室に戻って行ってしまった。

「美味しい！」

4人で訪れたのは大通りから少し脇道に入ったところにある小さな、でも雰囲気のある喫茶店だった。

「いやあ、噂の陽菜ちゃんが見られるなんて嬉しいねえ」  
「マスター、このパスタ美味しいです！何の香りだろう・・・」  
「一樹が渋るのもわかるよ。こんなに可愛い子、うちの奴らになんて見せたくない。うん、今日連れて来て正解だ。お兄さんと弟さん？彼らも一緒ならなお安心だしな」

まったく会話が噛み合わないが、カウンターの途中でニコニコしながら饒舌にしゃべっているのがこのお店のマスターだ。年は40歳くらいだろうか、ワイルドなんだけど温厚そうな、とても人当たりのよい男性だった。しかもかっこいい！

「でも大翔と一樹が知り合いだったのも驚いたが、噂の陽菜ちゃんとお兄さんが兄妹だったってことも吃驚だ」

「俺も、この店で日向がバイトしてるなんて知らなかった」  
「うまいタイミングですれ違ってたんだな。もっとも、夜なんて同じ空間にいてもわかんねえか」

豪快に笑うマスター。このお店、昼間は喫茶店だけど、夜になるとお洒落なバーになるんだって。イメージ通りじゃない。ちなみに先輩は夜のバーでバイトをしている。もちろん、高校生だったことは内緒にしてね。

「こいつがいると客の入りがいいんだよ。特に夜の方ね。最近は昼間のバイトさんが辞めちゃって、無理言っ入ってもらってたんだよ。でも、やっぱり一樹がいると昼でも客の入りが違っね」

「そう言っ俺をこき使っんだな」  
「重宝してんだよ、一樹クン？」

あの先輩が、マスターの前では掌で転がされているよう。また新



たな一面が見られた。そう嬉しく思う一方で、私の頭の中にはずつとさっきのキスが頭の中を過っていた。あのキスは何？ただの悪戯？

## 距離（5）

あの日から、先輩が・・・変。いままでほとんど1年生の教室に  
なんて姿を現さなかったのに、最近では2日に1度は私のクラスに  
顔を出す。それも大した用事があるわけじゃないのに。

この出来事に驚いたのは私だけじゃなくて、葵をはじめとしたク  
ラスメイトも私以上に驚愕した。初めて先輩が教室に顔を出した時、  
一瞬教室の時間が止まったのは決して勘違いじゃない。

幸いにも、うちのクラスの女の子はみんな温和で、一部のファン  
みたいに嫉妬に狂って攻撃的になるということはない。むしろみん  
な私と先輩の關係に興味津々で、根掘り葉掘り聞きだそうと私の周  
りに集まってくる始末。それはそれで大変なんだけど・・・。

この日も、曖昧な返事を繰り返す私を質問攻めにしてくるクラス  
メイトを振り払い、葵と共に屋上に向かう。昼休みに屋上に行くこ  
とが私たちの日課となっているのだ。

「でも、もう暑くて屋上もキツイね」  
「ホント・・・」

夏休みの近いこの時期、日差しの強さや紫外線を気にして屋上に  
は人が少なくなる。初めは「空いてきていいね」なんて言っていた  
私たちもそろそろ別の場所を探そうか、と思い始めてきた。

「でも、教室にいと周りがつるさいのよね」  
「ごめん・・・」

「別に陽菜が謝ることじゃないでしょ？人目も憚らずうちのクラス

に顔を出す先輩に問題があるんだって・・・そもそも何で急に？」  
「さあ・・・」

葵にはあの日の大まかな事は話してある。だけど、キスされたことは話していない。だって、恥ずかしいじゃない？

「絶対何かあったと思うんだけどなあ。だって、陽菜が思わず告白しちゃって、その直後に先輩から『話がしたい』のメール。さらにバイトを差し置いて陽菜のところに行き、危ない所を助けてもらう。で、その次の日から陽菜にだけだけど、劇的に変わった先輩の態度。なんかあったとしか思えないんだけど？」

葵の分析は本当によく的を射ていると思う。昔からそうだけど、葵に隠し事をできたためしがないのだ。何も言わないのに、私の心を読んでいるかのよう。

「まあ今言いたくないんなら無理に聞かないけど。でも今度聞かせてもらいますから、ね！日向先輩！」  
「え!？」

葵が急に屋上の一角を見て叫ぶ。私もつられてそちらを見ると、日向先輩が姿を現した。どういふことか意味が分からず、目を白黒させる私を尻目に、葵はにっと笑って、先輩と一言二言話した後、屋上を去って行った。

「ここは暑いな。場所変えるぞ」

そう言って腕を取られて、屋上から連れて来られたのは旧生徒会室。そういえばテストが終わったので、この部屋に来るのも久しぶりかもしれない。

「悪いな、最近忙しくて・・・もっと早くに話そうと思ってたんだが」

「いえ・・・」

話・・・というところの話の続きだろうか。あの時は陽翔が帰ってきたので、キスの真相を聞くこともできなかったし、それ以上の話をすることもできなかった。気にはなっても、もうその話題を口にする勇氣もなく、ずるずるとここまで来てしまったのが現実。でもずっともやもやした気持ちを抱えていた。もしかして、先輩も同じだった？

「俺が言いたいこと、わかるか？」

期待と不安が胸の中をぐるぐると渦巻く。私の心の中にあるのは予想じゃなくて願望だ。だから、口に出すなんて怖くてできない。

相当顔を顰めていたのだろうか、それとももっと変な顔をしているのだろうか。先輩が真剣な顔を少し緩めて、私の頬に触れた。

「お前の期待に応えてやるよ」

「え？」

すると、先輩の顔がそのまま近づいてきて唇が塞がれる。今度は前の触れるだけのキスとは違って、息が苦しくなるくらいの長く濃厚なキスだった。

「んっ・・・」

思わず声が漏れる。それが自分のものではないようで、余計に冷

静さを失っていくみたい。だんだん体の力が抜けてきたところで、ようやく先輩の唇が離れた。

「好きだ」

息が上がって朦朧とする意識の中、先輩の声だけが頭に響く。幻聴？ そう思ったら、先輩がデコピン。い、痛いです……

「夢じゃねえからな。ちゃんと覚えてる」

ちょっと照れたような、ぶっきらぼうなもの言い方が、逆に現実だと実感させる。でも、やっぱり信じられない。先輩は特定の女性を決めることを何より嫌がったはずだ。

「信じられねえって顔すんじゃないよ。まあ今までの俺を見てれば信じられねえか。でも、自分から好きだって言ったことなんて初めてなんだ」

「初めて？」

「ああ……これ以上言わずな」

どうしよう、夢じゃないんだ。夢じゃなく、先輩が私のことを好きだって言ってくれた。私の告白を、受け取ってくれたってこと？ そう聞くと、先輩は首を横に振った。

「違う。返事じゃなく、俺から言ったんだ。好きです。俺と付き合い合ってくれませんか？」

何が違うのかいまいち意味が分からなかったけど、改まって言われるとすごくドキドキする。敬語、敬語だよ？先輩が、私に……。真剣な想いが伝わってきて、声が震えそう。

「はい。私も、大好きです」

私の返事を聞いて、瞬殺されるんじゃないかと思うくらいの笑顔  
を浮かべた先輩は、ギョツと私を引き寄せて抱きしめた。先輩の鼓  
動が聞こえてくるのを聞くと、私と同じくらいに速い鼓動に、ちよ  
つとだけ安心する。ドキドキしていたのは、私だけじゃなかったん  
だ。久しぶりに嗅ぐ先輩の香り。とても心地よい、大好きな香り。

「そういえば、何で葵とこんなことを？」

わざわざこんなことをしなくたって、直接私にどこに来て言  
えばいいだけの話だ。

「山本に言われたんだよ」

「葵に何を・・・？」

先輩がちよくちよく私のクラスに顔を出すようになってから、私  
には好奇の目が向けられるようになった。うちのクラスはそれが悪  
意ではないが、一度教室の外に出れば他のクラスの子やお姉さま方  
からの視線が痛かった。

私はそんな視線は気にしていなかったのだけど、葵はそうではな  
かった。すれ違つたたびに私の代わりに怒ってくれたりした。女の子  
たちにだけでなく、日向先輩にも。

『無責任に顔だけ出して、周りの始末もしてってほしいわ！』

なんて怒っていたのだが、怖いもの知らずの葵は部活終わりに日  
向先輩を捕まえて、本人に直接言ったのだそう。それって、先輩が

私のことを何とも想ってなかったら、かなり怖い結果になったと思うんだけど、猪突猛進型の葵は実行したらしい。すごい行動力だ。

そうして現状を聞いた先輩は、葵と共謀して今日、私を呼び出したんだって。私が事前に何も聞かされていなかったのは、ちょっとした悪戯心らしい。

「誰かに何かされたか？」

「いえ。葵が守ってくれたので」

「そうか、妬けるな」

「へっ!？」

先輩ってこんなキャラだったけ?ようやく解放してくれたかと思ったら、今度は後ろから抱きしめられて、うなじにチュッと口づけられた。

「ひあっ!」

「・・・いい反応だな」

くすぐったくて、体を擦る私が面白かったのか、私と先輩の攻防はそれから少しの間続けられた。すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。慌てて離れようとする私を、先輩はどうやっても離してくれなかった。

私の腰に手を回したまま、先輩はドアの方に向かう。もしかして、この姿のまま開けるつもりなんじゃあ・・・

「先輩っ!ちよ、このまま・・・」

「気にするな。どうせ颯太だろ」

「そう言う問題じゃないんですっ!」

私の抗議も虚しく、ドアが開かれた。その向こうには予想通り臯月先輩がこちらを凝視しながら立っていた。恥ずかしくて目を合わせていられないよ……。そう思って目を逸らすと、臯月先輩がちよつと困つたように笑つた。

「いきなり豹変しすぎ。陽菜ちゃん困つてるよ？」

「お前がいなくなればいいんだけどな」

「わああ、まさかのお邪魔虫だった？ だけど陽菜ちゃんもご飯食べないと午後から辛いと思うよ？」

そうだ、私まだお昼ご飯食べてなかつたんだ。思い出した途端にお腹がぐうつと鳴つた。それを聞いて臯月先輩がさらに笑つた。

「ほらね？ 陽菜ちゃんは逃げないんだから、ご飯くらい食べさせてあげなよ」

先輩は渋々私を解放すると、自分もパンを取り出した。

「一樹もまだなんじゃん……」

「うっせーな、午後は休講だから後で食べようと思つてたんだよ」

もしかして、緊張して食べられなかつたりしたのかな、なんて考えながら、お弁当を急いで食べる。だって、午後の授業まであと10分しかないんだもの。

「あ、そういえば陽菜ちゃんのクラス、次の時間自習だつて」

「ふあい？」

「さつき葵ちゃんが言つてたんだ。だから落ち着いたら図書室に来てつて。あ、ゆっくりして来てつて言つてたよ」



それを聞いた先輩は私を見てニヤツと不敵な笑みを浮かべる。

「颯太」

「はいはい。お邪魔虫は退散します。あ、一応言っとくけど、ここは学校だからね？」

「お前と一緒にすんな」

「はいはい」

ひらひらと手を振りながら去っていく皐月先輩。そして再び二人つきりになった私たち。夢のようなランチタイムは、授業が始まる直前まで続いたのだった。

## 距離(5)(後書き)

これにて2章終了です。次回からは3章が始まりますので、お付き合いくださいます。

## 初デート(1)

「どこ行くんだ？」

「え、えーつと、と・・・図書館だよ？」

「ふうん・・・」

「い、いつてきまーす！」

お兄ちゃんの疑わしげな目を半ば無視して、私は家を出た。待ちに待った夏休みは猛暑の連続で、ちよつとバテ気味なんだけど、今日はそんなこと言ってられない。だって、今日は夏休みに入って初めて先輩と会うんだもん。

実は、お互いの想いが通じ合ったあの日から今まで、デートらしいデートなんてしていない。なぜかというと、私は部活、先輩は生徒会と受験対策講義に忙しくて、まさにすれ違いだったのだ。

そしてそのまま夏休みに突入して、先輩は知らないけど私はかなりへこんだのだ。だけど、ようやくお互いに一段落した昨日、先輩からメールがあった。

『明日会える？』

たったの6文字なんだけど、絵文字も何もなく素っ気ないんだけど、ただ何より嬉しいメールだった。

速攻で返事を返すと、近くのコンビニまで迎えに来てもらえることに。どうして家までじゃないかって、まあうるさいのがいっぱいいるからね。

出かけるギリギリまで服を選んでいたんだけど、家を出てからもやっぱり気になる。だって、私服でデートなんてしたことがないんだもん。

悩みつつ、コンビニに着いたらもう先輩のバイクが停まっていた。きつとコンビニの中に入っているのだろう。そう思って中を覗き込むと、窓際の雑誌コーナーで立ち読みをしている、妙に目立つ男性を見つけた。

や、やっぱりい……。見つけた途端に足が止まってしまった。だって、どう見ても、日向先輩の隣には私は相応しくない。私服の先輩はちょっと悪そうなんだけど、けど道行く女の子なら絶対に振り返る……。つまり私の稚拙な表現じゃ上手く言い表せないんだけど、めちゃくちゃかつこいいんだって！

そう言えば好きになる前、まだ知り合ってから大した時間が経ってなかった頃にファミレスで会ったことがある。あの時はバレないかどうかだけしか考えてなかったけど、よく思い出してみればあの時の女の人はすごく大人っぽくて、見るからにお子ちゃまな私とは大違いだった。

どうしよう、先輩に声をかけずらくなってきた。立ち止まって躊躇っていたら、私に気付いた先輩が雑誌を置いてこちらに近づいてきた。うっ……。逃げられない……。

「どうした？」

どうしたもこうしたも、あなたがかつこよすぎて自分の平凡さに落ち込んでいるところですが……。

「行くぞ」

そんな私の心情を知ってか知らずか、先輩はちよつと笑って私の手を握った。その瞬間に、たったそれだけで私の顔は赤くなったと思う。だけど、たったそれだけでさっきまでのもやもやした気持ちはちよつと軽くなった。先輩マジック！

もう私専用となったヘルメットを受け取ると、バイクの後ろに跨る。

「どこに行くんですか？」

初デートだし、ベタなところで動物園とか、水族館とか？いやいや、先輩はそんな子どもっぽいところは行かないかも。映画とか、カフェデートとか・・・うーん、お子ちゃまな私の想像ではこれが限界ですう・・・。

「百面相して何想像してんのか知らないけど、とりあえず昼飯まだる？飯食いに行くぞ」

「はあい」

そっか、ちよつどお昼時だし、まずはご飯だよな。そういえば学校以外で先輩とご飯食べるのも初めてだ。付き合ってるんだから当たり前なんだけど、まだまだ私には新鮮。

お昼ってどこに行くのかな。高校生らしく有名なファーストフード店？それともファミレス？いやいや、先輩はそんな子どもっぽいところに行かないかも。それこそおしゃれなカフェとか、雰囲気の良いレストランとか・・・そんなにお金がないのであまり高級じゃないところ希望ですう・・・。

「また百面相・・・」

ちよつと呆れたような先輩だったけど、目を細めるとハンドルを握ってエンジンをかけた。バイクは晴天の下、風を切って走り抜ける。見慣れた街並みも、どこか違って見えてくるのは先輩と一緒に見ているからなのだろう。

「ここ・・・」

バイクが停まったところは前も一度来たことがある、先輩のバイク先だった。もしかして、バイトの手が足りないからって駆り出された!?

「違う。今日は客」

声に出ていたのか顔に出ていたのかわからないが、先輩は私の考えていたことを即座に否定した。なんだ、今日はお客様なのね。よかった。この料理はとってもおいしかったから、また来たいなっと思っていったんだ。それに値段もリーズナブルだしね。

ドアを開けるとまずクーラーの効いた涼しい空気が私たちを包み込んだ。極楽。外から入ってくるとすごく涼しく感じるけど、温度計を見るとそうでもないことがわかる。女性にとっては冷えすぎなくていいな。

「いらつしゃい、陽菜ちゃん、一樹。言われたもの用意しといたぞ」  
「さんきゅ、マスター」

用意?何か事前に連絡でも入れておいてくれたのだろうか。確か

に、お昼時とあつてお店の中はとっても混雑している。マスターと、バイトさんが2人で忙しく動き回っている。というかこのお店の従業員はイケメンじゃないとできないのかと思うくらいみんなかっこいい。マスターも大人の魅力だし。制服もポイントが高いんだろうな。

「こら、よそ見してんじゃねえ」

ぐいつと頭を掴まれて先輩の方を向かされる。ち、近いです……。

「ほらお前ら、席用意できたから早く行け。入り口でラブシーン見せんよ」

声をかけてきたのはバイトさんの1人だった。明るくて長めの髪が印象的なお兄さん。大学生くらいかな。

「……邪魔すんなよな」

「お兄様に向かって生意気な口のきき方だよな」

「えっ！先輩にお兄さんなんていたんですか！？」

確か先輩には兄弟は里緒奈さんだけだと思ったんだけど、お兄さんもいたの？よく見ても先輩と似ているところが見当たらない。強いて言えば……背の高さ？

「陽菜、似てるところ探しても無駄。こいつは俺とは無関係」

「無関係とは失礼な。未来のお兄様に向かって」

「え……」

と口を開きかけたら、マスターがこのお兄さんに注意しちゃって、

お兄さんは仕事に戻った。未来のお兄様ってどういう意味？

「あいつは姉貴のことをずっと追いかけて回してるだけ。可哀想なことに姉貴には相手にされてないみたいだけど」

席に着くと先輩が教えてくれた。なるほどね、里緒奈さんの事が好きだから未来のお兄様ね。つまり願望か。

「あいつの話なんていいから、飯食おうぜ」

そう言っつてメニューを広げるが、先輩の開いているページはちょっとお高めのコース料理だよ？そういえばこの席もちよっと奥にあつて、手前の喫茶店とはまた違った大人な雰囲気醸し出している。

私が固まっていると、先輩がさっきの自称お兄様を呼んでオーダーしていた。うん、注文じゃない、オーダー。時折「これ食べるか」とか「これは好きか」とか聞いてきたけど、半ば機械的に答えているようなものだった。

オーダーを終えたところでようやく我に返る。

「せ、先輩！ここ・・・なんだか喫茶店じゃないみたいなんですけど・・・」

「だろうな。ここは夜の営業の時にしか開けない部屋だ。夜は手前がバー、奥が予約専用のレストランなんだ」

「そ、そんなところに・・・」

「今日は特別だからな」

特別？今日は何があったかな。初デートだから？いや、高校生の初デートでこんなシチュエーションありえないって。



「特別って？」

「ちよっと遅くなったけどな」

何か企んでいるような先輩は、それ以上は教えてくれなかった。

## 初デート(2)

食事を終わると、先輩は満足そうに私を眺めていた。やっぱりマスターの料理は最高。今まで食べたことがないくらい美味しいの！

「美味かったか？」

「はい！とっても！」

お財布が多少寂しくなるうが、こんな料理を食べられたんだから満足だ。そういえば特別って何だろう。あの後すぐに料理が運ばれてきたから食べるのに夢中になって忘れてしまった。

「じゃ、そろそろいいか」

意味不明な言葉を呟くと、先輩は再びお兄さんと呼んでヒソヒソと耳打ちした。お兄さんはちらっと私を見るとまた先輩を見て「了解」と笑って部屋を出た。

「先輩、これから何が始まるんですか？」

「まあ慌てるな」

慌ててるっていうか、先輩が焦らしてるって思っんですけど・・・。ぷうっと顔を膨らませて先輩を睨んでも、笑って流されるだけ。やっぱり私ってお子ちゃまだなあ・・・。

なんて思ったら、いきなり部屋の電気が消えた。停電！？と思っ  
て咄嗟に立ち上がるうとしたら、先輩に腕を掴まれた。

「そのまま、ちょっと座ってる」

低く穏やかな声にちよつと落ち着いて、言われた通りにする。それから間もなく、部屋のドアが開き、温かな光と共にワゴンに乗せられてやってきたものは……

「ケーキ……?」

「ちゃんと祝つてやってなかったから……HAPPY BIRTHDAY」

先輩の『特別』つて、このことだったの?ちよつとお洒落な雰囲気の一部屋も、ちよつとお高めの料理も、そしてこのケーキも、私の誕生日のために?

「そんな……私にはメールで十分だったのに……」

「お前が良くても俺が良くない」

そう言うと、先輩は私の腕を掴み、この間和真からもらったブレスレットを取り外した。

「普通デートに他の男からもらったブレスレットなんて着けてこねえぞ?」

「う……すみません……」

「まあそこが陽菜らしいというか……どうせ何も考えずに『可愛いから』つて着けて来たんだろ?」

おっしゃる通りです……。だって、せっかく気合を入れて選んだワンピースだったのに、アクセサリがないと決まらなかったんだもの。手持ちのアクセサリを見てみても、どう考えてもこれが一番しっくりきたのだ。

「だからやる」

ポンと手渡された小さな箱。開けてみるとブレスレットではなく、ネックレス。小さな石の付いた可愛いデザイン。

「奴と同じじゃ気に入くわねえからな」

なんて可愛いことを言ってみたりしてる先輩。どうしよう、胸キユンだよ……。

「ありがとうございます、先輩。大事にしますね」

「……いい」

照れてるー！この姿を学校の人たちが見たら絶対目を疑うよ。こんな貴重な姿を見られるなんて、私本当に幸せ者かも……。

「ケーキ食うか」

「はい！」

珍しく先輩が切り分けてくれて、私はお姫様待遇でケーキを食べた。しかも2切れも食べちゃった。お腹いっぱい。残りはマスターの好意で箱に包んでもらい、持って帰ることにした。しかも帰りに取りに来るまで置いておいてくれるんだって！マスター、大好き！

ここの支払いはというといつの間にか済ませてあって、先輩の手際の良さを垣間見た。

次に連れて来られたのは、なんとデートの定番……遊園地！先輩と遊園地なんて全く結びつかないから、初めから可能性としては排除していたんだけど。

「好きだった、山本が言ってたから」

さりげなくリサーチしてるの!?!?・・・私って先輩のことをいろいろと勘違いしているのかもしれない。女の子にこんなにまでしてくれる人なんてそうそういない。もつと傍若無人で、俺様で、隣を歩いている女性のことなんてあんまり考えないデートみたいなのを想像してたから・・・。

「声に出てるぞ・・・陽菜は俺をなんだと思ってるんだ、と言いたいが、それは大体正解だ」

「はい・・・?」

「今まではそうだった。でもお前には違うから」

えーっと・・・それはお前は特別だったこと、かな?やばい、すごく照れる。きつと今すごく真っ赤になっている。だって先輩すごく笑ってるもん。もしかしてからかわれたのかな!?

「まずは?」

さりげなく手を繋がれて、また胸キュン。園内パンフレットを2人で見ながら顔が近づいてまたまた胸キュン。私は今日、この動機に耐えられるのでしょうか・・・。

「絶叫系、行きませんか?」

「へえ、平気?」

「大好きです!」

アトラクションに乗る前にこの甘い雰囲気能耐えられなくて、絶叫してしまいそう。だからこの悶々とした気持ちを絶叫マシーンで

発散したいのだ。

園内でも人気ナンバー1のそのアトラクションは、1時間待ちだった。並んでいる最中も、甘い雰囲気続行中。手を繋ぐどころか、今なんて腰に手が回っている。そのせいで会話に集中できなくて困る。

「先輩……みんな見てますよ？」

「見せつけておけばいい」

いやいや、先輩ってこんなキャラだったっけ？なんだかだんだんと初めのイメージが崩壊していつている。もしかして、あの学校での怖い独裁者ってイメージはイメージと噂だけでしかないのかもしれない。

「きゃあっ！」

突然後ろに並んでいた男性グループの1人が私にぶつかってきた。というか体当たり？

「ってーな！いちやいちやしてねーで周り見ろや！」

「！？」

どう見ても、私は動いていない。なのに突然向こうが因縁をつけてきた。いちやいちやしてたっていうのは……すみませんだけです。

男性はいかにもチャラチャラしてる感じだった。私が眉間に皺を寄せていると、男性はさらにヒートアップして何やらベラベラと文句を言っていた。

「言いたいことは言ったか？」  
「あ？」

男性の文句が一段落したところで、それまで背を向けて聞いていた先輩が男性に向き直った。

「なんだ、南高の橋本か」

「ひ、日向さん！」

「言いたいことは言ったか？」

「いえ・・・そんな、あの・・・」

「明日、ヒマか？」

「すみませんでしたっ！」

たったそれだけの会話で、文句を言ってきた男性と、連れの男性たちは脱兎のごとく逃げて行った。

「痛むか？」

「いえ、全然！」

つて、怖ーっ……。何、あの豹変ぶり。これが先輩……。つていうか、どれだけ顔が知られているのだろう……。やっぱりあのイメージはイメージだけじゃない。そして噂だけでもないっ！

### 初デート(3)

絶叫系を全て制覇した頃には、閉園も近くなっていた。夏とはいえこの時間になるともう外は暗い。

「じゃ、そろそろ帰るか」

「そうですね」

ちょっと名残惜しかったけど、時間も時間なのであまりのんびりはしてられない。なにせうちにはうるさい男たちがたくさんいるのだ。図書館とは言ったけど、どこか腑に落ちない様子だった。だから遅く帰ったら何を言われるか気が気じゃないのだ。あーあ、遊園地デート定番の観覧車、乗りたかったな……。

「帰る前に、もう一つだけ行くか」

「え……」

「遊園地といえば、だろ？」

「はいっ！」

やっぱり先輩はエスパーかもしれない。私が考えていたことがすぐにわかるのだから。彼と観覧車って、女の子なら憧れるシチュエーションだよな。

先輩に手を引かれ、小走りの後をついていく……あれ？そっちから行くよりも、逆から行った方が近いんだけどな。トイレでも寄るのかな？

と思ったがトイレは素通り。だとしたらなぜこの道から？こっちは絶叫系や人気のアトラクションはないからこの時間での人通りは



少ない。ちょっと不気味？と思いきや照明の効果か先輩と一緒にだから、不思議と怖くは感じない。1人だったら絶対に近寄らないけど。

観覧車の真下に着いてさあ並ぼう、そう思って列の最後尾に向かおうとするが先輩は最後尾を通り越してまだ歩く。

「先輩、どこに行くんですか？」

「夏といえは？」

「夏・・・」

「そう、夏」

先輩の怪しい笑みと共に視線の先を見たらそこには・・・

「いつ、嫌ですっ！」

「最後はこれで締めるだろ」

「私お化け屋敷って無理なんですーっ！」

そう、先輩の目的は観覧車ではなかったのだ。先輩の真の目的は観覧車のすぐ近くにある、怖いと評判のお化け屋敷。その存在は知っていたけど、話題にも出なかつたし、あえて言うことでもなかったからここまでスルーしてきたのに・・・。

いつになく上機嫌な先輩は私の手を強く握ったままずんずんとお化け屋敷の中に入っていく。手は嬉しい、嬉しいけどお化け屋敷は嫌っ！

「ひあああああああっ！」

もう無理・・・もう一步も動けない・・・先輩に掴まっていな

いと立つてもいられない。しかも叫び過ぎて喉ががらがら。

「まだ半分も進んでねえぞ？」

「無理、無理ですう……」

「んじゃ置いてく」

「それはもつといやあつ！」

「……子どもか……しかたねえな」

「へ……うひゃあああああつ！」

突然の浮遊感に驚く間もなく、現れた化け物に再び叫び出す私。そしてそれに顔を顰める先輩……って、顔近くないですか！？

それもそのはず。私はなんと先輩に抱き上げられて、いわゆるお姫様抱っこをされているのだ。

結局、最後まで先輩に抱きかかえられたまま、出口まで辿り着いてしまった。お姫様抱っこの緊張で、怖さどころじゃない！と思っただけ、結局最後まで叫び続けてしまった。

「あーあ、耳が痛え……」

「……すみません」

至近距離で私の叫び声を聞かされた先輩は、私とは別の疲労感を感じていたようだった。でも、謝る私の頭を優しく撫でてくれた。気にするなっということね？

「あ、あの……そろそろ降ろしてもらっても？」

「ああ」

今気付いたかのような返事だったが、あの先輩がこの周囲の視線

に気づいていなかったなんて絶対にありえない。気付いていたのにずっとお姫様抱っこのままだったんだ。意地悪。でも恥ずかしかつたけど、ちよつと嬉しかったりして。だって、ただいるだけで人目を引く先輩を独占しているような気分になれたんだから。

閉園を告げる音楽が園内に流れる。私たちはやはり手を繋いだまま、出口へと向かった。

「来週の金曜日、夜時間あるか？」

「来週の金曜日・・・ですか？」

来週の金曜日は夕方から夜にかけて結翔の保育園の納涼祭があったはず。だからそれが終わってからなら大丈夫なのだけど・・・。そう言っていると、先輩は何かを確認してから大丈夫、と言った。

「終わったら連絡寄せ。迎えに行くから」

「え、何が・・・」

「花火、行きたいって言ったろ」

そうだ、さつきアトラクションに並んでいた時に花火大会のポスターがあったのだ。そこでぼつりと「行きたいな」と小さく呟いたのだ。でも先輩は受験生だし、あまり無理を言っちゃいけないから、本人には言わないことに決めた。それが聞こえていたのだ。

「でも、先輩受験生ですし・・・」

「俺が一日勉強しなかつたくらいで落ちるとでも？」

「いえっ、決してそんなことは！」

先輩の秀才ぶりは過去2回のテスト成績優秀者の掲示で嫌というほど思い知らされていますので。天は二物を与えずなんて嘘だな、

と実感した瞬間でございました。

「夜、出かけるのは無理か？」

「そんなことないです！無理やり出てきます！」

せつかくの先輩との花火デートなんだから、お兄ちゃんたちに何を言われようと絶対に出てくるんだから。

「三崎たちはお前が夜出歩くのには煩いんだろうな」

「そうなんです・・・」

私ももう高校生なんだし、そんなに心配してくれなくてもいいのに。それにお兄ちゃんに心配されるだけじゃなく、なんで陽翔にまであんなに心配されなくちゃいけないのだろう。陽翔の方が年下なのに。

「お前が危なっかしいんじゃないか？」

「そんなことないですよ」

そりゃ町を歩けば陽翔の方がお兄ちゃんに見られることもあるけど、それは身長の問題だ。だいたい年子の弟なんて私より大きくなるに決まっている。

「2人には俺たちのこと、言っていないのか？」

そう、そこなんですよ……。だって、わざわざ自分から『私日向先輩と付き合うことになったの』なんて言わないし、言えない。向こうも聞いてくることなんてないから、言うきつかけがないのだ。

「それに、言うといちいち煩いんです」

「へえ・・・？」

私が過去に付き合ったことがあるのは和真だけんだけど、その時も煩かった。しかもその時はお兄ちゃんか陽翔がわざとらしく登下校で合流して来たり、休みの日も何かと用事を言いつけたりして和真と2人にしないようにしていた。しかも偶然を装っているけどそれが全部2人の画策だということを私は知っている。

だから今回も言つと花火にも行けなくなりそうなので気付くまで言つつもりはない。だけどそれを先輩にあえていうこともないので、説明は省こう。

「まあ言わなくてももう気付いてるだろ」

「そうですかね？」

「そうだ。向こうもだいたいイライラしてる頃だ、見てるよ？」

「は？」

そう言つと、先輩は私を道の端に連れて行き、そのまま人目も憚らずにキスをした。通り過ぎる人たちが私たちをじろじろと見ていくのがわかる。いくら暗くて顔がはつきり見えないからと言つてもキスをしていることはバッチリ見えているだろう。

「んあっ」

荒くなる呼吸に思わず声が漏れる。道端だということのを忘れそうなほど、私の頭は熱で溶かされてしまいそうだ。

どれほどそうしていただろうか。私の腰と後頭部に回っていた先輩の手が際どいところに伸び始めたその時、いきなり肩を後ろに引かれて唇同士が離れる。

「いい加減にしとけ」

低く冷たい声に恐ろしいほど鋭い視線。だけどそれらが向けられているのは私ではなかった。

「もっと早く出てくると思ったがな」

「ちっ・・・やっぱり気付いてやがったか。どこからだ？」  
「店を出るところ」

初めはお兄ちゃんと先輩がしている会話の意味がよくわからなかったが、よくよく聞いているとお兄ちゃん、つけてた？

「おい、お前も顔出せ。わかってんだ」

先輩がお兄ちゃんから視線を離さずに言った。何、もしかしてまだいるの？そう思ってきてきよろきよろと辺りを見回していると、遠くの方から笑いながら歩いてくる人物が。あのシルエットは・・・

「臯月先輩！」

「や、陽菜ちゃん。お熱い光景ごちそう様」

ぎゃーっ！やっぱり見られてたー！

「いい加減にしろよ？お前だろ、三崎連れて来たの」

「わかった？でも連れて来たんじゃないなくて、バッテリー街で会ってほろっと口滑らしちゃっただけ・・・」

「黙れ」

「だいたい一樹だって俺たちがいるってわかってたらキスしなくても良かったじゃん」

「それは俺がしたかっただけだ」

「うわっ、言ったよ・・・学校の連中が聞いたら卒倒するね」

「・・・まさか本当に陽菜が日向と付き合っているとはな。皐月の言うことだから半分は信じてなかったんだが」

「うわっ、こっちも酷いな。陽菜ちゃんの兄とは思えない」

なんなんだこの3人は・・・先輩の言葉にはちよつと・・・どころじゃなくドキツとしちゃた。キス、先輩もしたかったんだね・・・じゃなくて！皐月先輩何余計なことしてくれちゃってるんだろう。これで花火に行けなくなったら皐月先輩、恨むからねっ！

## 夏祭り(1)

「僕ねー、今日は全部のゲームやるんだ」

「へー、今日は何があるの？」

「ヨーヨー釣りとかね、輪投げとかね・・・あとお化け屋敷！」

「おば・・・そっかあ。楽しみだね」

「うんっ！」

夏至をとつくに過ぎてもまだ明るい夕方の道を、ゆうくんの手を引きながら歩く。今日は保育園の納涼祭で、17時スタートなのに待ちきれなかったゆうくんは15時くらいから準備を始めていた。

ようやく時間になって家を出たけど、夕方に保育園に向かうのが新鮮らしくて、いつになくテンションが高い。これは終了時間の20時までもたないな、なんて思いながら保育園に向かう。

そして、ゆうくんのテンションが妙に高いのにはもう一つ理由がある。それは・・・

「そんなに今からはしゃいできると眠くなるぞ」

「大丈夫だもん！」

「結翔、たまには大翔もいいことを言うんだよ。せつかく楽しいお祭りなのに、着いた頃に疲れてたら楽しくないよ。だからちよっと深呼吸」

「はあい、お兄ちゃん」

「だからなんでお前は陽翔の言うことなら聞くんだよ・・・」

そう、今日は私たち兄弟が全員そろって保育園に行くのだ。それがゆうくんにとっては嬉しいみたいで、さっきからずっと上機嫌な



のだ。というか、お兄ちゃんも陽翔も受験生なのにいいのだろうか。

「俺は優秀だから問題なし」

「俺も、一学期の期末テストは250人中3位」

・・・天国のお父さん、お母さん、私にだけ天才的な頭脳を忘れて産んでやいませんか？もしかしたらゆうくんも・・・なんてこちら側に引きずり込もうとしている私は悪いお姉ちゃんだ。

「へこむなよ。陽菜は俺たちにはない才能があるだろ？」

「何・・・？」

「家事の才能とか、音楽の才能とか、絵も上手いよね、数学はできないけど」

「陽翔、最後余計だ」

「あ・・・」

「文系は陽菜が1番強いよな。俺たちは文系が苦手だし」

お兄ちゃんのちょっと焦ったようなフォロー、余計に心に傷にしてみる。だって、確かに私は文系で、お兄ちゃんも陽翔も理系だけど、それでも文系科目ができないわけじゃない。私は理系科目が『できない』のだ。そこは大きな違い。

そんな落ち込んだ私を尻目に、結局ゆうくんのテンションは保育園に着くまで下がることもなく、そのままのテンションを保ったまま納涼祭に突入した。

保育園の納涼祭は20時までやっているのだが、基本的に参加自由なので、いつ来ていつ帰ろうが自由だ。ただ、多くの園児たちが待ちきれなくて開始と同時にやってきて、疲れ果てて1時間くらいしたら帰るのだ。

「悠大くん！」

「あー、結翔くんー！」

早速お友達を見つけたゆーくんは一目散に走って悠大くんのところに行ってしまった。悠大くんの隣には当然悠馬さんがいて、こちらに気付くにつこり笑って手を振ってくれた。

「こんばんは。なんだかお久しぶりですね」

「そうだね、結翔君が熱を出した以来かな？」

「あ、あの時は本当にありがとうございました」

「気にしないで？子どもはよく熱を出すからね。それより、あの時お返しにもらったお菓子、ありがとう。悠大が気に入っちゃって」

私と悠馬さんが和やかに話しているうちに、ゆーくと悠大くんは走って園庭の奥の方に行ってしまった。私が気付いた頃にはもう遠くに行ってしまったけど、陽翔が付いていってくれたようなので安心してそのまま話し続ける。

「えっと、大翔くんだったけ？この前は悠大がお世話になったね」

「いえ。悠大くと遊んでくれた方が俺も助かるんで」

「でもなんかたくさん遊んでくれたって、すごく喜んで帰ってきたんだよ。ありがとう」

つい数日前、悠大くんが久しぶりにうちに遊びに来たのだ。だけど、生憎私は一日部活の日で、陽翔とお兄ちゃんしかいなかった。悠大くんは初め私がいなことにちよつと落ち込んでくれたみたいで、そして2人の大きなお兄さんたちにびびっていたらしい。

しかし遊んでいくうちにどんどん2人に懐いて、私が帰ってきた

頃にはもうすっかり仲良しだった。帰る時には迎えに来たおばあちゃんに半ば引きずられるようにして連れて行かれたのだ。

「帰ってきてから悠大の口癖は『結翔くんちは優しいお兄ちゃんとお姉ちゃんがいいな』になっちゃったよ」

「よかつたらいつでも来てください。夏休み中なら大体は誰かいるんで」

「ありがとう。うちにも今度みんなでおいで？」

いつの間にかお兄ちゃんまで悠馬さんと仲良くなっていたみたいで、羨ましい。だって、悠馬さんって頼れる大人の男の人って感じで、すごく安心するんだもん。私ももつと仲良くなりたいのに。

ちよつとばかり拗ねた私に気付いたのが、悠馬さんが私に穏やかな笑みを向ける。

「陽菜ちゃん、行こう？」

さりげなく手なんて引かれちゃって、思いつきり子ども扱い。まあ悠馬さんから見れば女子高生なんて子どもと一緒になんだろうけど。そのせいか、いつもは厳しいお兄ちゃんも黙認。むしろにやにやして耳元で『お子ちゃま』なんて！ムカつくーっ！

ゆーくんたちに追いつくと、彼らは目的のヨーヨー釣りの列に並んでウキウキしていた。あの大きいヨーヨーを狙うんだとか、黄色がいいだとか、2人の目には最早ヨーヨーしか映っていない。

というか、陽翔はどこに行ったんだ。この人込みに5歳児2人ほつといて、いくら園内とはいえ物騒だ。

辺りを見回してみると、もう見慣れた光景が目に見え込んできた。ちよつと迷惑そうだけど、それを表には出さない余所行き笑顔でママさんたちに振り撒いて立っている陽翔。それでも目はちゃんと2人に向いていてホツとした。偉いぞ、弟。

私たちを見つけた陽翔はママさんたちにわからないように目で助けを求める。だけど、私が行ったところでママさんパワーの前に屈することは目に見えている。そこでちらつとお兄ちゃんを見上げると、やっぱり意地悪そうな表情でただ陽翔を眺めているだけだった。性格悪いな。

結局助け船を出してくれたのは、天使のようなお巡りさんだった。ママさんは突然現れた悠馬さんに驚きつつも、嬉しそうだった。そうね、悠馬さんも人気者だものね。かっこいいし、優しいし、大人だし、何より独身。これはシングルマザーのママさんたちにとっては格好の獲物。

あつという間に取り囲まれる悠馬さんだったけれど、そこはどういう風に上手くやったのか、あつという間に陽翔を連れ出してママさんの輪から抜け出してきた。

「助かりました」

「いや、角を立てないようにするのが大変だよね」

お礼を言う陽翔に悠馬さんは爽やかな笑顔で答えた。どうやって抜け出したのか聞いても、「男だけに使える技だよ」と誤魔化された。陽翔に聞いても「勉強になる」の一言。あの陽翔が感服するなんて、悠馬さん、何者？

「ところで、君たちはこれから花火に行くの？うちは悠大が花火花

火つてうるさくてさ」

いきなり悠馬さんの口から飛び出した『花火』発言に心臓が飛び跳ねそうだった。なにしろ、今日を迎えるまでにかなりのバトルがあったのだから。

「はい。『3人で』行くんですよ」

お兄ちゃん、わざと『3人』を強調して言わなくてもいいじゃない。そもそも「はい」か「いいえ」で済む質問だったのに。

「3人？」

ほら、悠馬さんも食いついてきちゃったじゃない。

「陽菜は男と行くんですよ。結翔が泣いて頼んでも譲らなかったんです」

ゆうくんは泣いて頼んでないし！そりゃあ「僕もいつくんと一緒に行きたいな」なんて言ったけどさ。ゆうくんを連れて行ったらもれなくいらぬオプシヨンまでついてくるから嫌なのよ。

「そっかあ。まあ陽菜ちゃんもそういう年頃だしね。いいんじゃない？」

「悠馬さんっ……！」

笑顔が眩しいっ！悠馬さんみたいなお兄ちゃんだったらよかったのに。

「もしかしたら会場で会うかもね」

「そうですね、でもすごい人だから見つけれないと思いますよ」

「うん、でももし会ったら紹介してね」

「あはは、はあい」

それから男3人は相談して、ゆーくんと悠大くんを連れて5人で花火に行くことにしたらしい。目の保養になりそうな一行様になりそう。

夏祭り(2)(前書き)

間があいて申し訳ないです・・・。

## 夏祭り(2)

「んで？上手く出て来れたのか？」

「まあ・・・結局私より早く出て行ったので」

納涼祭から帰ると、男3人はさっさと支度を済ませて出ていってしまった。私の事は半ばシカト状態よ？大人気ない・・・。

ただ、こんなにすんなりと何の障害もないってことがすごく不安だ。私の予想としては、偶然を装って花火会場で合流してくるような気がするんだよね。「お、奇遇だな」なんて言ってる。

「」

不意に、先輩の指が私の眉間にそっと触れた。一瞬ドキッとして顔を見上げると、今度は先輩が自分の眉間を指差していた。なるほど、眉間に皺が寄ってたってことか。

「何を悩んでる？」

「いや・・・」

「まあ言わなくてもだいたいわかるけどな」

そりゃあそうだろう。だってこの前の初デートだって尾行されていたみたいだし。もっとも、先輩は気付いていて何も言わなかったみたいだけど・・・それもどうかと思うが。

ヘルメットを手渡され、上の空でバイクに跨ると、先輩がぼつりと呟いた。



「知恵比べだな」

「はい？」

「なあ、知ってるか？今日この辺の他にもう一か所花火が上がる場所」

この辺の他に、と言われても私はあまりこういう情報に詳しい方ではないので、さっぱりだ。車で1時間ほどの市で行われる、全国的にも有名な花火大会はもう終わってしまったし、反対方向に1時間走ったところの花火大会は来週だ。

私が悩んでいるのを見て満足そうに微笑んだ先輩は、答えを教えてくださいなままバイクのエンジンをかけ、出発させた。

明らかに花火大会の会場とは逆方向に向かっているバイク。あれ、ここは……

「先輩のお家ですよね？」

「そうだな」

「花火を見るんですよ」

「もちろん」

「先輩のお家から花火は見えるんですか？」

「いや、見えない」

「……」

ダメだ……。私の貧相な想像力では分かりかねます……。花火を見るのに、先輩のお家に来て、でも先輩のうちからは花火は見えずなくて。意味不明。

「百面相だね」

突然先輩のものではない男の人の声が聞こえてきて、驚いて振り返る。すると、そこには驚きの人物が立っていた。

「お兄さん!？」

「あ、覚えててくれた？」

私たちを出迎えたのは日向家の人ではなく、以前先輩のバイト先で出会った、里緒奈さんの事が好きなお兄さんだった。

「でもどうしてここに!？」

「ふふん、どうしてだと思っ？」

「どうしてって・・・え、もしかして!？」

まさかとは思ったが（失礼）、里緒奈さんに思いが通じたのだろうか!？そう告げてみると、お兄さんは否定も肯定もしてくれなかった。

「うんうん、陽菜ちゃんは可愛いねえ」

ポンポンと私の頭を叩きながら、しみじみと言う。その反応はなんなのだろう。

「勝手に触んな」

「うわっ、独占欲の塊」

先輩にこういう風に嫉妬してもらえるなんて、ちょっと恥ずかしいけどそれ以上にかなり嬉しい。まさか自分がこんなに大事にされるなんて、今でも夢みたいに思っちゃう。

そんな私の勝手なトリップを余所に、先輩はお兄さんの手を払い

のけながら相手を睨みつける。普通だったら先輩にこんなに睨みつけられたら笑っていられないのだろうけど、お兄さんは余裕そうに笑って手を引っ込めた。

「いいじゃん、俺も陽菜ちゃんに触りたい」

「黙れ、変態」

・・・うん、変態だ。触りたいって、きっとお兄さんにとってはそういう意味じゃないんだろうけど、傍から聞くとかなり際どい発言だ。お兄さん、ちよつと言動には気をつけた方がいいですね。

「あー、陽菜ちゃんいらっしやい！」

「あ、里緒奈さーん！」

私たちは久しぶりの再会を抱き合って喜んだ。そこに混じろうとしたお兄さんを先輩が冷たい視線と言葉を浴びせながら止めていたのは見なかったことにしよう。

「陽菜ちゃんと一緒に行けるって聞いて、とつても楽しみにしてたのよ。一樹と2人きりじゃなくて申し訳ないけど」

最後の方はちよつと意味深な笑いを含めて里緒奈さんが囁いた。

その言葉に顔が真っ赤になった私を見て、里緒奈さんは可愛い可愛いと何度も抱きしめた。

「ところで、これからどこに行くんですか？」

「なあに、一樹ってば言ってないの？」

「聞いても教えてくれないんです」

「あらあ、じゃあ着くまで秘密にしちゃおっかな。ねえ、今日は泊まって行っても大丈夫？」

先輩とそっくりな笑顔で、里緒奈さんは私に聞いてきた。

「無理だと思います・・・」

先輩と2人で花火に来ているだけでもちくちく視線が痛いのに、その上泊まるなんて言ったら速攻で迎えに来られそうだ。

「でも、行って帰ってきたら朝になっちゃうのよ。大丈夫、私が電話するから！」

そう言うと、里緒奈さんは私のケータイでお兄ちゃんに電話をかけ始めた。私も電話に耳を近づけて2人の会話が聞こえるような体勢になる。そして短いコール音の後、お兄ちゃんが電話に出た。

『どうした？』

『三崎大翔くんね？』

『・・・誰だ、お前・・・陽菜は？』

「そんなに怖い声出さないで。陽菜ちゃんは隣にいるわよ。それよ、大翔くん？私の声に聞き覚えはないかな？」

「え・・・？」

里緒奈さんの言葉に反応してしまったのは、お兄ちゃんではなく私の方が早かった。何せ、里緒奈さんはお兄ちゃんのことを知っているとは言っていたけど、知り合いだなんて言っていなかったのだから。

しばらく待っても電話の向こうのお兄ちゃんの反応はない。業を煮やした里緒奈さんがわざとらしく溜息をついて言葉を発した。

「本当にわからないのね。私、日向里緒奈よ。三崎大翔くん？」

『・・・里緒奈？日向ってまさか・・・』

「ご名答〜！私は日向一樹の姉です。ってどうか言ってなかったわけ？」

『聞いてねえ』

「だいたい名字だつて初めに名乗ったのよ？なのに聞いてなかったのはあなた。ま、というわけで陽菜ちゃんは私が責任もって明日送り届けるから。じゃあね」

『おいっ・・・』

里緒奈さんはお兄ちゃんの返事を聞くこともなく、そのまま電話を切ったのだった。そして爽やかな表情で私にケータイを返した。呆気にとられながらふと先輩を見ると、先輩も呆然としていた。どうやら先輩も里緒奈さんとお兄ちゃんが知り合いだったことを知らなかったようだ。

「おい、お前なんで三崎と・・・」

「さ、そろそろ出発しないと間に合わないわよ。外で車が待ってるから、早く行きましょう」

里緒奈さんはまたしても先輩の言葉を途中で遮って、私たちの腕を引っ張って車に向かった。

「遅いよ。三崎に連絡取れた？」

「取れたよ。大翔くんってば、私が一樹の姉だつて知って驚いてた」

「あはは、だろうね。まあいいでしょ。さ、出発しよう」

お兄さんは里緒奈さんとお兄ちゃんの間係を知っているようで、いたずらっ子のようにニヤニヤしながら里緒奈さんと楽しそうに話していた。置いてけぼりの私たちは、ただ黙って2人のやり取りを

聞いているしかない。それに気づいたお兄さんが車を出発させながらミラー越しににっこりと笑った。

「あのね、実は三崎と知り合いなのは里緒奈じゃなくて俺なの」

「お兄さんが・・・？」

「そう。あ、姉崎だから」

「はい？」

「俺の名前。姉崎あねさき未来みらいだから。お兄さんってのも悪くないけどね」

「そっいえばお兄さんの名前、まだ聞いてなかったな。あれ・・・  
姉崎・・・」

「未来さん？」

「あ、もしかして聞いたことある？」

記憶の中の映像と、目の前の未来さんの顔を見比べる。そして、自分の鈍さに呆れかえったのだった。

### 夏祭り(3)

「今日、うちの部活にOBが練習見に来てくれてさ。すっげー厳しかったけど、めっちゃくちゃ上手かった」

家に帰るや否や興奮しながらお兄ちゃんが言った。

「へえ、大翔が人のこと褒めるなんて珍しい」

お兄ちゃんは中学の頃から・・・ううん、小学校の頃から驚くほどバスケが上手だった。上級生であろうとお兄ちゃんに敵う人はほとんどいなかったのだ。

そのせいもあるだろう。お兄ちゃんはバスケで人をめつたに褒めない。自分と同等の実力を持つ人に対しては、切磋琢磨しながら互いに向上していきたいと思っているので、認めはするが尊敬はしない。故に声に出して褒めることはない。

そんなお兄ちゃんが人を認め、尊敬している。しかも、こんなに興奮しているお兄ちゃんは見たことがない。その実力者はどれほどのものなのだろう。

「いや、俺も会うまではそんなに上手いなんて思ってなかったんだけど、もうあれは神。マジですごいわ」

こんなに手放しで喜んでいるお兄ちゃん、初めてだ。なんだか子どもみたい。

「名前なんて言うの?」

「姉崎未来。俺の3つ上で、今年大学にスポーツ推薦で入ったんだ」  
「なんか聞いたことあるかも。大翔の高校が全国大会に行ったときにキャプテンだった人だよな。会いたいな、あの人のプレー好きなんだ」

「陽翔知ってたのか。もしだったら明日も教えに来てくれるから、ちよつと来るか？」

「いいの!？」

「ああ。練習終るちよつと前に来いよ。話くらいできるかも」

「やった!超楽しみ!」

いつもは大人びた口調の陽翔だけど、バスケの話となると途端に普通の中学1年生になる。可愛いな、なんて思ってしまうのは陽翔には内緒。

次の日の夕方。バタバタと帰ってきた2人を出迎えに玄関に出る。普段は出迎えになんて行かない私が、どうしてこの時ばかりは出てきたか。それはお兄ちゃんでもなく、陽翔でもない声が聞こえてきたから。バスケには興味がないけど、お兄ちゃんが尊敬する人をちよつと見てみたかったの。

でもあんまりあからさまだと失礼だし、部活帰りということまでジヤージ姿だったから、物陰からそつと覗くことに。

「うわぁ・・・」

そこに立っていたのはお兄ちゃんよりも背の高い、笑顔の素敵な爽やかな男性だった。一瞬しか見えなかったけど、感じの良さそうな人だ。

今度私もちゃんと会ってみたい。そうお兄ちゃんに言ったのだけ



ど、「今度な」で済まされてしまった。

あれから2年。まさかこのお兄さんがあの時の『姉崎未来』さんだったなんて。言われてみれば、確かにこの身長といい、筋肉といい、爽やかな笑顔といい、私の記憶の中にある未来さんだった。

「バスケは、今も？」

「うん。俺、高校の体育の教員目指してるんだ。だからできない日もあるけど、時間ができればやるようにはしてる。まー、前よりはできなくなつたよ」

「えっ、未来さん、プロとか実業団とかじゃないんですか？」

「うーん、誘われたけど、先生はずっと夢だったからね」

未来さんは慣れたようにハンドルを握りながら、にこやかに答えた。確かに未来さんに先生という職業はぴつたりなイメージだったが、ちよつとだけ残念。だって、私はまだ未来さんのプレーを見たことがない。お兄ちゃんが絶賛するそのプレーを見ることがなかったのは残念だ。

「できなくなつたとか・・・そう言いながらお前は俺たちを騙すんだな」

「ヤダなあ、一樹。前よりできなくなつたのは本当のことだし」  
「っち、ムカつく」

えーと・・・2人の話から推測すると、前より体は動かなくなっちゃったけど、それでも先輩は未来さんに敵わない、ってことかな。

つまりお兄ちゃんもなんだろうな。だってお兄ちゃんと先輩は同じくらいの實力だし。

「さ、ケンカしてる場合じゃないわよ。もうすぐ着くからね」

「里緒奈さん・・・こんな時間に花火大会なんてあるんですか？」

車が出発してからかれこれ3時間とちよつと。もうすぐ日付も変わるうとしていゝる。真夜中の花火大会なんて聞いたことがない。

「日付を跨ぐのに意味があるの。ここに残る昔話なんだけど、この地域を治めていた神様が人間の娘に恋をしたのよ。だけど神様と人間が結ばれることはできず、神様は娘を諦め、娘の幸せを願った。それから神様が恋い焦がれた娘は婚約者と共に幸せな人生を歩む、そう思われたんだけど、その娘はある日の晩に自ら命を絶つてしまふの。」

その理由は婚約者の裏切り。それに心を痛めた神様は、娘の魂が生まれ変わるその時、自身も神であることを捨てて、人間として生まれ変わり、彼女と共に生きることを決意したの。それを見ていた創造神は、我が子のこれからの幸せを祈りながら、空にたくさんの流れ星を流したそうよ。それから神が人間として新たな人生を歩むこととなった時間には、流れ星を模した花火が打ち上げられるの。それが、明日の午前0時つてわけ」

美しくも悲しいこの昔話は、この地域ではとても有名な話らしい。そのため、この日ばかりは子どもも夜更かしを許されるのだとか。

「もつとも、今ではただのお祭りと化してるけどねえ」

ちよつと残念そうな里緒奈さん。その言葉の通り、花火会場に近

づくにつれて人が増え、車を停めて会場まで行くと、屋台がたくさん並んでいた。

時間も時間なので、普通のお祭りに比べて年齢層が高い。私の見る限り子どもはいなかった。きつと夜更かしは許されても、出歩くことは許されていないのだろう。家から花火を見ているのだろうか。

時間の早い花火大会とは違って、会場のスペースにも余裕がある。里緒奈さんはレジャーシートを広げると、飲み物と食べ物を買いに未来さんと行ってしまった。私たちは当然2人でお留守番。

「こんなところでこんな時間に花火をやるなんて、初めて知りました」

「ああ、意外と県外の人には知られてないからな。俺らは母親がこの辺の出身で、昔から馴染みがあったけど」

なるほど。ここは日向姉弟にとっては昔から馴染みのある場所だったのか。そんなところに私を連れて来てくれたのかと思うと嬉しい。

もつとも、ここに来るまでもたくさん軌跡を潜り抜けてきたのだが。正直お兄ちゃんをかわせるとは思っていなかった。

「そういえば、未来さんがお兄ちゃんの知り合いだったってこと、日向先輩も知ってました？」

「もちろん。あいつには俺も個人的にバスケ習ってたんだ。俺の場合は完全に姉貴の伝手だけ……その時に三崎の話も聞いてたから。それより……」

そこまで言うと、隣に座っていた先輩が私の顔を下から覗き込む

ような体勢になり、怪しい雰囲気醸し出しながら低く呟いた。

「なんであいつは『未来さん』で僕は『日向先輩』なのかな？」

ふあつ・・・！久々に、というか滅多に見ることのできない爽やか生徒会長モード！俺様生徒会長の日向先輩が爽やかモードになる時は、文化祭や式典など、学校外部の人の前に出る時だけ。だから先輩は爽やかモードと俺様生徒会長と、素の日向一樹と大まかに3つの顔を使い分けているのだ。（皐月先輩談）ちなみに私は素の先輩を知る数少ない人物なのだそうだ。（これも皐月先輩談）

「う・・・いや、未来さんはお兄ちゃんたちがそう呼んでいたので・・・」

「うん、そうだね。でも俺としてはいい気はしない。何故だかわかる？」

半分素に戻りかけていることが一人称でわかる。だったら最初から素のままでもいいのに・・・。

「陽菜、聞してる？」

「聞いてます。何ですか・・・？」

「わかんない？」

先輩の瞳が鋭い光を湛えて私を捕える。そのまま、先輩は私の耳元に顔を近づけたかと思うと、小さくこう言った。

「鈍いやつだな、妬いてんだ」

## 夏祭り(4)

先輩の『妬いてる』発言の後、私は結局『一樹先輩』と呼ぶことで収まった。それだけで私は結構いっぱいいっぱいで、周りが見えていなかったんだと思う。

「ふえ……？」

買い出しに行っていた2人も戻ってきたことだし、余計なことは考えずに、花火に集中しよう。そう思って空を見上げていたら、本当に夢中になっていた。

そして、ふと気づいた。先輩と里緒奈さんがいない……？

「どうしたの？」

「あの、2人が……」

「あれ、気付かなかった？さっき2人の親戚の人が偶然通りかかってさ。ちよつと向こうにあいさつしに行ったよ」

まったく気が付かなかった。どうやら私は生返事で答えていたようだ。照れ隠しに普段は滅多に飲まない炭酸飲料で喉を潤す。炭酸の刺激で少しは目が覚めるだろうか。

「陽菜ちゃんって、あんまり三崎とは似てないよね」

「よく言われます……」

「え、何で落ち込んでんの!？」

だって、お兄ちゃんはかっこいいって結構昔から言われていて……。そんなお兄ちゃんと似てないってことは、ね。

「あ、もしかして卑屈なこと考えてる？」

「考えてたら悪いですかっ？」

「いやいや、俺はそういう意味で言ったんじゃないよ……って、なんでそんなに怒ってるの？」

「怒ってません！」

「怒ってるじゃん。可愛いよ？陽菜ちゃんは、三崎とはタイプは違うけど、すごく可愛い」

「フオローしてもらわなくてもいいです」

困ったように苦笑いしている未来さん。でもなんでだろう、自分でもこんなに突っかかるなんて。それにどうしたのだろう、体が熱い。ちよつと興奮したからなのかもしれない。それにしても、普段暑がりでもない私がこんなに汗をかくななんて珍しい。あれ、なんだか視界がぼやけるし、私揺れてない？

「ふにゃ……」

「大丈夫、陽菜ちゃん？」

未来さんが私を気にかけてくれる。だけど、その声もどこか遠くて。大丈夫と返事をしようとして後ろにいた未来さんを振り返る。

「うわつと！え、陽菜ちゃん……」

倒れかけた私の腰に手を回して、未来さんが支えてくれる。これって、もしかして……

「もしかして、酔ってる？」

「みたいです……」

未来さんは私が飲み干した炭酸飲料の缶を見て、困ったように笑いながら缶に書かれている表示を私に向けた。

「陽菜ちゃん、読める？」これはお酒です』って書いてあるでしょ？弱いんなら気をつけなさい」

「だって、暗くてわかんなかったんです。それにお酒なんて飲んだことないから、弱いかどうかわかりませーん」

未来さんに支えられ、彼の胸に顔を埋めながら言い返す。未来さん、怒ったって怖くないんだもん。

「嘘、マジ？いい子だね！。俺が高校生の頃なんて・・・いや、言わないでござい」

それは語らずとも一緒ですよ？と言おうとしたが、心臓がバクバクしてて、あんまり喋りたくない。呼吸も荒くなってきたみたい。酔うってこんな感じなの？

未来さんのちょうど心臓の辺りに私の耳が当たって、未来さんの鼓動と私の鼓動が不思議なリズムを生み出している。なんだか面白い。

規則的なリズムを聞いていると、だんだん睡魔が襲ってきた。火花がまだ途中なのに、もったいない。それに、何より先輩との時間をこんな形で無駄にしたくないのに。

「・・・陽菜ちゃん、俺こんなところ一樹に見られたら殺されるよ。頑張って起きて！」

こんなところって、どんなところだろう？ベタにお花畑にでも行

つてみようかな。里緒奈さんによく似合う。でも里緒奈さんに行くならもつとお洒落なところだろうか。未来さんと行くなら遊園地かな。先輩となら、どこでもいいなあ。

「ん……一樹先輩……」

「違うっ！俺は未来だつて！ちよっ……」

そこから先、私の記憶はない。遠くで花火の音を聞きながら、私は意識を手放した。

目が覚めたら、先輩のおうちの客間にいた。頭が痛かったけど、いい夢を見たから気分は悪くなかった。

「……目覚めたか」

畳に敷かれた布団から少し離れたところに先輩が怖い顔をして座っていた。どこからどう見ても機嫌が悪い。心当たりは……ある。

「あの……ごめんなさい……」

「何に對して？」

「昨日……お酒を飲んじゃって……」

私がそう言うと、先輩は眉をピクリと動かして、ますます不機嫌になった。私また何か先輩の地雷でも踏んだ……？

「酒な。お前、酒禁止。つてか未成年なんだから飲むな」



「はい」

「あとは？」

「あとは……」

明らかに未来さん絡みだよな。でもなんて言っているのか……  
だつて、よく覚えてないし。

「未来さんに……何しました？」

それを聞いた先輩は、さらに眉間に皺を寄せて私を睨む。そして、  
低く響く声で言った。

「へえ？覚えてないんだ」

先輩の声に若干の恐怖を覚えつつ、昨日の自分の失態を想像する。  
酔って絡んじやったのだろうか。それとも考えたくないけど、まさ  
か……

「吐いちゃった……とか？」

先輩は頭を抱えて、大きく溜息をついた。私、何か変なことを言  
ったのだろうか。

「もういい、思い出さなくて。でも俺の気が済まないんだよ……」

「え？……って、せんばいっ……！」

立ち上がってこちらに近づいてくる先輩。そして、いきなり私の  
唇が奪われる。いつもよりもかなり激しくて荒々しいキス。苦しく  
て、呼吸のために開いた唇の隙間から先輩の舌が侵入してくる。

「んっ・・・あっ」

執拗なまでに私の口腔内を暴れまわる先輩の舌に、私はもう何も考えられなくなってしまう。体にも力が入らなくなつて、先輩に支えてもらわないと起きていられなくなつてきた頃、ようやく唇が離れた。

荒くなつた呼吸を必死で抑え、冷静になろうと努める私。なのに先輩は涼しい顔をしている。

「そういう目は・・・他の男に向けるな」

「へ・・・？」

「二度も言わん。ほら、シャワー浴びて来い。姉貴が飯作るつて」

タオルと先輩のものと思われるシャツ、そして何故かジャストサイズの下着を手渡され、私はバスルームへと連行された。

熱いシャワーは、否応なしに私の思考を取り戻させる。昨日私は何をしてしまったのかという疑問よりも、先程の出来事が頭の中を支配してしまう。

キス自体は初めてじゃない。だけど、なんていうか・・・今回はどこか違った。体の奥が疼くような、熱くなるような、そんな未知の感覚に襲われたのだ。

「まだ酔つてるのかな・・・」

鏡を覗き込めばまだ赤みの残る顔。お酒のせいなのか、それとも別のもののせいなのか。わからないまま、再び熱いシャワーを頭か

ら浴びた。

## 浮気？（１）

私こと三崎陽菜は絶体絶命のピンチである。

何がピンチなのかというと、身の危険、ひいては貞操の危機だ。

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ！」

「黙れ」

冷やかな先輩の声が響く中、私の状況を簡潔に説明してみる。

場所は先輩のお家のリビング。私は先輩の大きなシャツを着ている。そして、ソファに押し倒されている。見上げた先には見たことのない表情をした先輩。

そして、ここが大事。先輩は怒っている。何に？それは、私の首筋に着いた赤い跡・・・いわゆるキスマークなのだ・・・。

当然、私に身に覚えはない。というかあってたまるか！

遡ること１０分前。

バスルームから出て、私は渡されたシャツに袖を通した。そして気付いた。履くものは？そう、渡されたのはシャツのみ。いわゆる大きなシャツから太ももが覗く、あの格好だ。渡された時点で気付

ければよかったのだが、気が動転していて気付かなかった。

仕方なくその姿で出て行ったのだが、里緒奈さんはご飯を作ったすぐに、迎えに来た未来さんの車でアパートへと戻ってしまったらしい。

それをいいことに、先輩は私を後ろからぎゅっと抱きしめてソファに座った。そこでちょっといやいや・いやいや、楽しくお話をしていたところ、押し倒されてしまった。

もしかして、ついに・・・なんてちょっとぴり期待して、かなりドキドキしちゃったのに、一瞬にして変わった先輩の表情で、その場の空気が一変した。

「・・・これ、何？」

「これ・・・？」

これ、と言われても私には何のことかさっぱりわからなかった。きよとんとしている私に、先輩はイラついたように、手鏡を持ってきた。そしてそこに映ったものは。

「・・・」

「キスマークだろ？虫刺されとか、古典的な言い訳すんなよ。見たらわかんだよ」

怖い、怖いよう。忘れてたけど、流石性格最悪な生徒会長を名乗るだけある。でも、これだけは私にも全然わかんないんだよ・・・。

「黙ってちゃわかんねえよ」

さつきまで幸せに包まれながら見上げていた先輩の顔だったのに、今は緊張と恐怖、不安が込み上げてくる。手鏡を奪い取られ、遮るものなくなつた私と先輩の間には、ピリピリした空気が流れる。

しばらくそのままの体勢で見つめ合つた。甘いものじゃない。蛇に睨まれた蛙、のような……。

すると、先輩がいきなり私の来ているシャツを脱がそうとしてきた。驚いて、咄嗟に襟をつかみ抵抗すると、今度は強引に唇を塞がれた。その行為自体はさつきと同じなのに、感覚は全く違つた。無理やりこじ開けて入ってくる舌が、私の恐怖を煽る。

ようやく解放され、やっとのことで言葉を発する。

「ちよ、ちよっと待ってくださいっ!」

「黙れ」

というこゝとで冒頭に戻る。

先輩は頭に血が上っているようで、私の言葉に耳を傾けてはくれない。このまま服を剥ぎ取られてしまうのか……。初めてがこんな状況なんて悲しすぎる。

頬を温かいものが伝う。それを見て、ようやく我に返つたのか私を拘束する力が弱まつた。だけど、まだ解放してくれる様子はない。

「言いたいことがあるなら聞く」

言いたいことと言われても、私にも訳が分からないのだから何と言っていいのかわからない。とにかく、誤解だということだけは伝えておく。

少し軟化した先輩の態度。だけど、まだ怒りは収まっていないんだということが言葉の端々から、そして私を見る目でわかる。

私には昨日の記憶がない。花火会場に先輩と里緒奈さんが戻って来たことも、どうやって帰ってきたのかも。だから、何かあったとするなら私の記憶がなかったときののだ。ということは未来さんに聞いてみたらいいのかも？と思って言葉を発したのだが・・・

「未来さんに、」

ピクリと先輩が私の言葉に反応した。そして、恐ろしく冷たい声で「あいつと・・・何した？」と言った。ホント、私昨日未来さんと何したの！？

昨日の出来事に対する不安と、先輩に対する恐怖や申し訳なさなどで頭の中がぐちゃぐちゃだ。考えても考えてもらちがあかないこの状況に、私の理性は吹っ飛んだ。

「もうわかんないですっ！・・・私が好きなのは先輩だけだし・・・こんな跡知らないですっ・・・！聞かれたって答えられないし・・・もうどうしたらいいんですかあ・・・」

今度は涙が頬を伝うどころじゃない。もう半泣き・・・いや、大泣きしながら叫んだ。

こうなると形勢逆転。さっきまで私に尋問していた先輩が、赤ちやんをあやすかの如く私を宥める。

なかなか興奮が収まらずに泣きじゃくる私に、だいぶ困惑しているようだけど、私もこうなったら昔から止まらない性質。ゆうくんが生まれてからはそんなことも少なくなっただけど、小さい頃はかなり泣き虫だったし、かなり我が儘だった。

「わかった、悪かったよ……だから泣き止んでくれよ」

「うっ……だっ、だ……て、せん、ぱいが、すっごく……お、こるし……」

「悪かったって……もう怒ってないから……」

「で、も……キスマーク……し、しら……な……わか……て」

「わかった、わかったから」

先輩が、私の拘束を緩めながら乱れたシャツを直してくれる。そして、自分の胸に抱きこみながら大きな手で私の頭を撫でる。先輩の服が私の涙で濡れてしまっているが、今の私にはそんなことを気に留める余裕はない。

まだ若干しゃくりあげるの背中をさすりながら、先輩はポケットからケータイを取り出した。ぼーっとしながらその様子を眺めていると、何やらメールを打ち始め、終わると再びポケットに戻した。

数分後、先輩のケータイに着信があった。その内容を確認すると、無表情のままケータイを閉じた。

「これから未来が来る。お前は帰るか？」



未来さんが……。きつと先輩は昨日の出来事を聞くつもりなんだ。それなら私も知りたい。でも、先輩は私よりも状況を把握しているはず。

「いえ、私もいます。でもその前に、昨日のこと……先輩の知ってる範囲で教えてくれませんか？」

「……本当なら忘れたままでよかつたんだが……」

との前置きがありつつ、先輩が話してくれた昨日の出来事はつまりこうだった。

先輩と里緒奈さんが帰ってきた時、酔っぱらった私は先輩と勘違いして未来さんにしつかりと抱きついていたらしい。そして、あるうことが未来さんの手もちよつと際どい所にあつたんだとか。……どこかは教えてくれなかつたけど。

当然それを見て怒った先輩は私と未来さんを引き離そうとしたのだが、突然現れた先輩を私は不審者とみなし、余計に未来さんにしがみついて離れなかつたそうだ。

ようやく私が未来さんから離れたのは完全に眠りについてからだつた。眠りについた私は無意識のうちに先輩に手を伸ばしたんだつて。それで先輩もちよつとは機嫌を直してくれたみたい。寝ている時にも感じることでできるもの……。きつとそれは先輩のいつもの香り。あの香りは私に大きな安心をくれるのだ。なぜかそれだけは確信をもつてそう思った。

「だから俺たちが戻ってくる前に何があつたか、それを確かめる」

聞かなきゃよかつた。でも、これで起きた時に先輩が機嫌悪かつたことも納得だ。

それにしても、未来さんにそんなことをしていたなんて、未来さんだけでなく里緒奈さんにも申し訳ない。そう言ったら先輩にきよとんとされた。

「姉貴とあいつは付き合ってないぞ？あいつが勝手に追いかけてるだけで」

ということは里緒奈さんにこき使われていただけ？そう思ったらちよつと未来さんが不憫に思えた。

## 浮気？（2）

未来さんを一瞬でも不憫に思った自分を、渾身の力を込めて殴ってやりたい。目の前にいるこの男の人は、私が思っていたほど一途でも、誠実でもなかった。

「そんなに怒るなよ。陽菜ちゃん可愛かったんだもん」  
「何が『もん』だ！いい加減にしろ！」

私は啞然、先輩は激怒。だけど当の本人はケロツとして「何が悪いの？」って顔。胸倉を掴まれて今にも殴られそうな状況に表面上は謝っているけど、絶対悪かったなんて思っていないのが丸わかり。

簡単に結論だけ言うと、未来さんは寝ている私にちよっかい出したみたいなのだ。まあ、運よく（？）首筋にキスされて跡つけられただけだったみたいだけど。でも本当にそれだけなのか、すっごく不安なんだけど。。。

「昔だつてよくやってたじゃん。今さらなんだよ」  
「昔は昔だ。陽菜には手出すな」

はぁ・・・昔はよくやってたのね・・・。噂では聞いていたけどいざ本人の口から聞かされるとちよっとショックかも。

複雑そうな表情をしてしまったのだろう。先輩はバツの悪そうな顔をして舌打ちした。

「そんなんだから姉貴もお前を信用できねえんだろっが！」  
「あゝ、そうなのかな？でも里緒奈の事は本気だよ。だから何年も

ヤツてない・・・」

「とにかくくっ！金輪際お前は陽菜に近づくな。次近づいたら容赦しないからな」

デリカシーのない話題を遮るように強引に話を終わらせ、先輩は未来さんの首根っこを掴んで玄関の外に放り出した。

外から「自分で呼んだくせに」なんて声が小さく聞こえるけど、聞こえないふりをしてドアを閉める。やっぱり若干不憫かも・・・？

いやいや、未来さんのしたことは全く理解不能だし、不憫なんて思っただけで近づいたら向こうの思う壺だし。もう未来さんには会えないと思うと少し寂しいけど、先輩の熱が収まるまでは会わない方がいいのかもしれない。

「というわけで、お前はもうあいつとは2人きりで会うなよ。町でばったり会ったら逃げろ。」

逃げろって・・・。そうしたら未来さんは思いつきり不審者に見られちゃうじゃない。でもきつと先輩なんてそれでもいいって言うんだろっな。

翌日、夕ご飯の支度をしているとお兄ちゃんが鬼の形相をして帰ってきた。花火の件なら昨日散々嫌味を言われて怒られたのに、まだ何か言うことがあるのだろうか。

「聞いたぞ」

「・・・何をよ」

「昨日のこと」

私は内心厄介なことになったと頭を抱えた。なんでもかって、今日一日がもつうんざりするくらい監視をされていたから。誰にかといえは・・・

「大翔先輩、大丈夫ですよ。私ちゃん和学校にいる間も、行き帰りも見張ってますから！もともと、学校が始まったら日向先輩がいるから私の出番はないですけどね」

最後の部分はお兄ちゃんの前では若干の禁句だったよ、葵。ほら、ちよつと眉間に皺が寄っちゃった。でも葵が傍にいてくれるのは安心みたいだし、私も心強い。

「それにしても未来さんが・・・いや、あの人の噂もいろいろあったしな。別に今さら驚かないけど、どうして陽菜なんだろうな」

「どういう意味？」

「未来さんは昔から手が早かったんだけど、なんていうか・・・まあタイプがはつきりしてんだ」

言葉を濁したお兄ちゃんに変わって、葵がなるほど、というように声を上げる。

「美人で知的なお姉さんがタイプってことですね！」

「まあそついうことだ」

なんでお兄ちゃんが濁した言葉を葵が代弁できるんだか。どうせ私なんて美人でもないし知的でもないしお姉さんでもないですよ・・・

。私だって葵くらいの色気があつたらなつて思ったことは1回じゃないけどさ、どう頑張つても無理だつたんだからしょうがないじゃない。

「じゃあ心配することないじゃない」

半ば投げやりな私に葵もお兄ちゃんも猛反発。結局よくわからな  
いままに2人のタッグが組まれたようだ。

ただ、陽翔には知られないでおこうと思った。理由は2つ。1つは陽翔は未来さんのことを崇拜しているから、そのイメージを壊さないでおきたいということ。そしてもう1つは陽翔の方が怒ると手  
がつけられないということ。

自分で言うのもなんだけど、陽翔は私にとつても過保護。大事に  
されていると思う。表面上では憎たらしいことを言っているけど、  
本当は私のことを思つて言つてくれているって知ってるの。

だから、陽翔には言えない。言つたらジレンマに陥つちゃう陽翔  
が目に見えるから。

それはお兄ちゃんも分かっていたみたいで、私の視線を感じて目  
で「分かつてる」つて。お兄ちゃんもよくシスコンって言われるけ  
ど、結局は陽翔の事も結翔の事も大好きなのよね。

「ところで、お兄ちゃんは誰から聞いたの？」

「日向しかいねえだろ」

それはそうよね。だって、あのことを知っているのは私と一樹先  
輩と未来さんと葵だけ。なんで葵が知っているのかというと、昨日

の帰り道で先輩が言い出したことに始まる。

『山本に連絡取れ』

『急にどうしたんですか？葵に？』

『いいから、出たら俺に代われ』

葵はいきなりの一樹先輩の声に驚いていたみたいだけど、『5分で来い』って言葉に大慌てで自転車を走らせてきた。だってあの葵が髪ばさばさで、思いつきり部屋着で、汗だくだったんだから。

『お前に頼みがある』

どうしたことが、あの恐ろしい生徒会長からこんな言葉が出るとは思っていなかった葵の目はもう開かないというくらい大きく見開かれていた。

だけど、その理由を聞いて葵は顔を真っ赤にして怒ってくれた。そして、さっきまでびくびくしていた一樹先輩に向かって堂々と『任せてください！』なんて言っただけだ。

『だけど、私その姉崎さんの顔知らないです』

『いい。寄ってくる男全部払いのけてる』

『了解です！隊長！』

いつの間に隊長と隊員の関係になったのか、2人は妙な連帯感を醸し出してしまった。そうなのだ、お兄ちゃんの時と同じことが実は昨日の段階で起こっていたのだ。お兄ちゃんが帰ってくるまで葵が家にいた理由は、もちろんこれだったのだ。

「まあ葵ちゃんに任せてれば、安心かもな」

「大丈夫です！姉崎さんだって、他の男だって、陽菜には指一本でも触れさせませんよ！」

葵の頼もしい言葉に安心しきつた私もお兄ちゃんも、廊下の隅で私たちの会話を息を潜めて聞いている影に誰も気付けなかった。



## 浮気？(2) (後書き)

更新が滞ってますみません。ストックはあるので、これからできるだけ最終回まで間をおかずに更新していきたいと思えます。

## 包囲網(1)

「ふうん、なるほどね。それで俺に黙っていられると思ったわけ？」  
「思っていない、です」

優雅にソファで足を組んで、私を訊問しているのはもちろん陽翔その人。妖艶な笑みは私だけでなく、葵をも凍りつかせる。とうとう葵にもその顔を見せてしまったのね。

「葵ちゃん」

「はいっ!？」

「今度から俺にも一言言っただけでなく、葵ちゃんのこと誤解しちゃうよ?」

「う、うん!わかったっ!」

陽翔の笑みにいつもならキヤーキヤー言っていた葵も、この日だけは背中を伝う冷や汗が止まらなかったらしい(後日談)。

「ねえ、未来さんのこと・・・尊敬してたよね」

「今でもしてるよ」

「こんな話聞いた後でも?」

恐る恐る尋ねたけど、陽翔は思いの外涼しい顔をしてさらっと答えた。なんだか拍子抜けだ。そんな私を見て、陽翔は大きく溜息をついた。

「あのね、俺をいつまでも子どもだと思わないで。未来さんを尊敬してるけど、それはプレーの話であって人間性ではないんだ。それに、未来さんの女癖の悪さなら俺だって聞いてるよ」

一般的な中学3年生は、こんなにドライな考え方はしない。だって、私のクラスの男子だってもっとお子ちゃまなのに、なんで陽翔はこんなに育ってしまったのだろう。

「半分は大翔のせいで、半分は陽菜のせいかもね」

「えっ、私！？っていつか私声に出た？」

「顔に出た」

なんか顔に出るって、前に誰かにも言われたような気がする。自分では全く自覚がないから始末が悪い。

「まあ、俺は未来さんがどれだけ里緒奈さんに入れ込んでるかっつてのは知ってるから、陽菜のことをそれほど心配はしていないんだ」

「え？」

驚いたことに、陽翔と未来さんはプライベートでも交流があったらしくて、2人で遊びに行ったりもしていたらしい。初耳だ。もしかして、陽翔がこんなに大人びてるのって未来さんの影響もあるんじゃないあ……。

「でも今回はやりすぎだよね……ね？ちょっとやりすぎだよね……」

なんだかぶつぶつ言っている陽翔がちょっと怖い。葵は身の危険を感じたのか、そそくさと帰り支度をして立ち上がった。だけど、部屋を出る寸前で陽翔に手首を掴まれてそれを阻止される。いつもなら赤面することだが、今回は逆に顔が蒼くなってしまうている。可哀想に……。

「葵ちゃん」

「な、なあに？陽翔くん」

葵、笑顔が引き攣ってるよ……。得意の作り笑顔が作りきれないよ……。

「今度の部活はいつ？」

「えっとね……。今長い休みに入ったところなんだよ。だから、次は20日……。かな？」

「わかった。朝、忘れずに迎えに来てね」

「り、了解です……」

顔を引き攣らせたまま、葵は帰って行った。きつともう20日間で葵に会うことはないな。そんな気がした。

「さて、どうしたもんかね」

わざとらしく大袈裟に溜息をついて私をちらつと見る。なんか偉そうな態度にだんだんイラついてきたぞ？

「うわーん！僕のだって！」

「僕が先だもん！」

隣の部屋から大きな声が聞こえてきた。実は、こんな話をしている脇で、無邪気な幼児2人が遊んでいたのだ。しかも、今日は悠大くんはうちにお泊り。なんでも悠馬さんが当直で、おじいさん、おばあさんが老人会の旅行だったらしい。

旅行を取りやめようとしているおばあさんを見たら、つい「家で預かります」って言っちゃったんだもん。そりゃあ子どもだけの家

に預けるのはすごく心配していたけど、近所の田浦さんとおばあさんがお知り合いで、田浦さんの話をしたらちよつと安心したみたいだった。

だけど、まさかこんな日になつちゃうとはね。申し訳ないけど、かなり放っておいてしまった。本当はちよつと遠くの公園に連れて行ってあげようと思っていたのに。

「大翔、結翔が呼んでる」

「俺かよ・・・そろそろ飯食わすから、こつち連れて来るぞ」

「了解。じゃあ話はお子様たちが寝たらね」

どうやら我が家の魔王様は話をこれで終わらせてはくれないらしい。いつそのこと、お子様たちと一緒に私も寝てしまおうか。

「寝かしつけるのは大翔だよ」

「また俺かよ・・・」

「陽菜だと一緒に寝そうだからね」

どうしてこつちも見透かされるんだろう。これはご飯が終わるまでに上手い<sup>かわ</sup>躱し方を考えないと、休みの間一步も家から出してもらえなさそう。

「さ、そうと決まれば早くご飯の準備しようか」

「わーい、ご飯ー！」

「陽菜ちゃんのご飯だー！」

隣の部屋から現れた小さな巨人たちは、初めはリビングキッチンを騒ぎまわっていたけど、最後にはちゃんと運ぶのを手伝ってくれた。

悠大くんが来るってことで、今日はハンバーグにしたのだ。予想通り、2人には大好評。おっと、違った。3人だった。実は陽翔はハンバーグが大好き。表には出さないように隠しているみたいだけど、ハンバーグの時だけ最後にそれを食べるんだよね。いつもは絶対に肉を先に食べるのに。そう言うところは子どもだよ。ちなみにお兄ちゃんは肉なら何でもいい人だ。

「あ、なっちゃん！いつくんはいつ来るの？」  
「ぶっ！」

ゆうくん、そんな不意打ちの質問ダメだよ。せつかくハンバーグで機嫌がよかった陽翔だったのに、またあの話題に逆戻りじゃない。

「いつくんね、いつだろうね・・・」

「あのね、今日いつくんに会ったよ。そしたらね、一緒に遊んでくれた。ね、悠大くん」

「うん！いつくんすげーんだ！僕たちにバスケ教えてくれた！でも1回もボール取れなかったよね」

「明日も遊んでくれるって！」

私たちは完全にアホ面になっていたと思う。だって、あの先輩が、幼児2人と遊んでくれたって？しかも、明日も遊んでくれるって？

「今日のいつ、どこで会ったの？」

「今日のお昼の前に、すぐその公園にいたよ」  
「本読んでた」

陽翔はそれを聞いて少し考えると、またあの嫌な笑みを浮かべた。今度は何を考えたんだろうか。

「陽菜。明日、2人と一緒に公園に行こうか」

「・・・はい？」

てつきり逆のことを言われると思っていたのに。だって結局は一樹先輩と花火に行ったかああいうことになったわけで、陽翔にとっては会わせたくない相手だと思ったのだが。

「学校では俺は見られないでしょ。そういうことならあいつの力を利用できるじゃん。・・・まあ、癪だけど」

どうやら彼は彼なりに葛藤して、妥協した結果がこれだったようだ。時折「あと半年の我慢かよ」なんて言葉を漏らしながら。もしかして陽翔、うちの学校受けるのかしら・・・。

## 包囲網(2)

「というわけで、金輪際あいつを陽菜に近づけないことにした。学校では俺らが目を光らせてるし、そもそもあいつは入ってこない。学校の外で俺がどうしても一緒にいられない時のために山本に頼んだ」

「まあいい判断ですね。俺でもそうしましたよ。家では俺が見てられるし、大翔もいるから大丈夫でしょう」

この真夏の公園で、朝っぱらから深刻な話をしている2人、もちろん一樹先輩と、陽翔だ。結局、1番敵対していた2人が、共通の敵を見出したことで、1番強固な結託をしたという結果になった。

みんながこんなにいろいろ策を練っているのを尻目に、私自身はそんなに危機感を覚えてはいなかった。

未来さんは確かに気を許してはいけない人だと思う。だけど、そんなに会う人じゃないんだから、あまり心配しなくてもいいと思うのだ。

それなのにこの2人ときたら・・・。流石のお兄ちゃんも今朝は若干呆れ気味だったもの。お兄ちゃんが呆れるんだから、相当だ。

「おい、当事者。ぼーっとしてんじゃねーよ」

陽翔に頭を小突かれて、はっと我に返る。話はどこまで進んだのかと尋ねると、2人にジロリと睨まれた。めんどくさい・・・。

「とりあえず今日はうちに来い。勉強するぞ」



「えっ!？」

一樹先輩、今なんて言いました？私の聞き間違いじゃなかったら、先輩のお家で、勉強？申し訳ないと思う反面、すごく嬉しいの。

だって、本当なら昨日から先輩は学校主催の夏期講習に3泊4日  
で出かけてる予定だったのを、急遽参加を取りやめたんだって。し  
かも私のために。

「まさか2人で籠るなんてこと、しないですよね？」

「さあな」

「俺も行く」

「来んな」

そんなアホみたいなやり取りも私の耳のは入って来ず、いったん  
勉強道具を取りにゆーくと悠大くんも含めた5人で私の家に向か  
ったのだ。

「うう・・・」

「泣くな。泣いてもどうにもなんねえだろ」

「そうだよ、泣いても今さら頭なんてよくならないんだからね？」

「大丈夫か、陽菜？少し休むか？」

「教えてやるから。こっちこい」

・・・私は別に泣いてない。泣きそうなだけだもん。その理由は、  
私の頭の悪さ・・・だけじゃないってば!

なんなの！？この状況！だいたい私を囲む男たちの声が1人分増えているって！ゆうくと悠大くんはさつき悠馬さんと一緒に遊びに行ったからいないんだ。だから、周りには先輩とお兄ちゃんと陽翔だけのはず。

それなのに聞こえてきた声は4人分……。それにせっかく先輩の家で勉強できると思ったのに……。

「もうっ！集中できないんだってば！それに何でいるんですかつ、皐月先輩っ！」

そうなのだ。今私たちがいるのは三崎家のリビングで、一樹先輩、お兄ちゃん、陽翔に加えてなぜか皐月先輩までいる。意味不明だ。第一なんで私の家を知っているんだろう。

ちなみに、さっきの声は1番最初からお兄ちゃん、皐月先輩、陽翔、一樹先輩だ。陽翔のベタ甘加減は昨日からおかしい。昔はもつと憎たらしいくらいだったんだけど、今の陽翔は優しすぎて逆に気持ちが悪い。

「いいじゃん。なんか楽しそうな感じだったし、未来さんに付き纏われそうなんでしょ？俺もあの人苦手なんだよね。ほら、何か俺とキャラかぶってるじゃん？」

まあそれは確かにね？かぶってるといえば否定はできないけど。でも、皐月先輩の方がやっぱりどことなく安心できるんだよ。最初はあるまり好きじゃなかったんだけど、何でかな。

「うわぁっ！」

じーつとにこにこしている皐月先輩を見つめていたら、大きな手が私の目を塞いだ。その拍子で私の体は後ろに倒れる・・・が、何かが当たってそれを支えてくれた。

「うわぁ！何！一樹が嫉妬！？マジウケる・・・っ！」

私は目隠しをされているから分からないけど、皐月先輩がものすごく爆笑している・・・。しかも喋れないくらい。きつと腹を抱えて笑っているのだろう。

でも、そんな皐月先輩の事より、『嫉妬』の方が気になる。先輩が、嫉妬？私が皐月先輩を見てたから？力のこもる先輩の（ものだと思われる）手が少し熱くなったのは、気のせいじゃないって思っているのかな。

「うるせえのは追い出すぞ」

お兄ちゃんが笑い転げる皐月先輩をジロリと睨む。それでも皐月先輩はなかなか笑いが収まらなくて、数分してようやく話ができる程度に落ち着いた。

「はぁ・・・っ。笑った、笑った。そんなに怒るなよ、三崎。だいたいお前と陽菜ちゃん似てねんだよ。こんなナイフみたいな奴と、こんな真綿のような子が兄妹なんて、天変地異も甚だしいよな」  
「・・・わけわかんねえよ。日本語おかしいし」

「あ、大丈夫。弟君はどこからどう見ても三崎の弟だ。見た目も性格もそっくりすぎ」

この2人は会話が噛み合っていない。もっとも、噛み合わせる気

もないようにも感じる。ところで先輩、早くこの目隠し取って欲しいんですけど……。

「いい加減にしろよ。その手早く離せ」

「黙つとけ、中防。だいたい何でここで勉強しなきゃなんねえんだよ」

「黙れ、似非生徒会長。お前が陽菜を家に連れ込んで何企んでるかなんて丸わかりなんだよ」

火花バチバチの2人を放っておいて、先輩の手が外れた隙にお兄ちゃんに分からないところを聞く。結局、1番冷静なのはお兄ちゃんなんだよね。皇月先輩は完全なる傍観者で何もしてくれないし。

「俺は確かにお前が大事だけど……」

「うん？」

「陽翔はまた別物だから……ま、気をつける」

「うん……？」

お兄ちゃんが言葉を濁すことは珍しいんだけど、今回はそれ以上突っ込んでくるなよ、という意味をその瞳に見て取れたので、とりあえず頷く。

陽翔は別物……。意味がよくわからないけど、最近の陽翔は確かに変だ。受験に向けてこれから大変な時期なのに大丈夫だろうか。夏休みの今の時期が大切なのにね。

### 包囲網(3)

私に厳重な包囲網が敷かれてから、約3週間が過ぎた。新学期が始まってしまったく解放してもらえない心配はない。あの時から今まで、未来さんは姿を見せていないっていうのに、まったく心配性な人たちだ。

ところで、夏休みが明けるとそろそろ部活の方は文化祭に向けた練習が始まる。クラスでの出し物の方はまだまだ余裕があるけれど、吹奏楽部は練習があるから、早めに動きださなければならぬのだ。

それに、大会が終わって3年生が引退し、新体制になってから初めての人前での演奏。私たち1年生以上に2年生の気合は並々ならない。

夏休み中から選曲をして、新学期が始まってようやくすべての曲が決定したのだ。私にとっては初めてのレギュラー入り(と言っても大会以外は全員がレギュラーみたいなものだけど)。練習にも熱が入る。

「陽菜。そろそろ時間だよ?」

「え、あー・・・もうこんな時間?もつと練習したかったのに」

「私は残って練習していくよ。だから今日はお迎えいらないうつて言いなよ」

「ホント?嬉しい〜。ありがとう!」

学校が始まってから、部活などで帰りが遅くなったときは1人で帰してもらえなくなった。大学はまだ夏休みだから、どこで会うかわからないっていうんだけど、それにしても私の自由度が少なすぎ

る。

しかも先輩と一緒に帰るのもダメ。お兄ちゃんか陽翔が迎えに来ることになった。陽翔曰く、「あいつでも未来さんでも同じことだ」って。全然違うのに。先輩もそれに関して文句を言うことをしなかった。ちよつとくらい反論してくれたっていいのに……。

そんな中で受け入れられた私の主張は「葵と一緒になら迎えは来なくてもいい」というものだった。もつとも、葵が帰る時にはだいたい大谷君がついてくるからっていいのもある。

「でも、今日は修也一緒じゃないけどいい？」

「いいよ！お兄ちゃんたちにバレなきゃいいんだし」

「あ、先輩に連絡しなよ。私と一緒に帰ってることにして、デートしちゃうな」

「ああいゝ……！」

私は葵にギュッと抱き着いた。こんな時に葵がいてよかった。私は意気揚々と先輩にメールを送って、練習をしながら返信を待った。

同時に、お兄ちゃんと陽翔にもメールを送って、葵と一緒に練習してから帰るから遅くなることを告げた。

今日は金曜日だったということもあり、みんなデートなのか知らないが今日は残って練習する人が少なかった。私たちのパートには私と葵の2人だけ。他の部屋から聞こえてくる音を聞いても、残っているのは4、5人といったところだろうか。

静かな教室は、自分の音がよく聞こえるので練習に集中できる。ふと、時間が気になって時計を見るともう既に居残り練習を初めて

1時間近く経とうとしていた。

「葵、もうこんな時間だよ。そろそろ帰らない?」

葵も練習に熱中していたみたいで、時計を見てびっくりしていた。

「日向先輩から連絡きた?」

「あっ!」

それすらも忘れていて、慌ててケータイを取り出すと、大量の返信と、着信。

「うわぁ・・・最後の方怒ってる・・・」

「そりゃそうだよ。1時間の放置プレイか?」

「ひぁっ!」

いきなり背後から聞こえてきた低い声に、思わず楽器を落としそうになりながら振り返る。そこにいたのはもちろん、若干の不機嫌さを醸し出している一樹先輩。

「すみません。今帰る支度します!」

「おう。山本」

「はいっ!」

不機嫌な先輩に関わらないように距離を置いてひっそりと片づけていた葵を、先輩が呼び止める。

「遅くねえか?」

「いや・・・あの・・・すみません!忘れてました!っていうか私も陽菜と帰りたかつたんですっ!」

葵は冷や汗をだらだら流しながら半泣きで弁解する。私には2人が何のやり取りをしているのかさっぱりわからない。先輩はというと、呆れながら葵に向かって大きな溜息をついた。

「いい。俺も文化祭に向けて忙しかったからな」

「ありがとうございます。でも、独り占めしないでくださいね・・・さよならっ」

最後は尻すぼみになりながら、葵は先に行ってしまった。どういうこと？という表情をしていたのだろう。先輩が私の荷物を半分持ちながら話してくれた。

「山本に言っただけだよ。お前と帰ることにして俺のところに寄らせて」

「寄らせて・・・」

私はものじゃないんだけど・・・と思う反面、嬉しかったり。照れ隠しに鞆を顔の位置まで持ち上げて両手で強く握ったら、先輩に笑われた。バレバレです・・・。

「先輩、陽翔が言い出した時に何も言わなかったら、別に一緒にいなくていいのかなって、ちよっと思っただけです」

「・・・バカか。あそこで反論したらもっと強固な包囲網が敷かれるだろうが。ああいうのは好きにやらせておいて、従ったふりしとくんだよ。まあ、三崎はこうなってるって大体わかってんじゃねえ？」

確かに、お兄ちゃんは陽翔がこの案を言い出した時に、微妙そうな顔をして「無駄だと思うけど」なんて言っていたわけ。陽翔も私



もまったく考えてなかったのに。意外と陽翔っておバカさん？

「で、今日はまっすぐ帰るなんて言わないよな」

「はい？」

そう言うと、先輩が大きな手で私の手を包み込んだ。久しぶりの先輩の香り。どうしようもなく胸が高鳴っていく私に、きっと先輩は気付いてる。

「家、来いよ」

包囲網(4)

帰りに、先輩がお腹が空いたって言ったから、軽くカフェでお茶をしてから先輩の家に行くことにした。

「バイク停めて来るから、ちょっと待ってる」

そう言われて私はお店の前で、ちょっと離れたところにある駐車場に行った先輩を待っていた。

そういう時を見計らって、姿を現すんだね……。

「や、陽菜ちゃん」

「み……未来さん」

約1か月ぶりに見た未来さんは、以前よりも日焼けしていて、男らしさが増したような気がする。

「あの後陽菜ちゃんに謝ろうかと思ったんだけど、なかなか会わせてもらえなくてさ。今は大丈夫？」

「あの、一樹先輩が駐車場にバイクを停めに行ってます」

「あー、この店の店の駐車場遠いからね。でも一樹がいなくてよかったですか。いたら俺殴られるだけじゃ済まないし。だから、ちょっとだけその路地で話そう？」

「はあ……じゃあ、ちょっとだけ」

ちょっと迷ったけど、目の前の未来さんは本当に申し訳なさそうで、話くらい聞いてあげたいという気持ちにさせられた。それに、未来さんが先輩と顔を合わせられないっていうのもわかる気がする

し。

私たちは店のすぐその細い路地に向かった。人通りか少なく、薄暗いのが気になったけど、すぐに終わるだろうとそんなに気にしなかった。

「あの時は本当にごめんね」

「いえ、私も酔っぱらっちゃって・・・」

本当のことを言うと、私には記憶がないので、未来さんに何かされたという自覚はない。だから、本人が認めたと言っても、1カ月経った今では未来さんに対してそれほど嫌悪感を感じてはいなかった。

「許してくれるの?」

「まあ、いいですよ」

「ありがとうございます!」

と、お礼を言いながら未来さんは事もあろうに私の体を抱き込んだ。派手なスキんシップに耐えていると、しばらくしてようやく体が離れた。そしてそのまま、顔が近づいてくる・・・。

「待って、何やってるんですかっ!」

「っ?」

未来さんの口をすんでのところまで手で抑えるが、体は未来さんの腕でがっちり引き寄せられており、離れることができない。

「おかしいでしょ!放してください!」

「もがっ・・・」

口を塞がれて放すことができないのに、私を離してくれない。これではこのまま動くことができない。

「あつ！てめえ何やってんだ！」

「先輩っ！」

そろそろ私の手も疲れてきたタイミングで、先輩が私たちを見つけてくれた。先輩の姿を確認した未来さんは、ふうつと息を吐いて、ようやく私の体を解放してくれた。

一樹先輩は解放された私を自分の後ろに隠しながら未来さんを一発殴って後ろに飛ばした。未来さんは口から血を流しながらも、どこか薄く笑みを浮かべているようにも見えた。

「ダメだよ？陽菜ちゃん1人にしちゃ」

「てめえが言うな！」

「ちよつとキスだけって思ったんだけど、ダメだつて。でも陽菜ちゃん抱き心地いいねえ。里緒奈から乗り換えちゃおっかな？」

そうだ。未来さんは里緒奈さんの事が好きはずなのに、なんでこんなことばかりするのだろう。

「ふふつ、陽菜ちゃん。不思議そうな顔だね。何で好きな人がいるのに他の女に手を出すんだらうつて」

う、バレてる……。だって、そんなことしていたら余計に里緒奈さんは振り向いてくれないんじゃないかな。

「あのね、男と女はいろいろあるの。まだ陽菜ちゃんにはわからないな

いかもね」

さらっとバカにされ、カチンと来て言い返そうとしたのだが、先輩にそれを止められる。

「あいつと話してるだけ時間の無駄だ。行くぞ」

そのまま、強い力で路地から連れ出されて、お店には入らずに駐車場に向かった。そして、ヘルメットをかぶせられながらお説教が始まった。

「1人にしたのは俺が悪い。だからってなんで狭くて暗い路地になんて入る！？それもあいつと一緒に入ったら襲ってくれって言ってるようなもんだろ！？」

「だって・・・すみません」

「あいつが気まぐれでよかったものの、本気だったら陽菜の力じゃ抵抗できねえんだぞ！」

何か言い返そうとしても、もつともな先輩のお説教には何も返す言葉がない。しゅんとして頂垂れている私をバイクの後ろに乗せると、先輩はそれ以上何も言わないで駐車場を出た。

先輩の部屋で、私たちはただ黙って紅茶を飲んでいた。先輩の機嫌はまだ直らず、ずっと眉間に皺が寄っている。

私の勝手な判断と行動が、先輩を怒らせてしまった。どうしよう。

呆れてしまったかもしれない。そう思ったら、視界がぼやけてきて、涙が溢れてきたことに気が付いた。

「・・・何泣いてんだよ」

「だって・・・」

先輩は少しだけ表情を和らげて、指で私の頬を伝う涙を拭った。

「先輩、怒ってます」

「まあな」

「私が、全然警戒していなかったから」

「そうだな」

「嫌いにならないで・・・」

私の絞り出すような声に、先輩はどこか呆れたように大きな溜息をついた。そして私の体を引きよせてぎゅっと抱きしめてくれた。さっきの未来さんとは違って、とても心地よくて、落ち着く。

「嫌いになつてたら苦労しねえな」

「え？」

「お前が他の男に触れられてるのを見るだけで、苛立ちが収まらねえ自分が腹立つな」

「せんっ・・・んあっ」

そのまま私の唇は、先輩に塞がれて言葉を発することができなくなった。次第に荒くなっていく呼吸が、未だに残る残暑と相まって私の体を熱くしていくような気がする。

静かな室内に響く水音に気が付くと、胸の鼓動が速くなっていく。呼吸が乱れ、互いの舌が絡み合っていくうちに、先輩の手が制服の

中に入り込んできたことで、私の心臓は破裂寸前だった。

いくら過保護な兄弟と一緒に育ったとはいえ、知識はそれなりにある。女子高生の会話なんてそんなものだ。特に夏休みが明けて、その手の話題はクラス内で尽きることがなかった。

だけど、知っているのと体験するのは全く別だ。先輩となら、嫌じゃない。だけど、心の準備ができていない。どうしたらいいのだろうか。軽くパニックだ。

「ふっ」

先輩が鼻で笑った。今そんな笑うようなところだった？

「落ち着け。俺としてはこれでも我慢した方なんだが・・・嫌ならやめる」

先輩の余裕そうな表情に、少しだけ冷静さを取り戻した。今ならやめられる。だけど、私は・・・

「嫌じゃ・・・ないです」

その返答が意外だったのか、少し驚いたような顔をしたけれど、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

「言ったな？後悔すんな」

「しません。先輩、好きです」

「俺も好きだ」

初秋の夕日が今にも落ちそうなか、私と先輩はきつく抱きしめあ

つ  
た。



## 未来

窓から差し込む朝日が眩しくて目が覚めた。体が思うように動かない。しばらくは頭がボーっとして考えられなかったのだけれど、だんだん覚醒してくると、昨日の出来事が鮮明に蘇る。

「・・・っ」

恥ずかしさに1人悶えていると、私の横にある鍛えられた胸と、私の腰に絡みついていてたくましい腕に気が付いて、また悶える。

私、昨日……。その現実がにわかには信じられずに先輩の寝顔を見つめながら思った。夢ではないかと。だけど、体のたるさと下腹部の鈍痛は紛れもない証拠となり、今さらながら顔が赤くなる。

「何朝から百面相してんだ」

「ひゃあっ!」

さっきまで規則正しい寝息をたてていたはずなのに、今はくつくと笑いながら私を眺めていた。

「まだ寝てるよ。今日は土曜だし、寝たの朝方だろ」

「でも、私よく考えたら家に連絡してないんです・・・」

無断外泊・・・考えただけでも家に帰りにくい。

「心配するな。昨日連絡入れておいた。『あいつがうつうつしてるから今日は俺んちに泊める』って」

それって、彼らにとって心配しなくてもいいような内容になったのだろうか。余計に帰りにくい。

「俺んちはあいつら知らねえだろ。だからゆっくりしてろよ」

まあそうなんだけど、気持ち的にゆっくりできないんだよね。

「いい加減ブラコンも卒業しろよ。俺が考えられないようにしてやってもいいけど」

「ちょ……どこ触ってるんですか」

「お前の頭の中から三崎たちを追い出すために」

寝起きの先輩はいつもと違っていた。ずらっ子のようでちょっと可愛い。だけど、その体や力強さはやっぱり男の人で。

「んあっ……」

結局、私が再び目を覚ましたのはお昼近くになってからだった。

目を覚ますとベッドに先輩の姿はなく、階下からいい匂いが漂ってきた。それに刺激されたのか、お腹がぐゅゅと鳴った。

部屋を出ようと思って制服を探すが、どこにも見当たらない。昨日どこに置いたのか記憶はないが、部屋の中にあるはずなのだが……。

シーツをめくって探しても、どこにも見当たらない。しばらく探すうちに階段を上がってくる音が聞こえたので、慌ててシーツで体を隠す。

「起きたか。さっき姉貴が来てお前の制服アイロンかけてった。ついでに着替えも置いてった。シャワー浴びてそれ着てるよ」

里緒奈さんにアイロンを・・・？いやー！それってどう考えてもバレたってことじゃない。それは恥ずかしすぎる。でも、着替えには感謝だ。

「姉貴に怒られた。『陽菜ちゃん泣かせたら許さないからね』って「そんな・・・」

「でも、これから話す事はもしかしたら泣かすような事かもしれない」

「え・・・」  
「とりあえずシャワー浴びて来いよ。話はそれからだ」

半ば無理やりバスルームに押し込まれながら、私は不安で胸がいっぱいだった。今朝まで感じていた幸せが、一瞬にして凍りついたようだった。

先輩は何を話すのだろう。もしかして、1回抱いたらもう飽きちゃったのだろうか。ううん、そんなことないって信じたい。それに、さっきの先輩の表情は、今まで見たことがない表情だった。

逸る気持ちも、聞きたくない気持ちも両方抱えながら、私は無意識のうちにシャワーを終え、リビングに立っていた。

それに気づいた先輩は「メシだ」と言って、ホットサンドとコー

ヒトを出してくれた。忘れていた空腹感を思い出した私のお腹は、再び大きな音を鳴らした。

「つぷ・・・食べよ」

笑いを押し殺しながらご飯を勧める先輩。恥ずかしさを隠しながらソファにすわそうとしたらそれを阻止され、ソファの下のカーペットに座らされた。ローテーブルだから床でも問題はないので、そのまま床に座ってご飯をいただくことにした。

食べ始めてしばらくすると、先輩がドライヤーを持って私の後ろのソファに座った。どうやら髪を乾かしてくれるみたい。

「後で自分でやりますよ」

「黙ってやられてる」

あの先輩が、私の髪の毛を乾かしてくれるなんて、信じられない。だけど、人に髪を弄ってもらうのってとても気持ちがいい。それが先輩の手だと思つと、余計に心地よい。

食事を終える頃には、私の髪はすっかり乾いていて、ご丁寧なことにブローまでしてあった。私は食器を洗うとソファに腰かけている先輩の隣に座った。

「それで、先輩の話って・・・」

「ああ・・・」

もう待っていることが苦痛で、私の方から話を切り出してしまった。先輩も話し始めるタイミングを見計らっているようだった。

「俺・・・東京の大学に行こうと思ってる」

東京の・・・大学・・・。なんとなく考えないようにしていた、先輩の進路。だけど、もう9月で、この話は避けて通れないのだ。

「これは前から決めてたことで、地元の大学と思ったけど、やっぱり俺は親父の許で親父の仕事の後を継ぎたいんだ。それは前から思っていたし、両親もそれを望んでいる。こっちの高校に残ったことは俺の最後のわがまま」

先輩のご両親は全国を転々としているのだけど、実は会社を経営している社長さん（会長さんだっけ？）なのだ。全国規模のファミリーストランを経営する先輩のお父さんは、視察と称して数年おきに全国のオフィスを転々とするのだとか。

「本社は東京なんだ。だから俺は転々とする両親に代わって本社で仕事をすることになると思う」

先輩の決意は揺るがない。それはそうだろう。だって、私と出会う前から決めていたことだったのだから。

「だけど・・・」

今まで下を向いていた先輩が顔を上げる。

「俺は中途半端な気持ちでお前と付き合いだしたわけじゃねえ」

うん、それは感じるよ。ちゃんと先輩は私のことを考えてくれているって。

「だから、俺は東京に行ってもお前の事しか見ないと断言できる。待っていてくれとは言わない。それだけ知っててほしい」  
「・・・っ」

涙が溢れた。今の気持ちを言葉で表そうとしても、適切な言葉が見つからない。嬉しい？ 悲しい？ そんな単純な言葉では表現できない。だけど、これだけは言えた。

「好き」

不意打ちの告白に一瞬目を丸くして驚いた先輩。だけど、すぐに笑って答えてくれた。

「知ってる」

これから卒業までの半年で、私たちはどれだけ強固な絆を作っていけるのだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7866r/>

---

ひまわりと狼

2011年10月7日00時03分発行